ボンボンと悪夢

星 新一

新潮文庫

美と語りあうひと時
新潮美術文庫
スーラ
ヤング行動派のアイドル
Shincho Art Library
価600円

カバー 真鍋博

ボンボンと悪夢

星 新一

新潮文庫

ボンボンと悪夢 星 新一 新潮文庫〔草〕九八E

ふしぎな魔力をもった椅子……。雪の夜の侵入者……。あくびの出るような平和な地球に、突如出現した、黄金色に輝く奇妙な物体……。宇宙に、未来に、平凡な日常生活の中に、ユニークな想像力と、シャープなインテリジェンスで描き出される、サスペンス、ミステリー、ユーモアあふれるショート・ショート36編を収録。

¥ 240

〜〜新潮文庫〜〜
星 新一の作品

ボッコちゃん
ようこそ地球さん
気まぐれ指数
ほら男爵 現代の冒険
ボンボンと悪夢
悪魔のいる天国

カバー印刷 錦明印刷

新潮文庫

ボンボンと悪夢

星　新　一　著

新　潮　社

ボンボンと悪夢

星　新　一　著

新潮文庫

ボンボンと悪夢

星新一著

新潮社版

2215

目次

椅子……………………九
雪の夜…………………一五
処方……………………二〇
凝視……………………二六
夜の道で………………三一
夢の男…………………三五
利益……………………四二
不運……………………四八
症状……………………五六
顔のうえの軌道………五九
友を失った夜…………七一
健康の販売員…………八三
むだな時間……………九〇
乾燥時代………………九九
四人……………………一一三
白昼の襲撃……………一二四
転機……………………一三八
宇宙のネロ……………一四一
オアシス………………一四九
賢明な女性たち………一五一
宇宙の指導員…………一五九
上流階級………………一六六
夜の侵入者……………一七八
鋭い目の男……………一八六
再認識…………………一九二
目撃者…………………一九八
報告……………………二〇四
循環気流………………二〇九
専門家…………………二一五
年間最悪の日…………二二〇
模型と実物……………二二四
老後の仕事……………二三一
悪魔のささやき………二三八
組織……………………二四五
報酬……………………二五六
すばらしい食事………二六四
解説　各務三郎

カット　真鍋博

ボンボンと悪夢

椅子

彼の家をさがすのには、ずいぶん手間がかかった。私の運転手は何回も車をとめ、ごみごみした横町のタバコ屋や酒屋で聞きまわらなければならなかった。

「どうだ、わかりそうか」

という私の問に、もどってきた運転手は答えた。

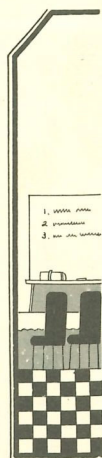
「はい。もう少し先のようです。しかし、社長のご親友が、なんでこんな所に住んでおいでなのです」

と、なっとくできない様子だった。私は大学を出て二十年、苦労を重ねたあげく、小さいながらも会社を経営する身分になれた。その私の親友が町はずれのこんな薄よごれた所に住んでいることが、運転手にはふしぎに思えたらしい。もっとも、私にも彼がなぜ落ちぶれたのかわからなかった。

「いや、わたしにもよくわからんのだ。彼とは大学が同級だったし、特に親しくつきあっていた。ふたりとも母親を早くなくしたせいだったろう。おたがいに友だちの母親をうらやましがったり、幼いころの母親の、かすかな思い出を話しあったりしたものだ」

「学校を出られてから、そのかたはどうなさったのです」

「彼は貿易会社に入り、欧米各国を飛びあるいていた。業界のうわさでは、じつにやり手だという評判だった。それがなぜ、急に仕事をやめ、こんな所にひっこんでしまったのか、わけがわからん」
「帰国したあと、お会いになったのですか」
「ああ、しばらく前に一回やってきて、金をかりていった。そして、それっきりなのだ。しかも、金をかりにきたくせに、落ちぶれたという表情ではなく、にこにこと明るい様子で、からだのぐあいも悪くなさそうだった。まったくわけのわからん話じゃないか。思い出すたびに気になるので、その時に聞いた住所をたよりに、きょう訪れてみる気になったのだ」
　自動車は細い路地をのろのろと進み、とまった。
「ここのようでございます」
　運転手はこういって車のドアをあけた。よどんだような臭気が入ってきた。
「ひどい所だな」
　私は車を下り、彼のおいていった借用証をポケットから出し、その住所と近くの門標とを照らしあわせてうなずいた。その家は、傾きかけた安アパートだった。ぎしぎし音をたてる階段をあがり、名札を見てゆくと、その一部屋に彼の名前を見いだすことができた。
「どうぞ……」
　ノックにこたえて、なかから聞きおぼえのある彼の声が響いてきた。ドアをあけて入ると、そこは日のよく当らない、よごれた室内だった。そのせまい部屋のまんなかの椅子(いす)にかけている彼

は、私を見てなつかしそうに声をかけてきた。
「やあ、きみか。しばらくだな。よくたずねてきてくれた」
「しばらくもないぜ。いったい、どうしてこんな所に住むようになったんだ。仕事に失敗でもしたのか、それとも、からだでも悪くしたのか」
　と私はすぐに疑問をぶつけた。
「いや、べつに……」
　彼の返事をまつまでもなく、その表情には失意もやつれもなく、明るいあどけなささえみとめられた。それはこの部屋に不釣合いであったが、この部屋に不釣合いなものは彼の表情のほかに、もう一つあった。彼のかけている椅子だった。その古びた大きな椅子は、やわらかな曲線とふっくらした感じを持ち、あたりの見すぼらしさと奇妙な対照を示していた。
「いい椅子じゃないか」
　と、私は聞かずにいられなかった。彼はうなずき、ひじをのせる部分を目を細めてなでながら答えた。
「これはドイツに行っていた時、田舎町の古道具屋でみつけて買ったものだが、じつにすわり心地がいいんだ」
「ドイツというと、きみはそこを最後に会社をやめたのだったな。なぜやめたんだ。まだ働き盛りなのに」
「なぜってこともないが、なんだか働く気がしなくなってね」

と答えながらも、彼は椅子にかけ満足そうな様子だった。

「見たところのんきそうだが、金でもたまったのかい」

「いや、こんな所に住んでいるんだから、察しがつくだろう」

私は彼に貸しがあったことを思い出した。

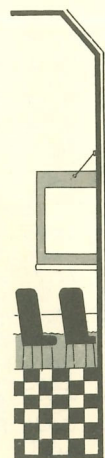
「それなら働いたらどうなんだ。きみぐらいの手腕があれば、どこでも迎えてくれるぜ」

「せっかくだが、働く気がないんだ。ぼくは今のままで満足だよ」

私は彼がかくも怠惰で情ない状態になったことに、いささか腹をたてた。

「きみがこんなになるとは思わなかった。どうも見そこなっていたようだ。もうきみとは、つき合いをやめるぜ」

「そうかい」

彼は依然としてにこにこしながら答えた。私

はそれで、さらにかっとなった。

「なんということだ。きみは人間のくずになり下ってしまったのだ。だが、絶交する前に、このあいだ貸した金をかえしてもらおう。きみとは学校時代からのつき合いだから、事情があるのなら、無理に取り立てはしない。しかし、ぼんやりと椅子にかけ、なにもせずに過ごしていたいのなら、こっちに金を返してからにしてくれ」

「そういわれたって、金はないよ」

「金がないのなら、その椅子をもらってゆく」

私が強い語調でこう言うと、彼ははじめてあわてた様子になった。

「ま、待ってくれ。この椅子だけはかんべんしてくれ」

彼に貸してある金は、たいした額ではなかったが、私も意地になっていた。

「なにも椅子がほしいわけじゃあない。金さえかえしてもらえばいいんだ。そんなに大事な椅子なら、金をかえしてもらおうじゃないか」

「金はかえせそうにないんだ。しかし、この椅子だけは持ってかないでくれ」

私は承知しなかった。

「だめだ。この椅子をあずかっておく。きみはからだも悪くなさそうだし、才能だってあるんだ。心を入れかえて、出なおして働いたらいいだろう。そうすれば、こんな椅子ぐらい、いくらでも買えるようになるさ」

どうやら彼を堕落させた原因は、この椅子にあるらしかった。彼を立ちなおらせるには、この

椅子を取りあげなければならないのだろう。

友情のために、私は少し手荒なことをした。窓から首を出して、待っている運転手を呼びあげ、手伝わせて、いやがる彼を椅子からひきずりおろし、その椅子を運び出してしまったのだ。

それが、この椅子だ。

私は社長室に運ばせた問題の椅子を、ひとりでじっとながめてみた。やさしい、流れるような曲線を持ったその古びた椅子は、腰かけるようにと私を誘惑し、私はそれに負けた。

やわらかく、ふっくらした、どことなく温かみを含んだ感触が伝わってきた。ずっと求めつづけていたなにかに似た感触。

それがなにか思い出そうとつとめ、やっとわかった。そして、彼があんなになった原因が、やはりこの椅子にあったことを知った。

母親のひざに抱かれている感触だった。幼いころの、遠い記憶の雲に包まれてはいるが、それはたしかに、あらゆるいやなことから守られ、すべてを忘れさせる母親のひざの上にいるのと同じだった。

私は目をつぶり、それを味わった。

「社長。なにか楽しそうですね。ところで、そろそろ会議の時間ですが」

秘書の声が聞こえてきた。だが、もう会議なんかどうでもいい。なにがどうなろうと、この椅子から離れることなどできるものか。

雪の夜

夜ふけ。この古めかしい家はわりあいに広く、しかも大通りからはなれているので、なかには冬の静かさがすみずみまで行きわたっていた。しかし、そのなかの一室の片すみ、暖炉のなかでは暖かく、赤い炎が忙しげに動きまわっていた。

「なあ、そとでは雪が降っているのではないだろうか」

椅子にかけ、火に手をかざしながら、年とった男がつぶやくように言った。その声は、赤い火に浮き出させられている顔と同じように、しわの多い響きをおびていた。

「ええ、そうかもしれませんわ。妙に静かで……」

と、やはり並んで椅子にかけている彼の妻が答えた。彼女もしわの多い手を火にかざしていた。

「こんなに静かな夜だと、あの子の勉強もはかどるだろうな」

老人は顔を心持ち上にむけた。

「そろそろ疲れたころでしょう。暖かい紅茶でもいれて、二階に運んでやりましょうか。あまり根をつめて勉強をつづけるのも、よくありませんでしょう」

「いや、あまり邪魔をしないほうがいいんではないかな。わしもさっきから、火をながめながら

学生時代のころのことを思い出していたところだ。あまり親が気を使うと、責任を感じすぎて、かえって勉強に身がはいらなくなるものだ。あの子も一段落し、なにか飲みたくなったら、ここにおりてくるだろう。その時にいたわってやったほうがいい」

「そういうものかも知れませんわね。あたしもさっきから、卒業試験で苦しんだことを考えていました。雪の夜というものは、むかしを思い出させる力を持っているのでしょうか。あの子もぶじに卒業試験を終えてくれるといいですわね」

暖炉の炎はときどきぱちぱち軽い音をたて、老いた夫婦の会話の切れ目を埋めた。

「ああ。若いころというものは、なにもかも苦しいことばかりだが、われわれのように年をとると、すべてが明るく楽しい思い出に変ってくるものだ。双眼鏡をさかさまにのぞいた時の景色のように、遠く、美しく、充実している。恋愛でさえ苦しさのひとつだった。恋を楽しいといえるのは、年とってふりかえってみた時の言葉だろうな」

「そのお話の恋とは、どなたに対しての恋なのです」

彼女は笑いながら、からかうような口調で言った。

「もちろん、おまえのことさ。あのころはまったく夢のように過ぎてしまったな。われわれは結婚し、そして、あの子がうまれた」

男はまたちょっと二階のほうを見あげた。

「ええ、子供をひとり育てるのも、決して簡単なことではありませんでしたね。あの子も小さなころは、あたしたちにずいぶん手を焼かせましたね」

火がひとしきり勢いよくはぜ、白い灰が音もなく崩れた。

その時、すべての静かさを破って、玄関のほうでベルの音がした。二人は首をかしげながら、顔を見あわせた。

「だれかが来たようだな」

「あの子の友だちの一人では……」

「まさか。こんなに夜おそくたずねてくる友だちは、ないはずだ。どれ、わしが出てみよう」

老人はゆっくりと腰をのばし、スリッパの音をたどたどしく立てながら、玄関にむかった。硬い金属的な響きをさせ、老人は鍵（かぎ）をはずし、ドアを引いた。寒い風が雪を含んで流れこんできた。

「どなたさまでしょう」

「だれでもいい。おとなしくして、声をたてるなよ」

こう言いながら、見知らぬ男はよごれたオーバーのポケットから、刃物のようなものを出した。

「そんな乱暴なことを……」

「さあ、おとなしく案内するんだ」

男にこづかれ、老人は仕方なく歩き、暖炉のある部屋にもどされた。それを迎えた妻は、立ちあがりながら言った。

「どなたなの。やはり息子のお友だちのかたでしょうか」

「おあいにくだ。おれは金をいただきにきたのだ。金目のものさえもらえば手荒なことはしない」

男の手にある刃物は、赤い炎の色を映して、無気味に光った。

「は、はい。わたしたちは年よりです。手むかいをしてもかなわないことぐらい、よくわかっております。なんでも欲しい物をお持ちになって、帰って下さい。だけど、二階にだけは行かないで下さい」

「なんでそんなことを言う。さては、なにか大切なものでも置いてあるのだろう」

それに対し、老人は手を振った。

「とんでもありません。息子が勉強しているのです」

「そうか。あまり静かなので気がつかなかった。すると、油断はできんな」

「あの子だけには、けがをさせたくないのです」

「おとなしくしていれば、けがはさせんさ」

「しかし、あの子はいざとなると、むこうみずな所があって……」

「そうなると、ますます落ち着いて家さがしもできない。まず、そいつを縛ってから仕事にかかろう」

「お願い。それだけはしないで」

と、二人は声をそろえて言ったが、相手は首を振った。

「なにを言う。そんな事にいちいち遠慮していたら、仕事などできるものか」

男は足音をしのばせて、二階への階段をあがっていった。二人にはそれを止める力はなく、また、大声をあげることも、逃げることもできず、ただ気づかわしげに顔をみつめあうばかりだった。暖炉のたきぎが大きく崩れた。

悲鳴と、それにつづいて階段をころげ落ちる音。

老人はおそるおそるのぞき、妻に言った。

「あの子がやっつけてくれたよ。よかった。早く警察へ電話を……」

闇を飛ぶ怪鳥のような叫びをあげ、まもなくパトカーがこの家に来て、警官たちが侵入者を連れ去った。寒い戸外に引きたてられながら、男はぶつぶつと自嘲めいた言葉をもらした。

「とんでもない息子がいたものだ。まっ暗な部屋のなかから、だしぬけにおれを突きとばしやがった。だが、どうして感づかれたのだろう」

このつぶやきは警官たちに聞こえなかったとみえ、警官たちは彼らなりの会話をかわしていた。

「二人はしきりに、息子がつかまえた、と言っていたが、ほかにだれもいないじゃないか。頭がおかしいのではないのか」

「いや、気ちがいというほどのものではない。ただ、数年まえに、学生だった一人息子が、冬山で死んだことを、まだ認めたがらないだけなのだ。あの二人に言わせると、息子は二階の部屋で、いつもおとなしく勉強をつづけているのだそうだ」

雪はつもる速度を早めたように見えた。

処方

ある夜。眠りについた医者のエル博士は、家のドアを勢いよくノックする音で、目をさまさせられてしまった。

「なんだ。せっかくいい気持ちで眠っていたのに……」

博士はぶつぶつ言いながら起きあがった。ノックとともに、男の叫び声がしていた。

「先生。夜おそく申し訳ありませんが、お願いします。急患なのです」

「診察でしたら、あしたにして下さい。また、交通事故でしたら、よその病院へ行って下さい。わたしは医者ですが外科ではありませんから、治療のしようがないのです」

博士はこう言ったが、そとの声はやまなかった。

「それはわかっています。じつは、わたしの妻が死んでしまったのです」

「そうでしたか。それはお気の毒です。しかし、おかどちがいですよ。わたしの死亡診断書では役に立ちません。うちは精神分析の専門の医者ですから」

「それもわかっています。なんとか、生きかえらせていただきたいのです」

「そんなことを言っても、死んでしまったら、手のつけようがありませんよ」

「そうおっしゃらずに、やってみて下さい。ここに本人を連れてきましたから」

不審に思いながらも、博士はドアをあけた。すると、一人の男が女の人の手を引いて入ってきた。博士は首をかしげて聞いた。

「いったい、だれが死んだのですか」

「この女、つまりわたしの妻が、さっきから死んでしまっていたのです」

博士は彼女を観察したが、どう見ても死んでいるとは思えなかった。目は開いていて、時どきまばたきをする。呼吸もしていれば、脈も正常だった。

もしかすると、男のほうがおかしいのかもしれない。彼女が死んでいないことをよく教えてやれば、なっとくして帰るだろう。博士はこう考え、彼女に声をかけた。

「どうなさいました」

しかし、その答は予期に反したものだった。

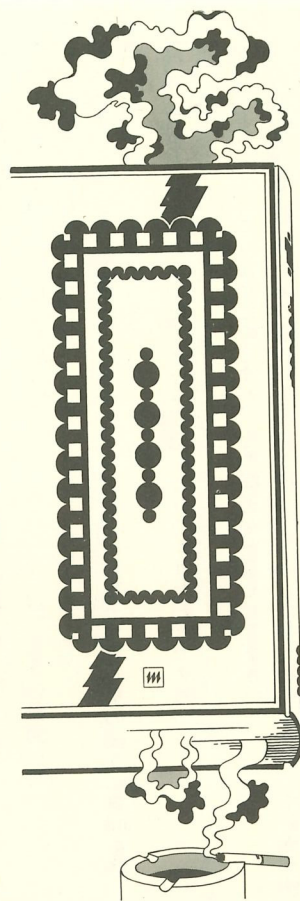
「あたしは死んでいるのです」

博士は、やはり女のほうが患者だったのかとうなずき、つきそってきた男のほうに質問を移した。

「なるほど。自分が死んでしまった、という妄想にとりつかれたわけですね」

「そうなのです」

「いつから、どうして、こうなったのですか。その経過をお話しして下さい」

「妻は大へんな読書好きです。本を読みはじめると夢中になり、作中人物になりきってしまう性質があるのです」

「ははあ。しかし、そんな傾向はだれにもあります。小説ばかりでなく、映画やテレビも登場人物に同一化するからこそ、面白いのですよ」
「妻はそれが極端なのです。いつかは読書を途中で邪魔して、かみつかれてしまいました」
「なんでまた、かみつかれたのです」
「そのとき読んでいた本が、犬を主人公にした物語だったのです。吸血鬼が主人公の小説でなくて助かりました。それだったら、わたしが大変なことになっていたでしょう」
博士はそれを聞いて、大きく腕を組んだ。
「うむ。これは少し度が強いようです。しかし、死んだと思い込むようになったのは、どういう

わけですか」
「妻がさっき読んでいた本は、主人公が途中で死んでしまう物語でした」
「なるほど、それで死んだまま、というわけですね。しかし、そんなストーリーはよくあることでしょう。いままでに、こんな事態にならなかったのは、おかしいではありませんか」
「そのご不審はごもっともです。読書しているあいだは、その作中人物になりきっていますが、本を読み終り、裏表紙を閉じると、そのとたんに、ふたたびわれにかえります。そのため、いままでは問題を起こさなかったのです」
「それがどうして、今回に限ってもとにもどらないのですか」
「このあいだ家に遊びに来た子供のいたずらで、裏表紙を含めて、本の後半がなくなっていたのです。そのため、われにかえることができず、このように死んだままになってしまいました。なんとか生きかえらせて下さい」
男は説明を終え、頭をさげた。
「わかりました。これはそう大さわぎするほどの症状ではありません。ご安心下さい。簡単になおります。ところで、その本の書名は……」
男の言った書名を聞き、博士はこう言いながら立ちあがった。
「ちょうどよかった。その本なら、まだ読んではいませんが、わたしも買って持っています。それをさしあげましょう。持って帰って、さっき中断した所から患者に読みつづけさせれば、読み終るとともに全快するでしょう」

そして、書棚（しょだな）からその本をさがし出し男に渡した。
「それでいいわけでしたね。わたしはあわててしまい、一時はどうなるかと心配で、こんな簡単なことに気がつきませんでした。さすがは先生です、どうもお手数をかけました。さあ、帰ろう」
と、男は彼女をうながし、ドアから出ていった。
「お大事に」
博士は声をかけながらドアに鍵をかけ、ベッドにもどった。
「まったく、世の中には熱心な読書家もいるものだな。妙な患者だった。さて、ゆっくり眠るとしよう」
博士はまもなく寝息をたてはじめた。
しかし、しばらくすると、鳴りひびく電話のベルが、またそれをさまたげた。
「やれやれ、今夜はどうもついていない晩だ。やっと眠ったと思ったら、また起こされてしまった……」
しぶしぶ身を起こし、受話器を耳に当ててみると、その声はさっき帰っていった男のものだった。
「先生。往診をお願いします」
「どうしたんです。いまごろはあの本でなおっていると思っていました」
「それがだめなんです。妻が本に閉じこめられ、出られなくなってしまいました」

「なんですって。あなたまでおかしくなったようですね。あの方法でなおるはずですよ」
「いえ、わたしはたしかです。治療費はいくらでもお払いしますから、すぐ来て下さい。このままだと、本から出られず、本当に死んでしまいます」
「どうも変な話ですな。いいでしょう、これから参ります。治療法に誤りがあれば、わたしの責任ですから」
博士は服を着かえ、仕方なく往診に出むいた。
行ってみると、彼女は机にむかって熱心に本を読みつづけていた。その本は終り近くまで読み進められていた。
「もうすぐ読み終るでしょう」
「ところが読み終ってくれないのです。これで三回も読みかえしているところです。わけがわかりません」
博士はそっとのぞきこんでいたが、やがて、その原因を見つけ出すことができた。本の終りのところに乱丁があり、そこに、はじめのほうのページがまぎれこんでいたのである。彼女はそこまで読んでくると、また、本のはじめにもどり、いつまでたっても裏表紙を閉じようとしないのだった。

凝視

「ああ、この道を通らないようにすればよかったな……」
タクシーに行先きをつげてから、しばらくたって正男はつぶやいた。運転手はそれを聞きとがめ、速力を落した。
「え、なにかおっしゃいましたか」
「いや、いいんだ。時間がない。急いでくれ」
と、正男は時計をのぞき込みながら言った。タクシーは風が絶え、暑さと夕やみでみちた街路を、スピードをあげて走った。ところどころで、なまぬるい光をつけはじめた街灯がうしろに流れ去ってゆく。
このまま進めば、あのことがあって以来、ずっと近よるのを避けていた踏切りを通らなければならなくなる。しかし、今晩は正男にとって、ユリエとのはじめてのデイトだった。時間におくれてはぐあいが悪い。もう、まわり道をしているひまはないのだ。
踏切りが近づいた。遮断機（しゃだんき）がおり、その手前では何台かの自動車、自転車、それに帰りを急ぐ多くの人びとが、長い貨車の通りすぎるのを待っていた。彼のタクシーはそのあとについた。
なにも気にすることはないんだ。と彼は自分に言いきかせた。たとえ春子がこの踏切りで飛込

み自殺をとげたからといっても、その責任が全部おれにあるとは言えないじゃないか。たしかに春子はおとなしく優しい女だった。それなのに、おれがまもなく飽きて別れようとしたというのは、ひどいことだったかもしれない。しかし、死ぬということは本人の意志で、そこまで責任をおわされては、たまったものじゃない。長い貨車がゆるい震動を伝えながら通過して行くにつれ、変に高まってくる気持ちを押さえつけるため、彼はむりに理屈を組み立てた。
貨車は通りすぎ、遮断機があがった。
いまは昔のことを考えまい。これから会う、朗らかなユリエのことを考えて、この踏切りを渡り切ればいいのだ。おれが勝手に自分に課したタブーなど、このさい打ち破っておくに限る。犯したからといってなにが起こるわけでもないタブーを破るのは、早いほうがいい。それには、いまがいい機会だ。タクシーはふたたび進みはじめた。
「あっ……」
と、正男は、低い叫びをもらし、運転手は彼に聞いた。
「どうかなさいましたか」
「いや、線路を越えた時に揺れたからさ。なんでもないんだ」
そうだ、なんでもないことなのだ。正男はタバコに火をつけた。だが、いま背中を一面に走ったあの冷たさは、いったい、なんだったのだろうか。もちろん、気のせいにきまっている。あまり変に気をつかったからさ。彼は煙を大きく吐いた。しかし、さっきまで期待していた、タブーを無視したあとのすがすがしさは、いっこうにわいてはこなかった。

ふと、彼は、だれかの視線を感じたように思って、うしろの窓から外を見た。だが、さらに濃くなった闇のなかでは、多くの自動車が行き交うばかりで、なにも注意をひくようなものは見当らなかった。

「だいぶ待った……」

と正男が聞くと、ユリエは答えた。

「あたしもいま来たところなの。だけど、どうしたのよ。顔色が悪いじゃないの」

「さあ、さっきちょっと寒気がしたんだが、かぜでも引いたのかな」

「ぐあいはどう……」

「たいしたことはないだろう」

しかし、この日のユリエとのデイトは、あまり快いものではなかった。

「あなた、きょうはどうかしているんじゃないの。さっきからしょっちゅう後をふりむいているけど」

と、ユリエはふしぎそうに言った。

「そうかな」

「そうかな、じゃないわよ。映画館のなかでも、道を歩いている時でも、ひっきりなしにふりかえっていたじゃないの。さっきの映画じゃないけど、殺し屋にでも追いかけられているみたいよ」

ユリエは明るく笑った。

「どうも、だれかに見つめられているような気がしてならないのさ」

「あら、いやだ。映画館じゃ一番うしろの席で、うしろにはだれもいなかったわよ」

「そうだったかな」

「きっと頭が疲れているのね。こんど海へつれてってよ。強い日光と、きれいな空気のなかで一日を過ごしたら、さっぱりして、ノイローゼなんか消えちゃうわよ」

「よし、こんどの週末に行こう」

しかし、そのわけのわからない視線は、ユリエと別れてからも、依然として正男につきまとっていた。それは、アパートに戻り、ドアに鍵をかけ、シャワーをあび、服を着かえてからも同じだった。いったいどういうわけなのだろう。

彼は立ち上って、壁にかかっている人物画をはずし、紙で包んでみた。だが、彼が背中に感じる視線は残っていた。

そのへんにちらばっている、人物の写真が表紙となっている週刊誌を、すべて重ねて押入れに入れた。しかし、感じは消えはしなかった。

新聞から広告のパンフレットに至るまで、人物の顔、つまり目の写っているものは、すべて片づけてみた。それでも同じことだった。

やはり。と彼は、ずっと触れまいと努めてきた仮定をついにとりあげた。これは春子の視線にちがいない。だが、春子はすでに死んでいるではないか。しかし、そう思おうとすればするほ

ど、その視線は春子のものに感じられた。泣きボクロというのか、目の下にホクロのついた、伏目がちに見上げる、内気ななかにうらみを含んだ、春子の目つきから出る視線にちがいなかった。正男が最後に「別れよう」と告げた時の。

彼は寝床に入り、むし暑さをがまんして毛布をかぶった。それでも視線はどこからともなく彼に迫っていた。うつむけになれば天井から来たし、右を下にしても、左を下にしても、背中に感じられた。そして、あおむけになってみても、寝床の下から迫ってきた。

たしかに頭が疲れているのだ。まあ、こんどの週末には思い切り気ばらしをしよう。彼は、絶えることのない、ふりきることもできない、しつこい視線を感じながら決めた。

それから二日間を、彼は、酒や、強烈なジャズにすがって、追いつづけている視線と戦いながらすごし、週末を迎えた。

「どう、この海をごらんなさいよ。この明るさと潮風のなかで一日をすごせば、気になることはみんな消えてしまうわよ。さあ、早く泳がない」

熱い砂浜と青々とした海。空からは強い夏の日光。そのあいだには意味もない不安など、存在できないように思えた。

「よし、では水着に着かえてこよう」

正男はユリエの言葉の通り、この海辺でくたくたに疲れることに最後の期待をかけた。

「あら、どうしたの。はじめて気がついたわ」

海水着にきかえた正男を見て、ユリエは目をみはった。

「なんのことだい」

「あなたにアザがあったのね」

「アザなんかあるものか。どこにあるんだ」

「ほら、ここよ……」

と、ユリエは彼の背中をつついた。

「……だけど、へんな形ねえ。人間の目そっくりよ。それにこのホクロは泣きボクロみたいだわ」

夜の道で

夏の夜ふけ。

むし暑さと闇だけがよどんでいる郊外の道を、私はゆっくりと歩いていた。会社の仕事が意外にてまどり、やっと私鉄の終電に乗ることができたのだ。その終点ちかい駅でおり、畑の多い道をしばらく歩くと、私の家がある。

虫の声があちこちで高まり、時どきとだえる。空気は少しも動かず、汗はじわじわとわきつづけている。あたりにたちこめる草いきれ。

ああ、ちょうど一年になるかな、あいつが死んでから……。

その友人は、学校時代からの親しい仲だった。そして、原子力の研究に従事したためか、それとも、生まれつきの体質のせいか、彼は白血球とかに異変をおこしたのだった。

私は彼を病院に見舞いにいった。しかし、彼に会う前に、医者に病状を聞いてみることにした。

「先生。どうなんでしょうか、彼の病気は……」

「思わしくありません。いまの医学では、なおしようがないのです。輸血をつづけて、その力で

生き延びているようなものです」

「あと、どれくらい持ちこたえるでしょう」

「こう暑くなると、からだのほうがそう続かないのです。しかし、こんなことを病人にはお話ししないようにして下さい。朗らかな話でもして、元気づけてやるのが、ただひとつの手当てでしょうね」

私はうなずき、彼の病室に入って明るく声をかけた。

「やあ、もう退院の用意でもしているのかと思っていたぜ」

だが、彼は弱々しい声で答えた。

「だめだね。もう、そう長くないことは、自分でもわかっているよ」

たしかに彼は弱っていた。しかし、私はそれに気づかぬふりをして、彼の手をにぎり、こう言った。

「じつはね、このごろ手相にこっているんだ。きみのを見てやろう。ほら、これを見ろよ、ここ一年以内には、絶対になにもおこらないことが、あらわれているよ」

「ほんとかい」

と、彼は自分の手のひらをながめながら、少し笑った。

「そうだとも。あまり気の弱いことを言うなよ」

と、私は元気づけた。

だが、彼は暑さの峠を越すことができず、それからまもなく、息をひきとってしまったのだ。

……あれから、もう一年になるな。私は彼の顔を思い出しながら歩いていた。虫の声が高まり、また、とだえた。

ふいにうしろから声がした。

「やい、うそつき」

それは、あきらかに彼の声だった。私は思わずふりむいてみた。だが、声のしたあたりにあるものは、ただむし暑く、よどんだ濃い闇ばかり。

夢の男

朝の光が厚いカーテンのすきまから、黄金色の流れとなって部屋のなかにさしこみ、壁にかけられている古風な絵、あたりにある豪華な家具などのうえに、明るさを美しく配置しはじめた。ここは有数の実業家、エヌ氏の寝室なのである。

室の片すみ、良質の木材で作られた大型のベッドのなかで、エヌ氏は、

「うう……」

と、うなりながら目を開き、顔をしかめながら手で汗をぬぐった。そして、身を起こし、首を振り、ふとった手を動かして肩のあたりを勢いよくたたいた。

エヌ氏は、六十歳をいくつかすぎていたが、産業界で精力的に活動している人物なのだった。彼は若いころは貧しかったが、すべての人生の目標を社会での成功に賭けて、あらゆる努力をつづけてきた。その過程では非難をされるようなことがあったにしろ、いまでは、ほぼその目的を達した。いくつかの会社を支配し、家では何人もの召使いを使える身分になれたのだ。

彼は手をのばし、ベッドのそばのベルを押した。それに応じて、一人の召使いが入ってきて、ていねいに朝のあいさつをした。

「おはようございます。なにかご用でございましょうか」

「ああ。濃いコーヒーを持ってこい。早くだ」
と、エヌ氏は吐きだすようにいった。
「かしこまりました」
召使いは引きさがり、すぐに大きなカップにみたしたコーヒーを、銀の盆の上にささげてもどってきた。このごろ、これが毎朝のことなので、召使いにとっては心得たものなのだった。
ベッドのなかでそれを飲みほしたエヌ氏は、つぎにシャワー室に入り、勢いよく水の音をたてた。そして服を着かえ、邸内の広い庭をゆっくりと散歩しはじめた。
このように毎朝の日課が進むにつれ、彼の夜の悩みはしだいに薄れ、朝食を終え、葉巻に火がつけられるころには、苦痛の表情はほとんど消えているように見えた。
「おい自動車の用意はいいか」
と、彼は葉巻を捨てながらいった。
「はい」
「きょうは会社への途中で、医者に寄ることにする」
「かしこまりました」
運転手はエヌ氏をかかりつけの病院に運んだ。医者はエヌ氏を迎えて声をかけた。
「いかがです。少しはぐあいがよくなりましたか」
「いかん。少しも前と変らないぞ」
とエヌ氏は苦い顔をした。

「弱りましたな。あの鎮静剤はききませんでしたか」
「おい、わしは眠れないのではないぞ。むしろ眠りたくないのだ。ほかの薬をくれ」
「いや、やはり眠りの問題です。眠らなければ、からだのほうがまいってしまいます。しかし、よくお考えになってみて下さい。そう大さわぎすることではないと思いますがね。気にしないことですよ」
「人のことだと思って、そう簡単に片づけないで、わしの身にもなってみてくれ。毎晩毎晩、夢のなかに同じ男があらわれ、荒涼とした野原をひきまわすのだぞ」
「しかし、ただの夢ではありませんか。目がさめれば消えてしまう」
「だが、夜になると、またその無表情な男が、わしを荒れはてた野原にさそいにくる。いやでたまらぬ。なんとかならんのか」
「このあいだ申しあげたように、精神分析の結果によると、その男は昼のあいだあなたの支配下にある、すべてのものの象徴のようですよ。ですから、あなたがおやりになっている支配的な仕事をおやめにならぬ限り、その男は消えないかもしれません。仕事から引退なさるか、それとも、夢を気になさらないか、どっちかしかないでしょう。まあ、気にしないことですね。考えようによっては、いい夢ですよ。わたしもそんな男が夢にあらわれるぐらい、人や組織を支配してみたい。うらやましいくらいです」
「なにをいう。わしが引退など、とんでもない話だ。わしは、さらに多くを支配したい。だが、夢のあの男には会いたくないのだ。どうだ、金ですむのなら惜しみはしない。ぜひ、なんとかし

て欲しい」

「弱りましたな。わたしも可能な限りのことを試みました。しかし、これ以上は、わたしの手に負えません。お金をお出しになるといっても、どうも夢のなかの世界までは、金銭の力も及ばないようです」

「よし、もうきみにはたのまぬ。世のなかには金で解決できぬことはないはずだ」

エヌ氏は憤然とした表情で病院を出た。

会社についたエヌ氏は、昼ごろ、秘書から来客のしらせをうけた。

「社長、薬のセールスマンと称する男がたずねてきました。もちろん、すぐ追いかえすつもりですが、一応お耳に入れておこうと思いまして……」

「うむ、なんといっておるのだ」

「ほうぼうの社長クラスにご愛用いただいている、新しい睡眠剤とかいっております。しかし、紹介状もないようですから、断わったほうがよろしいかと考えますが」

「待て、会ってみたい。連れてこい」

「はい」

秘書はさがり、まもなく一人の男を案内してもどってきた。

エヌ氏は「あっ」と声をあげるところだった。その無表情な顔、どこといって特徴のない服。それは毎晩エヌ氏の夢にあらわれ、さびしい野原を案内する、例の男にそっくりだったのだ。だが、エヌ氏はそれを口にしては常識を疑われると思い、さりげなく聞いた。

「どんな用なのだ」

「薬のセールスマンでございます。ぐっすり眠れないでお悩みの方がたに、ずいぶん感謝されております。そもそも、この新薬は……」

男が効能をのべたてるのを、エヌ氏はじっとみつめていたが、やがてさえぎった。

「よし。おまえの持ってきた薬なら、効くかもしれぬ。買うことにしよう」

「ありがとうございます。今晩から、きっと安らかにお眠りになれましょう。だが、なぜ、わたしの持っている薬ならとおっしゃるので」

男はけげんそうな様子だったが、エヌ氏は首をふった。

「いや、べつに理由はない」
そばに立っていた秘書が耳のそばで、
「社長、およしなさいませ。素性のしれないセールスマンです。どうせ、いいかげんな薬にきまっています」
とささやいたが、エヌ氏はそれにかまわず、大量に買った。
夜。眠りに落ちたエヌ氏に、やはりいつもの夢が訪れた。
例の男があいかわらず現れたのだ。だが、いつもの無表情ではなく、これまでにないなごやかな笑顔を示し、エヌ氏を夢の散歩に案内した。
しかも、今晩は荒涼たる野原ではなかった。美しい花が咲き、そのかおりはそよ風でひろがり、低い所をチョウが、少し高い所を小鳥が飛びかい、その上は白い雲、青い空がひろがっていた。
「いかがです。お気に召しましたか」
と、夢の男がエヌ氏に聞いた。
「うむ。いい気分だ。おまえの薬はじつにいいぞ。わしの望んでいたのはこんな夢だったのだ」
「お喜びいただけて、わたしもうれしく思います。では、きょうはこれくらいで」
「いや、こんな夢ならいつまでも見ていたい。そうはいかんのか」
「もし、お望みならば」
「もちろん望むとも。だが、このすばらしい所はどこなのだ」

「もうおわかりかと思っておりましたが、ここはですね……」
つぎの朝。エヌ氏の召使いは、いくら待ってもベルが鳴らず、物音もしないのを不審に思いながら、ドアの外で立ちつづけていた。

利益

エヌ氏はなにか、金をかせぐための仕事をしなければならない状態にあった。生活するための金銭が、手もとになかったからだ。

といっても、資産がまったくないわけではなかった。彼は郊外ちかくにある、庭つきの小さな自分の家に、ひとりで住んでいる。それが所有物のすべてだった。

数日まえまでのエヌ氏は、財産のある夫人のきげんを取ってさえいれば、なんの心配もなく、順調に年月をすごすことができた。だが、ちょっとした手ちがいから、その生活の手段である、夫人のきげんを取りそこね、こう言い渡されてしまったのだ。

「もう、あなたのような人には飽きたわ。あたしには財産があるんだから、かわりの亭主はいくらでも見つかるのよ。あなたはきょう限り、くびよ。この土地と家は退職金がわりにあげるから、あとはいざこざなしにしましょう」

そして、彼女は出ていった。こうなると、なにか収入の道を考えなければならない。

エヌ氏はぼんやりと庭をながめながら、案をねった。しかし、いままで女に養われてすごしてきた彼には、とりたてていうほどの、身についた能力がなかった。また、体当りで新生活を切り開こうという気力もなかった。

なにか才能なしでできる、楽な、のんきな仕事はないだろうか。その時、ひとつのインスピレーションが頭にひらめいた。

「そうだ。この庭に釣り堀をつくり、人を集めれば、なんとか食ってゆけるだけのものになるだろう。世の中がいらいらしているので、ひとはのんびりしたものを求めている。これなら、こっちものんびりと金がもうかる」

エヌ氏はこの思いつきに喜び、その決意をかためるべく、シャベルを持って庭におりたち、地面を掘りかえしにかかった。なにしろ、資金がまるでないのだから、できるところまでは自分でやらなければならない。

しばらく夢中になって掘りつづけているうちに、シャベルの先がカチリと音をたて、なにか固い物に当った手ごたえだった。

「しめた。小判でもつまった壺だろうか。そうだとありがたいが」

勤労意欲の持ちあわせの少ないエヌ氏は、相好をくずしながら掘りつづけた。だが、それは期待に反して石だった。もっとも、まわりの土を削り落してみると、ものの形をとってきた。

その時。近所に住む老人が杖をつきながら通りがかり、垣根ごしに声をかけてきた。

「おや。珍しい物を掘り出しましたな。小さいけれど、石の地蔵さまではありませんか」

「ええ、どうもそうらしいです。つまらん話ですよ」

「いや、そんなもったいないことを口にしてはいけません。わしにちょいと拝ませて下さらんか」

「それはかまいませんが」
　老人は門からまわりこんで入ってきた。そして、その前で頭をさげていたが、そのうち杖を投げ捨て、大声をあげた。
「や、これはすばらしい」
　エヌ氏は驚いて聞いてみた。
「どうなさいました。叫んだりして」
「わしは持病の神経痛に苦しんでいて、神仏の前にでると、それがなおるように、つい祈ってしまう習慣がある」
「そうでしたか。しかし、それがどうかしたのですか」
「痛みがすっかりなくなったのだ。すごいご利益だ。これは本物です。こんなご利益のある地蔵さまを、このままにしておいてはいけません。どうじゃ、わしはお礼の意味で、金を寄進しましょう。それでお堂をつくり、ちゃんとおおさめしたら」
「そうですね。悪くはないかもしれません」
　まもなく、庭の片すみに堂がたてられ、掘り出された石の地蔵は、そのなかにまつられることになった。そして、その前にはいうまでもなく、賽銭箱がすえられた。エヌ氏にとって、賽銭箱だろうが、釣り堀だろうが、のんきな金もうけという点では、あまり変りがないように思えた。
　うわさのひろまるのは早く、日ならずして参詣人があらわれはじめた。だれもかれも、弱々しい表情であらわれ、にこやかな表情で帰ってゆく。病気やからだの欠陥がなおったためだ。

　エヌ氏は自分も試みてみようと思ったが、残念なことに、からだだけは健康で、祈りようがなかった。しかし、特に残念がるほどのこともなかった。つぎつぎと訪れる善男善女が、箱に賽銭を投げこんで帰ってゆくのだから。
　まさに商品を仕入れる必要のない自動販売機、レコードを新しくかえる必要のないジューク・ボックスをそなえつけたようなものだった。
「こんないい商売はない。もうだいぶたまったころだろう。そろそろ出さないと、あふれてしまう」
　彼は賽銭箱をあけてみた。だが、なんということ。そこにはぜんぜん金が入っていなかったのだ。
「やられた。どうもひどい世の中だ。賽銭を盗むやつがあらわれるとは。しかし、そうあわてることもない」
　エヌ氏は落ちついて、こうつぶやいた。さきの長い、有利な事業なのだ。これくらいはすぐにとりもどせる。
　彼は対策をねり、金庫屋にたのんで、鍵のかかるスチール製の賽銭箱を作らせ、それを今までのと取りかえた。これなら大丈夫だろう。
　だが、その結果は、あけてみるとまたも金がなくなっていた。あれほどの人が金を投げこんでいるのに、おかしな話だ。そこで、その原因をたしかめるために、徹夜で見張ってみることにした。

夜がふけたころ、賽銭箱のそばで一人で頑張っているエヌ氏の頭に、一つの言葉がとびこんできた。

「そこで、なにをしている」

エヌ氏はあたりを見まわしながら答えた。

「賽銭泥棒を見はっているのだ。だが、それより、おまえはだれだ」

また、声が頭のなかに響いてきた。

「わしは、おまえのそばにいる地蔵だ。しかし、泥棒とはけしからん。わしがもらった金だ。わしがどうしようと勝手だろう。それに文句があるのか」

これでつじつまが合いかけてきた。そばには地蔵しかなく、地蔵ならあんな人間ばなれした盗み方をやりかねない。エヌ氏は言いかえした。

「さては、おまえだったのだな。文句はあるとも、それはこっちの所得になるべき金だ。どこでもそうしている社会通念だ」

「とんでもない。多くの人たちは、だれのために金をおいてゆくと思う。おまえのためにか。それとも、病気をなおしてやったわしのためにか。よく考えてみろ」

「だが、よそでは……」

「よその神仏はご利益を与えないから、仕方ないかもしれん。しかし、わしはちゃんと、ご利益を与えている。わしには報酬を取る権利があるだろう」

どうも議論では、地蔵のほうにいくらか理屈があるように見え、エヌ氏は、たじたじとなった。といって、ここでひきさがるわけにもいかない。

「まあ、そういえばそうかもしれない。しかし、地蔵に金は必要ないだろう。なんに使うのだ」

「そんなことは、おまえの知ったことか。捨てようと、どうしようと、よけいなおせわだ。おまえは友だちに、そんなにもうけてなにに使うんです、などと聞くか。聞かないだろう。それは失礼な行為というものだ」

もし、エヌ氏がもっと世なれた男なら、ここでいんぎんに答え「まあ、そうおっしゃらずに、いくらかおすそわけを」と、辞を低くしてたのんだろう。だが、彼はそのような商業的な体験が身についていなかったので、口をつぐんで引きさがるほかになかった。

エヌ氏は面白くない顔つきで、二三日は家のなかにとじこもり、ぞろぞろ参詣する人波を見つめていた。しかし、いつまでもこうしているわけにはいかない。

ついにある夜、彼は意を決して、堂をとりこわし、石の地蔵を床下に運んで埋めてしまった。そして、はじめの計画どおり、庭を釣り堀にすることにきめた。

釣り堀はもちろん、たいしたもうけではなかったが、地蔵なんかを置いておくよりははるかにいい。エヌ氏にとって必要なのは、ご利益ではなく、利益なのだ。

不運

ざぶりと波がしらが崩れ、K氏の口のなかに塩からい海の水があふれた。彼は立泳ぎをしながら、どんどん遠ざかって行く船の灯を見送った。服を着たままなので、手足は思うように動かず、泳ぎつづけるのは楽ではなかった。だが、彼は服をぬごうともしなかった。

ここは夜の海のまっただなか。船は視界から消え去り、彼は立泳ぎをつづけながら一回りしたが、ほかの船も、陸の影も見えなかった。

いままで彼の乗っていた連絡船を追いかけることは、もはや不可能だ。また、最も近い海岸に泳ぎつくのも二日はかかる。この場所で一日待っていれば、つぎの連絡船が通りはするが、海流があってはそれもできない。

彼がいかに泳ぎがうまいといっても、助かる見込みはまったくなかった。

「やれやれ、これでなにもかもお別れか。くたびれて沈むのを待つとしよう」

K氏は口のなかの水を吐き出しながら、こうつぶやいた。その声や表情には、あわてた様子など少しもなかった。それは、彼の決意がいかに固いかを示している。彼は死ぬ覚悟で身を投げたのだった。

世の中には自殺をはかる人は多く、またその方法にもいろいろある。だが、海のまんなかで飛

びこむ以外の方法は、多かれ少なかれひとに迷惑をかけるものだ。死ぬ本人にとっては、あとは野となれだろうが、線路の上の死体を片づける人などのことを考えてみたら、発作的な自殺でない限り、街のなかでは、できるものではない。

K氏の場合は、考えぬいたあげく、不動の決意で死を望んだので、このようにひとに迷惑のかからない、海に飛びこむという方法を選んだのだ。

彼がなぜ死ぬつもりになったかというと、ほんのちょっとした不運のためだった。彼は生まれつきあらゆる勝負事が好きであった。そして今まで思い出せる限りでは、これはという勝負にはほとんど負けたことがなかった。いや、あらゆる場合に勝っていた。負けたのはただ一度きり。多くの人はそんな彼をうらやむかもしれない。しかし、決してうらやむべき状態ではなかった。

その一度が最後の一度だったのだ。ありとあらゆる財産をつぎこんでやった勝負に負ければ、それまで何百回と勝ちつづけていても、まったく意味がない。その時になって勝負事を心からうらんでみても、すべては手おくれだった。

K氏がなぜそんな大勝負に賭けるつもりになったかというと、それは失恋してやけをおこしたためであった。彼は今まで女性に対して運のいいほうで、失恋したことはただの一度だけ。だが、その一度が、彼が心の底から愛した女性に対してであった。女性に対しての自信をまったく失い、女性は見るのもいやになった。心に焼きついた女性不信の念は、もはや消えなかった。

なぜ失恋したかというと、酒に悪酔いしたのが原因だった。彼は酒が好きで、悪酔いしたことは一度だけ。その一回がこのあいだおこり、道ばたで不注意のため自動車にはねられ、顔が醜く

傷ついてしまったのだ。

つまり、酒と女と勝負事を愛し、なにもかも順調だったK氏は、ほんのちょっとした不運のため、生きがいを失い、すべてを憎み、死の決心を抱いたのだった。

「少しくたびれてきたようだ。もうそろそろ、お陀仏だろう」

彼はしだいに疲れ、こう言った。いまさら生きながらえるつもりもないので、大声で助けを呼ぼうとはしなかった。もっとも、助けを呼んだところでどうにもならないことは、考えてみるまでもない。

やがて、手も足も動きがにぶり、おりから襲った大きな波は彼を巻きこみ、海の水は待ちかまえていたように口と鼻に殺到した。

気がついてみると、K氏はベッドの上に横たわっていた。

「あ、ここはどこだ……」

こう言うと、そばに立ってのぞきこんでいた船員服の男が、ささやきかえしてきた。

「おめざめですか」

K氏はあたりを見まわし、まもなくこう判断した。そばの船員服の男、室内のつくり、どこからともなく伝わってくる機関の音、窓の下あたりの波の音。おぼれ、気を失っている時に、通りがかったこの船に助けられたにちがいない。

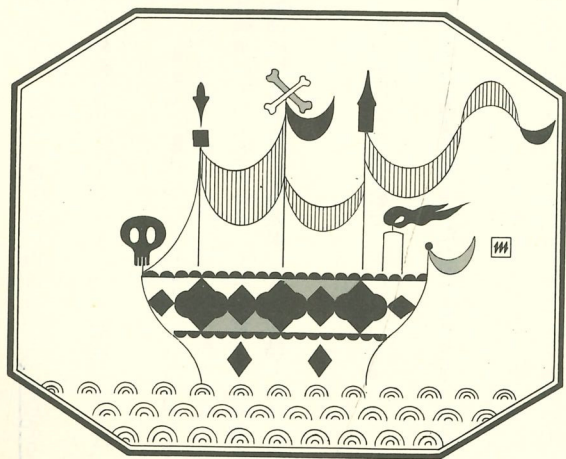
「ここは船の上だな。おれを拾いあげたのだな」

「さようでございます」

「やい。なんでよけいなことをした。おれは誤って海に落ちたのではない。自分から進んで、連絡船から飛びこんだのだ。ああ、おれはこのごろ、まったく運がついてない。うまく死ねると思ったのに、こんな船に拾いあげられるとは」

K氏はわめき散らしたが、船員は礼儀正しく頭を下げた。訓練の行きとどいた高級な客船らしい。

「まあ、そうおさわぎにならないで下さいませ。いかがでしょう、眠っていらっしゃるあいだに、服はきれいにプレスしておきました。それをお召しになって、広間のほうにおいで下さい。みなさん、楽しそうにしていらっしゃいますよ。きっと、あなたのお気にも召すことと存じます」

いつまで横になっていても仕方ないので、K

氏は服をつけ、案内に従った。

美しい音楽が流れ、明るい光が満ちている船のホール。そこには大ぜいの人がいて、面白そうに遊んでいる。船員はK氏に、片すみを指さしながら言った。

「あそこにはバーがございます。どうぞ、お好きなお酒でもご注文ください。お勘定のほうは、ご心配なく」

「酒だと。とんでもない。おれが死ぬつもりになったのも、原因の一つは酒だ。ビンを見るのも、においをかぐのもいやだ」

彼は船員をふりきり、人だかりのしているほうに歩いていった。のぞいてみると、ルーレットがあり、球が軽い音をたてながら回っていた。そばにいたふとった外人が、K氏に話しかけてきた。

「どうです。あなたもやってみませんか」

K氏は頭を振った。死ぬつもりになったもう一つの原因はこれなのだ。

「わたしはやりません」

「おや、どうしてです。面白いですよ。あ、金ですか。金なら胴元にたのめば貸してくれますよ。むこうへ着いてから精算すればいいのです」

「いや、わたしはきらいなのです」

どうせ死ぬつもりなのだから、借りたってかまわないとは思ったが、自分をこんな羽目に追いこんだ憎い勝負事に手を出す気はしなかった。

彼はルーレット台をはなれながら、考えをまとめた。この船は金持ち連中が集って買いきった、不定期の遊覧船にちがいない。秘密に賭けをやるには一番いい方法だ。しばらく前なら、K氏は酒にも、賭けにも、進んでその誘惑に乗ったところだが、いまは少しも興味を持てなかった。

彼はデッキのほうに歩いていった。船は夜の海を静かに航行していた。ぼんやりとそれをながめていると、とつぜん、甘いにおいと声が近よってきた。

「つまらなそうね。いかが。仲よくしましょうよ。いっしょに遊ばない。この船にはなにからなにまでそろっているのよ。港へ着くまで、ぼんやりしていたって、しようがないじゃないの。うんと遊ばなくちゃ損よ」

ふりむいてみると、そこには若く美しい女が、からだをくねらせながら立っていた。

女か。以前の彼ならすぐにも飛びつくところだったが、いまはちがう。なにに対しても興味を失い、なにに対しても信じられなくなっている。特に女性に対しては、完全に自信を失っていた。

「せっかくだがね。船のみなさんは親切に、仲間に入っていっしょに遊べと誘ってくださるが、おれはもう、酒やルーレットや美人など、見るのさえいやなんだ」

K氏はこう言い、やにわに手すりを乗り越え、

「ねえ、お待ちなさいよ……」

という声をあとに、またも海に身を投げた。

「しっかりしなさい」
彼はその声で目をあけた。またも身を投げたものの、またも助けあげられたらしい。もっとも、見まわすと今度は小舟で、話しかけているのは漁師らしかった。
「なんだ。またまた拾われたのか。好意はありがたいが、おれは死ぬつもりだったんだ。どうして死ねないのだろう。だが、助けるな、と書いた標識でも頭につけてないと、死ねないのかな」
「そうでしたか。だが、またとはどういう意味です」
漁師は首をかしげる。
「じつは、さっき一回、豪華な遊覧船に拾われた。そこには、酒、勝負事、美人、なんでもそろっていた。だが、おれはそこからまた飛びこんだのだ」
その説明を聞いても、漁師は首をかしげたままだった。
「そうですか。しかし、そんな船は見たことがありません。わたしはこのへんでずっと漁師をしていますが」
「本当なんだ。人がたくさん乗っていたぞ」
「あ、もしかしたら、船の灯が水にうつっていなかったのではありませんか」
「なんでそんなことを聞く。しかし、そういえば、飛びこんでからながめると、灯が海面にうつらず、妙に思った気もするが」
漁師は青くなり、声がふるえた。

「そ、それなら幽霊船です。見たことはありませんが、話には聞いています。海の死者を拾いあげ、あの世の港に送りとどける……。途中で気が変らないように、至れりつくせりのサービスだそうです。あなたはほんとに運のいい人だ」
だが、K氏は、
「そうだったのか。ちくしょう。それなら、あのまま乗っていればよかったんだな。よし、おれはもう一回飛びこみ、なんとかしてあれに乗るんだ」
と、身を起こしかけた。しかし、漁師はそれをとめた。
「およしなさい。むだですよ」
「なんでむだなのだ」
「幽霊船から逃げ出すと、あなたの名前は船客名簿から削られ、当分のあいだは乗せてくれないことになっているそうです。つまり、死なないわけですよ。いくら飛びこんでも、だれかに助けられるにきまっているのです。あなたの場合は、死ねない、といったほうがいいのでしょうがね」

症状

ケイ氏はビルの十一階にある一室を訪れ、まずドアをノックした。

「どうぞ」

と答えがあり、ケイ氏はなかにはいり、おそるおそる聞いた。

「あの、精神分析の先生のいらっしゃるのは、ここでしょうか」

「はい、わたしです。どうぞお入り下さい。どんなぐあいなのですか。その椅子（いす）におかけになって、くわしくお話しください」

と、窓を背にして、大きな机にむかっていた医者がいった。

ケイ氏は椅子にかけながら、

「じつは夢のことなのです」

「それはいけませんね。しかし、よくあることです。現代は頭を使うことが多く、そのため眠りが浅くなります。それで、いやな夢を見ることが多いのです。どんな夢をごらんになるのですか」

「なにしろ普通ではないのです。わたしはそれがいやで、いろいろな方法を試みました。怪しげな信仰にも入ってみました。しかし、むだでした。先生なら、なんとかしていただけるだろう

と、うかがったわけです。こんないやな夢はありません」

「いったい、どんな夢なのです。怪物ですか。美人にあって話しかけようとしたとたん、相手に消えられてしまうのですか。それとも原爆戦ですか。夢にはそれぞれ、関連したなにかの原因があるものです。それをつきとめれば、たいていはなおります。さあ、恥ずかしがらずに、お話しなさい」

ケイ氏はやがて話しはじめた。

「眠りについてすぐ見るのが、朝おきるところです。わたしは服を着かえ、食事にかかります……」

「なるほど、そこになにかが現れるわけですね」

「いえ、現れてくれればいいのですが、なにも現れてくれません。わたしはカバンを持って、会社に出勤します」

「それから……」

と医者は先をうながした。

「それから事務をとりつづけ、終ると家に帰ります。やがて寝床にはいることになります。するとそこで夢が終り、目がさめるわけです」

「なるほど、変っていますな」

と、医者は腕ぐみをし、首をかしげた。

「なんとかなおしてください。一日の仕事だけでも、いいかげんうんざりなのに、夢のなかでま

で、それを繰り返すのです。たまりませんよ。このままでは、わたしの人生は絶望です」

「そうでしょうな」

と言って、医者はいろいろな文献を調べにかかった。だが、それに該当する症状は見つからないらしかった。ケイ氏は気づかわしげに声をかけた。

「どうでしょう、先生」

「うむ。それがどうも、むずかしい症状です。どの本にも出ていません。お気の毒ですが……」

ケイ氏はがっかりしたようなため息をもらした。しばらくうつむいていたが、やがて立ちあがった。

「やっぱり、だめですか。こうなったら、残された道はただ一つです」

「どうなさろうと、おっしゃるのです」

と医者がいぶかるのにかまわず、ケイ氏は窓ぎわに歩みよった。そして、開いている窓から、身を投げた。

ケイ氏は久しぶりに、すがすがしい朝をむかえ、うれしそうな声をあげた。

「ああ、なんでこんな方法に、早く気がつかなかったのだろうか」

夢のなかの自分を消滅させることに成功したケイ氏は、つぎの夜から、もはや、あのいまわしい夢を二度と見ることがなかった。

顔のうえの軌道

音楽が終り、光線が弱められるにつれ、この広い室のなかに、ほっとした雰囲気がみちはじめた。あたりに配置されているさまざまな物。たとえば、どこにも決してかけられず、またどこからもかかってくることのない電話機、いかに引っぱってもあかない戸棚、根を持たない木や草など。すべては人工の時間から解放されて、いっせいに生気を失い、本来のみすぼらしさに戻りつつあった。

室のまわりの壁の厚い、コンクリートさえも、いままで吸いこみつづけていた緊張を吐き出しにかかっているように見えた。ところどころから軽いため息があがり、それは、

「おつかれさま」

と呼びあう声となり、さらにざわめきとなってひろがった。ここはテレビ局のスタジオ。いまは藤川昌子の主演したドラマが終ったところであった。

上のほうから金属的な響きがおりてきた。二階からの鋼鉄製の階段を、この番組のディレクターがおりてきたのだ。彼はからみあって死んだヘビのように床の上にのびている太いコードを飛びこえながら、まっすぐに昌子にかけよってきた。そして、興奮をともなった、せきこむような調子でこう話しかけた。

「うまくいったぜ。すばらしい出来だった。きみはどんな役でもこなしてしまう。いや、どんな人物にでも完全になりきることができるのだ。いまの役はきみにははじめての悲劇的なヒロインだから、どうなることかと、じつはちょっと心配だった。だが、なにもかもうまくいったぜ」

「そう、ありがとう。うまくいっていたらいいのだけど」

彼女はあまり浮かない表情で、意味のない返事をつまらなそうにした。それは彼の表情と大きな対照を示していた。たしかに、いま終ったドラマの役は彼女にとってはじめての役柄だった。ディレクターは冒険を試みるつもりで昌子にその役を与え、彼女は期待どおり、いや、期待以上にやりとげた。だから、彼が喜ぶのも無理のないことだった。

「そうとも。ぼくがこれまで手がけた番組のなかで、いまのきみみたいに完全にやってくれた人はいなかった」

彼はしきりとしゃべりつづけたが、昌子にとってはそらぞらしい響きとしか聞こえなかった。彼女がドラマの人物になりきり、すべてがうまくゆくことは当然のことで、前からわかっていたことなのだから。

彼女は、いいかげんでこの場から去りたいと思った。だが、それにちょっとした邪魔が入った。いまのドラマに端役ででた一人の女の子が話しかけてきたのだ。

「あなたはいつもうまく役をこなすわ。あたしにはとてもああ巧くはできない。ずいぶん勉強しているつもりだけど。やっぱり才能のちがいなんでしょうね。うらやましいわ。それに、メーキャップもお上手ね。目の下にさりげなくつけた、そのつけぼくろの位置なんか、悲劇的な役の性

格をぴったりとあらわしているわ……」

その声にはおべっかの調子が含まれていた。昌子から演技のこつでも聞きだそうというのだろうか。それとも、そばにいるディレクターに、自己の存在を示しておこうという意味をかねているのだろうか。

「そんなによくいったかしら」

と、昌子はうるさそうに答えた。よけいなことを言わないでいてくれればいいのに。ほかの人たちのあたしへの嫉妬や反感を、あおりたてるようなものじゃないの。彼女にはざわめきにみちた空気のなかを、鋭く飛びかうとげがはっきりとわかっている。みなはこう思っているのだ。

――なんだ。ちっとも美人でもないくせに。いい気になりゃがって。われわれが引きたてて、うまく運んでやってるからじゃないか。

――彼女、演技の勉強なんかなんにもしていないじゃないの。運がいいのよ。それとも、裏から手をまわして、自分を主役に売りこんでいるのかしら。

だが、それらの嫉妬が声となって出ることはない。たしかに、みなが内心でつぶやくように、昌子は美人とは呼びようがなかった。また、演技の修業もほとんどしていなかった。だが、役を与えられれば、それを完全にやりとげることができるのだった。明るい役であれ、清純な役であれ、また虚栄心の強い役であれ、どんな場合でも同じであった。だから、どのテレビ局の、どのディレクターも、そんな便利な彼女を使いたがるのが当然だった。みなの内心の嫉妬が声となれば、すぐに「それなら、きみにあれだけできるかい」と反問されるにきまっているのだ。

「じゃあ、つぎの仕事がありますので……」

昌子は小声であたりに言い、足早にスタジオの出口にむかった。しかし、廊下に出たとたん、また一人の男につかまってしまった。それはある新聞社の芸能部の記者だった。彼もしつっこく、同じようなことを話しかけてきた。

「はじめてのタイプの役なのに、すばらしい出来でしたよ。このごろの進境はすごいじゃありませんか。うちで記事に入れたいんです。いったい、どこでその才能を身につけたんです。失礼かもしれませんが、聞くところによると、あまり勉強もしなかったそうだし、リハーサルの時にはあやふやなこともあるそうじゃないですか。それが、いったん本番となると、見ちがえるように役を果たす。どこにその秘訣があるんです。ねえ、教えて下さいよ。この事はだれもが知りたがっているにちがいないんですから」

「秘訣なんてありませんわ。ただ、しぜんにやっているだけ。みなさんがほめて下さるけど、うまくいっているかどうか、あたしにはわかりませんわ」

「そうかなあ。そんなはずはない。きっとなにかあるはずですよ」

彼がなかなか離れそうになかったので、昌子は廊下にかけてある時計を見あげて言った。

「あら、急がなくては。つぎの仕事があるの。べつのテレビ局からの迎えの車が玄関で待っているのよ。そのお話はこんど時間のあいた時にでも……」

彼は芸能記者だけに、昌子がまもなくべつの局での番組に出なければならないことを思い出したらしかった。

「そうでしたね。だが、あなたのひまな時など、待っていたらいつまでたっても……」

彼の声をうしろに、昌子は控室に行き、衣装をぬぎ服にきかえた。服をきかえ終って腕時計をのぞくと、記者への逃げ口上どおり、少しは急がなくてはならなくなっていることに気がついた。

鏡にむかい、左の目の下にあるつけぼくろをはがし、紙に包んでポケットに入れた。そして、バッグを手に、滑りやすい廊下を玄関にむかった。

だが、華やかさと虚しさのまざった玄関のホールを抜けようとした時、昌子は背中をたたかれた。

「昌子さん。うまかったじゃないか。ここのテレビで見ていたんだ」

その言葉はさっきからのと同じ内容ではあったが、その声は彼女の足をひきとめた。ふりかえってみると、そこに旗野幸生が立っていた。

「あら、旗野さん」

旗野と昌子は学校時代からの知りあいであった。彼は、いま、ほうぼうのラジオ、テレビ局の台本を書く仕事をやっている。たまたま番組の打ち合せかなにかで、ここに来ていたのかもしれないし、昌子に話しかけるため、時間をはかってここで待っていたのかもしれない。しかし、昌子にはそのどちらであるかはわからなかった。

「すんだのなら、これからいっしょに帰ろうか」

「それがだめなの。あたしはこれから、つぎの仕事があるのよ」

「それは何時に終るんだい。終ってからどこかで会おう」
「一時間あとにはすむと思うんだけど。すんでから来週の打ち合せがあるかも……」
彼女は言葉をにごしたが、彼はあきらめなかった。
「ぼくはこれからいつものバーにいっているから、もし早くすんだら来てくれよ。ぜひ、話したいことが」
「ええ、早く終ったら寄ってみるわ」
昌子には旗野の話したいことがわかっていた。それはすでに何回も話された事でもあったのだ。そろそろ結婚してくれてもいいだろう、ということなのだ。
昌子にとって、このことは決していやなことではなかった。以前から彼に好意、いや、好意以上のものを抱き、いまもそれを持ちつづけている。自分でもいいかげんで今の状態を打ちきり、彼との結婚に入りたいと思っているのだ。
しかし彼女は今の状態、この異様な状態を打ち切るふんぎりがなかなかつかないのだった。なにかのきっかけがない限り、自分からは飛び出しにくい状態にとらわれているのだ。
彼女は大きく厚いガラスのドアを押し、外へ出た。外には自然の時間がもたらした夜の闇(やみ)がひろがり、そのなかに街灯が光の破片を散らしていた。つぎの出演局からの迎えの車はすぐに見つかった。昌子はそれに乗り、
「少し急いでちょうだい」
と運転手に声をかけ、シートに腰を下ろした。そして、バッグのなかから古びた本を取り出した。

手さぐりで取り出した一冊の本。
昌子の現在はこの本によって作られていると言えるのだった。黒ずんだ革の装丁の、あまり大きくない外国製の本である。彼女はうす暗い車のなかで、そっとページを開いた。遠い距離をへだてた異国のにおいと、遠い時間をへだてた過去のにおいがまざりあって、かすかに彼女の鼻をくすぐった。
においはいつも記憶をよびさます。昌子はこの本をはじめて手にした時のことを思い出した。この本は数年前、アイルランドに旅行していた伯母から彼女に送ってきたものだった。
しかし、その本にどんないわれがあるのか、伯母がどうして手に入れ、また、どんなつもりで昌子に送る気になったのかはわからなかった。なぜなら、その伯母はアメリカまわりで帰国の途中、ニューヨークで不慮の事故にあって死んでしまったのだ。いまでは聞きようも、調べようもなかった。
当時、昌子は英文科の学生だったので、その古い文体の文章を読むことはできた。本の表題は
「ほくろ占い」
なにげなくめくったページのところどころには、人体や顔が銅版画によって描かれてあった。そのあまりに現代と対照的な世界は彼女の好奇心を刺激し、辞書をひきながら内容を知ってみたい気をおこさせた。

――世界をつつむ天空では、多くの恒星が星座をつくり、そのあいだを惑星が運行し、目に見えぬ力で人びとの運命を導いている。それと同じことが、皮膚にもある。人びとの内にひそむ性格、かくされた運命も皮膚のほくろの位置によって象徴されている……。

このような言葉でその本ははじまっていた。彼女はもちろん、すぐにそれを信じてしまったわけではない。しかし、ぱらぱらとページをめくり、いくつかの銅版画の顔を見ているうちに、そのほくろの位置によって、その性格が想像できるような気がしてきた。ためしに一つをえらび、そばの説明を読んでみると、偶然かもしれないが、彼女が想像したものにほぼ一致していたのだ。

これはちょっと面白いクイズ的な興味でもあった。彼女はそのひとつひとつを見つめ、これは凶、これは吉、これは中途はんぱ、また、富に恵まれる、愛情が強いなどと首をかしげて想像し、それからそばの説明文を読んでいった。

当る率が多いように思われた。また、当らない時も、説明を読んでから見つめなおすと、自分のほうがまちがっていたような気がした。昌子はその本にしだいにひきこまれていった。

しかし、このほくろ占いの理論や歴史、つまり、そもそも古代ギリシャのメラムプスによってはじめられ、絶えることなく研究がうけつがれ、十八世紀の初期に体系がととのえられた、といったたぐいにはあまり興味がわかなかった。どの位置のほくろがどんな性格や運命を示すかという直接的なことに、より多くの関心があった。昌子はやはり現代に生きる若い娘なのだったから。

しばらくして、彼女は、鏡を手にしないではいられなくなった。自分はどこにほくろを持っていたか気になってきたからである。だが、鏡を見終ってほっとすると同時に、少しさびしい気持ちにもなった。ほくろらしいほくろは、彼女の顔のどこにもなかったのだ。

昌子はふたたび本のページをめくりつづけ、この奇妙なクイズ遊びに熱中した。

そして、本のなかほどに来たとき、彼女は眉（まゆ）をしかめた。黄色っぽいページの上に変なものがはさまっていたのを見つけたのだ。それは小さく、丸く、黒っぽい色をしていた。つまみあげてみたものの、なんでできているのかはわからなかった。

「妙なものね。ごみかしら」

彼女はこうつぶやきながら、そばのくずかごに捨てようとした時、これがつけぼくろと言うものではないかと思った。

このあいだの授業の風俗史で聞いた講義を思い出したのだ。十六世紀にベネチアからおこったつけぼくろの流行は、一時はヨーロッパじゅうにひろがったそうだ。だれもかれもが、男でさえもタフタやビロードを、小さなさまざまな形に切り抜き、顔にはりつけた時代があったという。

しかし、本の間からでてきたこのつけぼくろは、タフタでもビロードでもなさそうに見えた。むしろ革に近いように思われた。

珍しい物を手に入れたことに気がつきはしたが、これをどこにしまったものかと彼女は迷い、指でつまみあげたまま、なにげなくそのページに目を落した。

そこの銅版画の顔のそばの説明文は、思わぬ運が開けるほくろの位置を告げていた。

「面白いじゃないの」
昌子はこの偶然に、なんとなくいたずら心がおこった。化粧台のなかから、つけまつ毛用ののりをさがし出し、鏡にむかって、その図の示す位置に自分の顔を飾ってみようとしたのだった。鏡では図とちがって左右が逆になることにとまどいながら、右の眉毛のそばにはりつけてみた。鏡のなかの彼女の顔は、なにかいいことがありそうな表情を作っていた。
「さあ、きっとなにかおこるわよ」
昌子は鏡のなかに冗談めいた口調でささやいてみた。
その時、電話のベルが鳴ったのだ。
「どなた」
「ぼくだよ。旗野だ」
その声で彼女はにっこりした。まんざらききめがないわけでもないわ。こうすぐにデイトの誘いがかかってくるとは。
「あら、映画でも見に行きましょうか」
しかし、彼からの用件は、彼女の想像とちがっていた。
「それどころじゃないんだ。ぜひ、きみの助けをかりなくてはならないことが出来てしまったんだ」
「なによ、そんなにあわてた声をだして」
「きみも知ってるように、ぼくの脚本で演劇部の連中が、あさってから芝居をやることになって

いるんだが」
「それは知ってるけど、それがどうかしたの」
「予定していたやつが一人、病気で倒れちゃったんだ。きみ出てくれないか。ちょっとは演劇部にいたんだから、やってやれないことはないよ」
「だけど、あたしなんか……」
「たのむよ。ほかにいないんだ。たいした役じゃないから、そう心配することはないさ」
旗野からのたのみでは、昌子は断わりきれなかった。
「いいわ。でも、うまくいかなくても、あたしのせいじゃないわよ」
「ありがたい」
「それでどんな役なの」
「じつは、いじの悪いオールドミスの役なんだ」
「いやな役ね。だけど、引きうけたからにはやってみるわ」
そして、その当日。昌子は面白半分に、いじの悪い相を示す位置にそのほくろをつけ、舞台にあがった。芝居そのものは上出来ではなかったが、昌子の演技は完全だった。いじの悪い役は目立つものだが、そればかりでなく、役そのものになりきり真に迫っていたのだった。
これがすべてのはじまりとなった。観客のなかに学校の先輩のテレビ・プロデューサーがいて、昌子にテレビドラマへの出演をすすめてみたのだ。
一回ぐらいなら話の種に出てみようかしら。そう思って応じたのが、一回ではすまなくなって

きた。彼女は冗談ではなく、その古い本と黒っぽいつけぼくろにたよらざるをえなくなった。特に美人でもなく、才能もなく、修業もほとんどしていない者の上に、予期もしなかった好評と期待がつみ重なってきた場合、たよるとなるとこんな物以外にない。しかし、本とつけぼくろは、彼女にそのたびごとに成功をもたらした。

藤川昌子という女はどんな役でもこなしてしまうぞ。このうわさは彼女の意志とは反対に、テレビ局のあいだにひろまっていった。

昌子は旗野との距離がひろがってゆくようで、さびしさに似た気持ちを持った。もちろん、おたがいの愛情に変化はないが、会う機会がへり、結婚へ踏み切ることがますますできにくくなってきたのだった。

「もう、一切テレビには出ません。仕事はやめます」

こう宣言できないことはない。だが、テレビカメラのむこうにいる目に見えない大衆のむれは、一種の強い圧力となって迫り、彼女にはそれが口に出せなかった。やむを得ず次の出演を承知し、出るからにはと、本とつけぼくろにたより、その成功はさらにつぎの出演を招いた。この循環はいつまでつづくのだろう。打ち切ることはできないのだろうか。

昌子は自動車の揺れで、追憶からさめた。

「さあ、そろそろ、つぎの番組のほくろの位置を調べなくては」

昌子はこうつぶやいて、バッグのなかに手を入れ、小型の懐中電灯を取り出し、パチリとスイ

ッチを入れた。しかし、本の上にはいつものように黄色い光のスポットは現れなかった。

「おかしいわ」

彼女は懐中電灯を軽く振ってみた。だが、故障なのか、電池がきれたのか、やはり光は出てこなかった。しかたなく、彼女は本を持ちあげ、車の外を流れる街灯、ネオン、ヘッドライトなどのまざった光をたよりに、ページをめくった。

これから行く局での番組では、彼女は浮気な女の役を与えられている。これもはじめての役柄だった。浮気な女の相がどこかにあったはずだと、ページをめくりつづけ、ちらちらする窓外の灯によって、それらしいのをさがし出した。その銅版画の図は右の耳のなかを示していた。

「へんな所だわ。こんな所でいいのかしら」

彼女はポケットからつけぼくろを出し、のりをつけて、指示どおりにつけた。もっとも、いままでに役柄によっては胸とか、足とか、外から見えない部分につけたことがあり、それでも、つけぼくろは約束どおり彼女をその性格に作ってくれたので、彼女も特に疑念は抱かなかった。

「まあ、一応つけておいて、局についてから明るい所で調べなおし、ちがっていたら、つけかえることにするわ」

こう心のなかできめ、腕時計をのぞいた。しかし、番組のはじまるまでに残された時間はあまりなかった。彼女は運転手に声をかけた。

「お願い。急いで下さいね」

「ええ、そうしたいんですが、なにしろ、いまはこの辺がラッシュでね」

そう答えられて外を見ると、なるほど急ぎようにも急げない自動車の混雑だった。いらいらしているうちに時間はたってゆき、車のほうは少しずつ進んだ。そして、やっと局の玄関についた。

玄関には番組の係が待ちかねたような顔で立っていた。昌子の乗った車をみつけると、あわててかけより、ドアをあけ、呼びかけた。

「藤川さん、ずいぶんおそいですね。どうなることかと、はらはらしてましたよ。スポンサーが代ってはじめての番組だから、気が気でなかった」

「道がこんで仕方なかったのよ」

「でも、まにあってよかった。すぐスタジオに入って下さい」

彼は昌子の手をひっぱるように車からおろし、うしろから追いたてるように廊下を案内した。

「あと何分あるの」

「五分ぐらいでしょう。すぐスタジオに入って下さい」

「では、大急ぎで衣装をかえなければ」

「そんな時間はありませんよ。しかし、きょうのドラマならその服で立派に通用します。それに、藤川さんなら、いつでも役になりきれるんですから、少しぐらい服がちがっていても、演技でカバーしてしまえるでしょう」

「その点はなんとかなるでしょうけど、ちょっと本を見たいのよ」

「本ですって。ああ、台本のことですか。だけど、リハーサルはきのうすっかり済んでいること

ですから、なにも今さら見ることはないじゃありませんか」

「台本のことじゃないのよ」

「なんの本です。冗談じゃない、ゆっくり読書している場合じゃありませんよ。ディレクターがじりじりしています。さあさあ、入って下さい」

昌子は押しこまれるようにスタジオに入り、係はうしろで防音扉をしめた。本番前のあわただしさのなかで、関係者たちは昌子を迎え、ほっとした。

ちょっとした確かめあいや、カメラの向きの訂正などを打ちあわせているうちに、さらに時間がたった。

「本番一分前」

と声が伝わってきて、ざわめきが静まり、それが緊張へと変っていった。照明が強まり、音楽がはじまり、セットが活力をみなぎらせはじめた。

しかし、そのなかで昌子は、いつもとちがう気持ちに気づいた。自分だけがまわりの動きとなにかずれているのだ。だが、ドラマは進行をはじめている。せりふを言い、動作をつづけなければならない。

場面がかわり、カメラが昌子からはなれた。そのあいまを見て、演出の助手がまっ青になって寄ってきて、彼女に耳うちした。

「どうしたんです。なにかかんちがいしているんじゃないんですか。きみの役は浮気な女なんですよ。あれでは浮気のうの字も感じられない」

「どうも調子がでないのよ。ほくろが本とちがってたのかしら」
「え、なんのことです。ほくろだの、本だの。しっかりして下さいよ。いつものあなたらしくない。このままではとりかえしのつかないことになってしまう」
「ええ」
助手は離れ、ふたたびライトとカメラが昌子に集中した。だが、やはり周囲とのずれは大きくなる一方だった。相手役の俳優の困った感情が、はっきりと彼女に伝わってきた。相手役ばかりでなく、ディレクターのあわてていることも想像でき、スポンサーの苦い顔が目に浮かんだ。
しかし、昌子にはどうにもならなかった。なんとか役の性格になりきろうとしても、目に見えぬ力がそれをはばんでいるようだった。
スタジオ内が混乱に近い状態になっていることがわかっていても、彼女にはどうにもならなかった。スタジオ内だけではすまず、これは電波に乗っていたる所に拡大しつつあるのだ。もはや、この局だけでなく、どのテレビ局にも出られなくなるだろう。いままで嫉妬を押えていた連中が、これを機会にいいかげんなことを言い歩くだろうし、どのディレクターだって多額の費用をかけて製作する番組に、とんでもない失敗をやる可能性のある人間を使おうとするはずがない。昌子はすべてが終りになったことを知った。
同時にドラマも終っていた。彼女はうつむき、セットのかげに置いておいたバッグを持ち、かけながらスタジオを出た。もはや二度と通ることのない廊下、玄関を抜けて夜の空気にふれ、やっとわれにかえった。

「これでおしまいというわけね」
だが、なにかしら重荷がとれたような安堵（あんど）が感じられた。いつ果てるともしれない循環の渦から助け出されたような思いだった。彼女の頭には旗野のことが浮かんできた。
「そうだわ。次週の打ち合せはもうないんだから、旗野さんの待っているバーに寄ってみようかしら」
昌子はこうつぶやきながら、自動車を拾おうと、大通りへの道を歩いた。そして、道ばたのごみ箱のなかにでも、もはや効き目を失った本を捨ててしまおうと考えた。だが、その前に、さっきつけたほくろの位置がちがっていたのかもしれないと気づき、それを調べるため、街灯の下でページをめくってみた。
その原因はすぐにわかった。さっきからつけていたほくろの位置は、やさしく従順な妻を示すものだったのだ。彼女は本を閉じ、そばのごみ箱のなかに投げ入れた。
「やあ、昌子さん。来てくれたね」
彼女がバーに入って行くと、旗野は喜びの目を見開いて迎えた。
「ええ。あたし、そろそろテレビの仕事をやめようと思うの。きりがないものね」
「よく決心がついたな。では、懸案の問題にでも入るか」
「そうしましょう」
「その前にゆっくりきみの顔をながめさせてくれ。きみがよくほくろを方々につけてたが、いっ

たい本物はどこにあったのか、さっきから思い出そうとしていたところなんだ」
「さがしてごらんなさい。宝さがしよ」
二人は顔をみつめあいながら、グラスをあけた。やがて旗野は声を高めた。
「あ、その右の耳。それは本物らしいな。だが、前からそんなところにあったかな」
昌子は思わず指先をそこに当ててみた。だが、そこにあるものは、いつもの、はがれるほくろではなかった。自分では気がつかなかったが生まれつきそこにあったのか、いつのまにかそこにできたのか、また、つけぼくろが皮膚に定着してしまったのか。しかし、いまの彼女にはそれはどうでもいいことだった。
彼女は明るい声で言った。
「ここにほくろのある女は、どんな性格と運命を持っているかわかる……」

友を失った夜

春とはいえ、どことなく寒さのただよう二〇三〇年のある夜であった。
深いビルの谷間のうえには、三日月が細く傾いていた。その欠けた部分では、月の基地から火星へむけての光線信号が、チカチカとまばたくように輝いていた。
ビルの山脈の果てのあたりからは、黄色い炎の尾を引っぱりながら、ロケットが飛び立ち、空の黒さのなかに消えていった。
窓のそばに立って、そとをながめていた老婦人は、手を口に近づけ、
「坊や。こっちの部屋においで」
と、となりの部屋の孫に呼びかけた。ちょっと見ると指輪のような小型マイクが、その声を壁のむこうに送ったのだ。
まもなく静かにドアが開き、小さな男の子が入ってきて言った。
「おばあちゃん、どうなったの。まだ、だいじょうぶなの」
「どうだろうねえ。死なないでくれるといいけどね。さあ、こっちへおいで。テレビをつけてみようね」
祖母は安楽椅子(いす)にかけ、そのひざの上に孫を招いた。孫はおとなしくそれに従い、椅子はゆら

ゆらと揺れた。

いつもなら呼んでも遊ぶのに夢中で、なかなか来ないのに、ここ数日はちがっていた。たいていの男の子はこんな時間には、宇宙生物のオモチャに熱中している。電気じかけで壁や天井をはいまわるオモチャ。彼らはそれにむけて、手の光線銃を射つ。命中すると、怪物のオモチャが苦しそうな悲鳴をあげる遊びなのだ。

しかし、このところ坊やはその遊びをしなかった。坊やばかりでなく、どこの家の子供もそうだった。人類が親しい友人を失おうとしていることを、子供たちも感じとっているのだった。

祖母は椅子についているボタンを押した。部屋の片すみにあるミルク色の衝立が徐々に色彩をおび、そこに荒々しい世界が展開しはじめた。

「これ、なんていう映画なの。あんまり見たことのないのだね、おばあちゃん」

「これはね、ずっと昔の映画『ターザンの秘宝』というのだよ」

このごろは、このような映画を毎日のようにやっている。きのうは『インドの太守』というのをやっていた。猛獣たちの声、熱帯の木の葉のざわめき。二人はしばらくのあいだ、古いフィルムの描き出す世界に身をおいた。

やがて映画は中断され、アナウンサーがかわって、臨時ニュースを伝えはじめた。

〈その後の経過を申しあげます。病状はあいかわらず一進一退をつづけておりますが、一時間ほど前から、だいぶ危険な状態となってまいりました。医師たちは酸素吸入、強心剤などあらゆる方法をつくしております……〉

坊やは目を閉じ、手をあわせ、口のなかでなにかを言った。祖母は問いかけた。

「坊や。なにをしてるのかい」

「うん。お祈りをしているんだ。どこの子もやっているよ。どうか死なないで、って」

「いい子たちだね。あのゾウもそれを知ったら、きっとうれしがるよ」

テレビのアナウンサーの声はつづいた。

〈……鼓動がとぎれがちです。ここ数ヵ月、なにも食事をとっていませんので、もう絶望かもしれません。あと数時間のうちに、わたくしたち人類は、よき友であったゾウを失うことになるのです……〉

ニュースは終り、ふたたび映画のつづきがはじまった。孫は祖母に聞いた。

「むかしは、あんなにゾウがいたの」

「あたしも、あんなに集っているのは見たことがないよ。あたしの子供のころには、もうずいぶん減っていたから」

「でも、本物を見たことはあるんだね」

「ああ、動物園というのがあってね、そこで二頭だけ見たよ。細く、やさしく、さびしそうな眼をしていたよ」

「どんなにおいがした……」

「さあ、枯草のようなにおいだったような気がするよ」

「枯草って」

孫は枯草を知らなかった。見たことも、触ったこともなかった。コンクリートの都市は加速度的に地上にひろがり、草原などは目のとどく所には残されていなかったのだ。

このような時代の流れは、人間以外の動物たちにとって不幸だった。問題になりはじめた時には、ゾウのようにからだの大きい動物は、その数がずいぶん少なくなってからだった。

そして、問題になってから方策がたてられるまでにも、時間がかかった。人間に関する問題のほうが、いつも優先せざるをえなかったのだ。やがて、手はつけられたものの、ゾウたちにとっては、あまり住心地のいいものではなかった。

清潔な空気、完全な飼料、美しい檻（おり）。このような一区画に、残ったゾウたちが集められ、行きとどいた管理がなされはした。しかし、ゾウはやはり減りつづけたのだ。

「おばあちゃん。ゾウはなぜいなくなっちゃうの」

「ああ、きっとね、この地球のうえには、ゾウの好きな場所が、もうなくなってしまったからだろうね」

「ゾウはなにか悪いことをしたの」

「なにも悪いことはしないよ。人間と仲よく遊ぶためにあったのだよ。だけど、このごろは人間があまり遊んでくれなくなったので、ゾウは生きている必要を感じなくなったのだろうね」

「つまんないな。ぼくは大きくなったら、ゾウと遊んであげてもいいんだがな」

「子供のころはだれでも、そう考えるよ。だけど、大人になると、ゾウのことなんか考えもしなくなる。そんな時代がつづいたので、ゾウもあの一頭になってしまったんだよ」

「病気のゾウは、いまなにを考えているんだろうな」

「人間たちと、密林のなかをあばれまわった先祖たちのことだろうね。この映画のように……」

祖母はテレビの画面を指さした。その古いフィルムのなかでは、いま死にかけているゾウの先祖たちが、元気に、何頭も山を越え、川をわたっていた。栄光を示すような、強く明るい太陽のもとを。

ゾウたちは、鼻を振り、樹を倒し、叫び声をあげた。ありあまる力が画面からあふれでてくるようだった。

坊やは食いいるように見つめていたが、祖母はべつのことを考えていた。いま発展をつづけている人類も、いつかは減り、ゾウと同じようにただ一人になってしまう時がくるかもしれないということを。そんな時に、その人はどんな事を考え、なにものが見まもってくれるのだろう。

またもフィルムが中断し、アナウンサーがかわった。

〈お知らせいたします。とうとう、手当のかいもなく、ゾウは死んでしまいました。人間にとって、長い長いあいだ親しい友人であり、楽しいピエロであったゾウは、ついに絶滅してしまったのです……〉

坊やはそれを聞いて、ぽつりと言った。

「とうとう死んじゃったんだね」

「そうだよ。動き、呼吸し、喜んだりするゾウは、もうどこにもいなくなったんだよ」

そして祖母はしばらく黙っていたが、夜がふけていることに気がついた。

「さあ、もうおそいから、ベッドにおはいり」
「うん。ぼく、こんやはゾウのオモチャといっしょに寝ようかな」
「ああ、そうしなさい」
坊やはドアから出ていった。いま死んだゾウはこの夜、世界じゅうの子供たちの夢にあらわれ、別れを告げてまわるのだろう。

健康の販売員

きょうもいい天気だ。その空を太陽系一周の観光ロケットが、白い煙を長く引きながら小さくなって消えていった。
だが、私はいつものようにロボット・キツツキを肩に、ベルトロードの上に乗っている。私は二〇六二年の薬売り。かつて若いころにはSF作家を志したものだが、こう科学の進歩が早くては、とても空想が追いつかない。そこで薬売りに転向したのだ。
きょうはこのブロックの家庭を回らなければならない。ベルトロードをスローに乗りかえ、一軒の家の前で降りた。玄関の前に立つと、肩のロボット・キツツキが、
「銀河製薬からまいりました」
と、ドナルド・ダックのような声でわめきたてた。人間というものは、いつの世になってもぶしょう者なので、こうして訪問しないと、なかなか売上げが伸びないのだ。しばらくすると、ドアが開き、この家の主婦が応対に出た。
「あら、薬売りさんね」
「はい。さっそくですが、お使いになった薬を調べさせていただきましょう。まず、お坊っちゃんからにしましょうか」

「さあ、坊や。いらっしゃい」

と、主婦は、私のキッツキに話しかけている五つぐらいの男の子を、長椅子の上にうつ伏せにさせた。私がなれた手つきで、子供のおしりをむき出しにすると、キッツキがすぐに飛び下りて、その口ばしを筋肉深くつきさした。

このロボット・キッツキの口ばしは、精巧な電気メスになっているので、血も出なければ、もちろん痛くもない。たちまちのうちに、おしりの筋肉内から小さなカプセルが取り出され、私の手の上に乗せられた。それをキッツキの翼の下にさしこむと、キッツキはカチカチと音を立てていたが、まもなく測定の結果を報告する。

「ビタミンAは……。B_1は……」

このカプセルは細かい穴のいっぱいにあいたプラスチックで作られ、なかには濃度の高い栄養剤がつめこまれている。これを筋肉内に埋めておけば、人体は必要に応じて、そこから不足した栄養を取り出し、消費する。つまり、簡単にいえば、二十一世紀になって体内に発生した新しい臓器といえよう。

私は定期的に各家庭を訪問し、その消費されたぶんを補給し、代金を集めてまわるのが主な仕事だ。キッツキは補給し終えたカプセルを、ふたたび子供のおしりに埋めた。

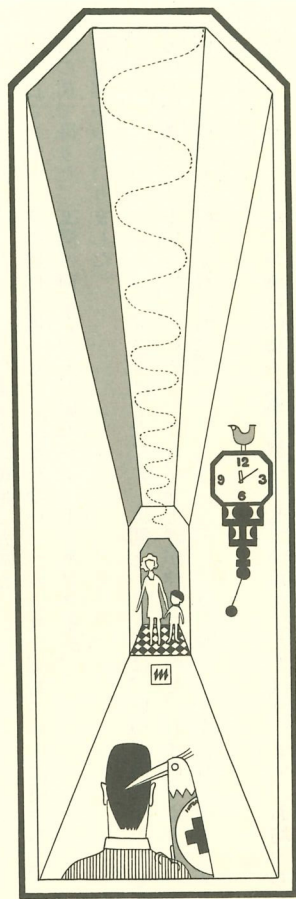
「さあ、坊っちゃんはすみましたよ。ではつぎに奥さまのを」

私は商売がら、仕事中は効いている性欲コントロール薬を飲んでいるので、ご婦人のおしりを目の前にしても、昔の人が考えるように興奮はしない。落ち着いたものだ。

「奥さまのおしりは、あいかわらずお美しいですな」

「それというのも、このカプセルのおかげだわね。栄養のバランスは、これでいつも正常に保たれているわけでしょう」

「はい。栄養のみならず、どんな微量元素のミネラルも含まれていて、細胞の老化速度を最大限におそくしております」

生命現象とは各種の酵素の働きの総合である。その酵素は微量元素の存在によって作用が大きく支配されるわけだが、その関係が大部分あきらかにされたので、人間の年のとり方が実にゆっくりになったのだ。もちろん、寿命の伸びていることは言うまでもない。そして、その伸びた分

だけ薬を使ってくれるので、製薬会社としてもありがたい。まったく、世の中は持ちつ持たれつだ。

「ところで、腕時計用注射装置のほうの薬は、まだよろしいでしょうか」

「そうね。ちょっと見てくるわ」

主婦はとなりの室に行った。だれでも百年前のと大差ないような腕時計をつけているが、その性能には大きなちがいがある。当然、時間を見ることもできるし、ラジオの機能も持っているが、健康のためにもなくてはならない装置なのだ。たえず脈搏や血圧体温を測定しつづけ、異常があると、たちまちベルが鳴って警報を発する。ガンの兆候も同じように知らせてくれる。人びとはそれによって病院に行けば、すぐに治療されるしかけだ。

だが、この腕時計装置は、もっと日常的な役に立っている。大部分の人びとは日課がきまっているので、それに合せて薬をつめておけば、時間の経過とともに、自動的に静脈に注入が行われるのだ。もちろん無痛だ。

たとえば、朝、起きるべき時間になると覚醒剤が、それにつづいてヒゲの抜ける薬品が、朝食のための食欲増進剤が、食事がすむと胃腸の働きを活発にする薬が、という順に注入される。通勤時間には、ベルトロードの乗りかえでころばないための緊張剤、会社につけば能率増進剤が……といったぐあいに、つぎつぎと効果をあげつづける。

そして、家庭を持つ者ならば、夜になると精力剤、最後に睡眠剤、眠りに入っているあいだにも、体内に残る余分な薬品を中和してしまう解毒剤の注入がゆっくりとつづく。だから、この薬

品はそれぞれの人の日課に合されて調整されている。

「いまのところはまにあってるわ……」

と、隣室の記録装置を調べてきた主婦が答えた。

「……だけどね、このあいだはとんでもない目にあったのよ。まだ真夜中だというのに、主人がとつぜん飛びおき、腹がへったと叫び、食べ終ると外に飛び出していったんですからね」

「それはお驚きになったことでしょう。時計のほうはわたしどもと関係ありませんが、やはり時どきは検査にお出しにならないといけないようです。このあいだ訪問したご家庭では、月曜日の薬が日曜日に作用して、せっかくの休日の予定が狂って大さわぎでした。さて、健康と生活の薬のほかに、なにか趣味の薬のご入用はございませんか」

「そうね。じゃあ、カタログを見せていただこうかしら」

私の合図によって、肩のロボット・キツツキは目を光らせ、壁にカタログをつぎつぎとうつしだした。

〝芸術的感受性を敏感にする薬〟

〝テレビにあきた人に白昼夢を見せる合成麻薬。完全解毒剤つき〟

〝聴神経を抑制することによる騒音防止剤。赤ちゃんのある家庭にどうぞ〟

〝記憶促進および忘却促進剤〟

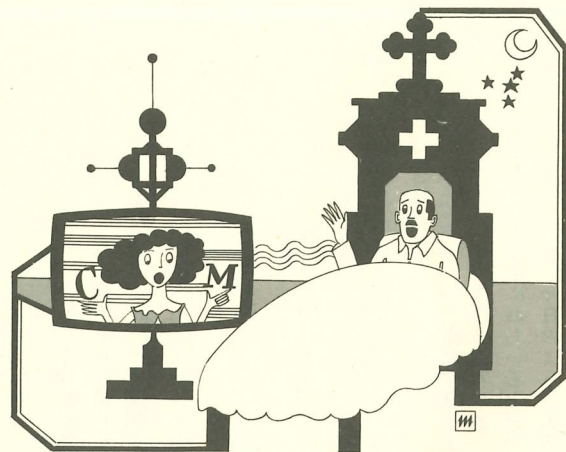
〝テレパシー剤〟

「あら、そのテレパシー剤というのはどんな薬なの」
と、主婦は興味を抱いた。
「ああ、それは最近完成した、あらゆる感覚と、判断力をいっせいに敏感にする薬です。まあ、昔の言葉でいえばカンを良くするという効果をあげるわけです」
「いい薬ができたのね。では、それをいただこうかしら。じつはね、どうも近ごろ主人のようすがおかしいのよ。よそに好きな女ができたのではないかと、ちょっと気になるの」
「いや、奥さまのようにおきれいなら、そんなことはございませんでしょう。しかし、どうしても気になるのでしたら、この薬はその目的にぴったりです。これをご使用になれば、ご主人の変なそぶりを見すごしてしまうことなく、また、それにもとづいて総合的な判断がすぐさま下せますから、すべてはすぐに見やぶれましょう」
「便利な薬ができたものね」
「かつては、こういった目的のために自白薬が使われましたが、これはなにもなかった場合、あとに気まずさを残しますので、ご存知のように最近は需要がなくなってしまいました。それに代って登場したのが、このテレパシー薬です。はじめはロケット操縦士、警官むけでしたが、近ごろ、一般の人たちのあいだでも、多く使われるようになりました」
「今夜、さっそく使ってみるわ」
私は薬を渡し、キツツキが計算した代金をうけとり、あいさつをして、その家を出た。

そして、近くの公衆電話から、主人の勤め先に連絡し、すぐさまテレパシー防止薬を売りつけた。どうも、浮気の虫の退治薬だけは、なかなか完成しないようだ。
さて、つぎの家庭の訪問だ。こんどの家は少しうるさい。私はポケットから小型噴霧器を出し、薬の霧を吸いこんだ。私の表情はいっそうにこにこし、舌の筋肉の動きもよくなりはじめた。そこで、
「銀河製薬からまいりました」

むだな時間

「やあ、よく来たな。どうじゃ、孫たちは元気かね。おまえの仕事はうまくいってるかね」
郊外の静かな林にかこまれた別荘で、ひとり余生を送っているエル博士は、ひさしぶりにたずねてきた息子のアール氏を迎えて、こう声をかけた。
「はい。家族はみな元気です。また、わたしの仕事も、おかげでますます順調です。しかし、お父さんもあいかわらず楽しそうですね」
エル博士とは、かつてかずかずの新発明を世に送りだした業績を持っているが、いまはこの別荘でゆうゆうと暮している八十歳を越えた老人である。だから、息子とはいっても、アール氏はもう五十歳ぐらいで、大きな広告会社を経営している。
長椅子にねそべったエル博士は、太陽灯の光をあびながら、にこにことうなずいた。
「うむ。むかしとちがって、いまどきの老人は退屈しないからな。ありがたい世の中じゃよ」
「どういうことですか、それは」
「テレビじゃ。一日じゅうテレビをながめていれば、仕事から引退した老人たちも、時間をもてあますことがない」
これを聞いて、こんどはアール氏がにっこりした。

「お父さんにそう言っていただくと、わたしとしては特にうれしく思いますよ。としよりの人たちにそんなに喜んでいただいているとは、ありがたいことです。わたしたちがテレビ局とスポンサーのあいだをかけまわり、少しでも面白い娯楽を大衆に提供しようとしている努力が、むだでないわけですね。そもそも、現代という時代は、大衆とテレビ局とスポンサーの三つで成り立っています。わたしたち広告業者は、その関係をいかに円滑に……」
アール氏はうれしさのあまり、つい、いつもの社員たちへの訓示の口調になった。だが、エル博士はそれをさえぎった。
「だが、番組のあいだに入る、あのコマーシャルというものは、まったく目ざわりな存在じゃな」
「そんなことをおっしゃっては困ります。みなが面白い番組をながめられるのは、多くの会社がスポンサーとなって、お金を出してくれるからです。お父さんのようなとしよりはべつとして、若い者はこの理屈をわきまえていて、あまり文句を言いません。それに、コマーシャルだって、社会に必要なものなのです」
アール氏はこんどはコマーシャルの弁護をはじめた。彼は心からコマーシャルの必要性を信じていた。コマーシャルこそ現代のモラルであって、もし、コマーシャルがなくなったら、人びとは生活の指標を失って大混乱におちいると思っているのだ。もっとも、これくらい自己の職業に誇りを持っていなかったら、今日のように広告界で成功することもなかっただろう。
「おまえはそういうが、わしはどうもコマーシャルが好きになれんのじゃ。あんなものは、ない

ほうがさっぱりしていいと思うが」

「もちろん、なしですむのなら、見るほうにとって便利かもしれません。しかし、現代の社会機構ではそれは無理ですよ。仕方のないことでしょう」

顔をしかめながら弁解するアール氏に、エル博士は言った。

「その仕方のないことを可能にするのが、科学者のつとめじゃ。わしもこの別荘で、ただぼんやり暮していたのではない。社会のためになる発明をひとつ完成した。それをおまえに見せてやろう」

「それはなんです」

「まあ、そのテレビを見ていてくれ」

こう言いながら、エル博士は手をのばして、リモートスイッチを入れた。やがて、画面には流行歌を歌っている若い女性があらわれた。

「あ、この番組はうちの会社で扱っているもの

ですが、これがどうかしましたか。べつに変ったようすもないと思いますが」

「まあ、もう少しながめていてくれ。いまに面白いことがおこる」

アール氏は首をかしげながらも、父親の言うことなので、しばらくのあいだ見つめていた。そして、番組が終りに近づいた時、アール氏にとって、思わず声をあげずにはいられないことがおこった。

「あ、これはどうしたことだ。とんでもない話だ。さっそく、テレビ局に文句をつけ、スポンサーには社員をあやまりに行かせなければ。こんな大失敗ははじめてのことだ。ちょっと電話を使わせて下さい。会社に連絡しますから」

アール氏があわてたのも当然だった。その番組が終ったかと思うと、すぐにつぎの番組がはじまり、そのあいだに入れるべく、彼の会社で苦心して製作したコマーシャル用のフィルムが現われなかったのだ。番組を扱った広告会社としては、今後の信用にかかわる事件だった。

しかし、エル博士は落ち着いたものだった。

「ま、待ちなさい。電話などかけるにはおよばんよ。それは広告会社の手ちがいでもなければ、テレビ局の故障でもない。わしの発明したコマーシャル消し器の働きだ」

「え、コマーシャル消し器ですって……。しかし、コマーシャルだけが煙のように消え失せてしまうなんて、ありうる事とは思えませんが」

「人間というものはだれでも、自分のやっていることは永久に大丈夫と思いたがるものじゃよ。しかし、科学の進歩の前にはそうはいかん。事実、いま見た通り、消えてしまったではないか。

すごい発明だろう」

うれしそうに笑うエル博士とは反対に、アール氏は複雑な表情になった。

「た、たしかにすばらしい発明です。だが、すばらしすぎますよ。こんな物が普及したら、困る人が続出してしまいます」

「そうかね。わしは喜ぶ者のほうがはるかに多いにちがいないと思うが」

「それはそうですが、第一に広告会社が困ります。わたしがまず失業してしまうでしょう。お父さんの発明のせいですよ」

と、アール氏は青くなった。

「いや、そう心配するな。わしだっておまえのことを考えないわけではない。おまえはこの装置を製造する仕事をやればいい。宣伝さえ行きわたれば、売れることはまちがいない」

「コマーシャル消し器のコマーシャルを、テレビでやることになるとは……」

あまりのことに、アール氏は気を落ち着けようとして、話題を少し変えた。

「……お父さんもすごい物を完成しましたね。だが、どんなしかけなんです。あまり複雑なものでは、高くついて、買う人もあまりないでしょう」

「いや、そう複雑なものではない」

「しかし、どこに消えてしまったんです、さっきのコマーシャルは」

「おまえならよそに行ってしゃべることもあるまい。教えてやろう。じつは、コマーシャルのあいだ眠っていたのだ」

「眠っていたとは……」

「そうじゃ。あらかじめ、どの番組ではどこにコマーシャルが入るかを調べ、それをなかの時計に覚えさせておく。そして、その時間になると、人体に無害の睡眠電波が自動的に聴視者にあてられるのだ。コマーシャルが終ると、その電波はとまり、目がさめるというしかけだ。これでコマーシャルを見ないですむ」

「なるほど、そういう構造だったのですか」

アール氏はふと子供のころを思い出して苦笑した。頭を下げて、父親エル博士の小言をやりすごしたのと、なんとなく似ているではないか。

だが、そんなことにおかまいなく、エル博士は大得意だった。

「どうじゃ。これは人びとのためになる装置にちがいないぞ。わしの計算では、コマーシャルは番組のほぼ一割の時間を占めている。これは少ないようで、ばかにできん。一日に一人が百分間をテレビに費すとして、その十分間がコマーシャルじゃ。百万人なら延べ一千万分、つまり約十七万時間が、愚にもつかん行為から解放され、休養にふりむけられるわけじゃ。どれほど喜ばれるかわからないぞ」

エル博士は装置の効能をのべたてたが、アール氏は腹のなかで、これはなんとしてでも止めなければなるまいと考えた。彼の信念はべつとしても、いまの広告会社という確実な商売をやめ、海のものとも、山のものともわからないコマーシャル消し器の製造に転業するのは、どう考えても得策とは思えなかったのだ。そこで、さりげなく言った。

「わ、わかりました。有益な発明にちがいありません。しかし、お父さん。これにはまだ改良の余地があるように思えます。このままでは製品として不適当でしょう」

「それはどんな点じゃ」

「つまり、コマーシャルのあいだ眠るわけですから、そのときタバコを吸っていた者は、手から取りおとして、火事をおこすおそれがあります」

「うむ、そういえばありうる話だな」

「そればかりではありません。熱いコーヒーを飲みかけていた者は、茶わんをひっくりかえし、やけどをします。また、泥棒はこの装置をつけたテレビのある家をねらうでしょう。コマーシャルのあいだなら、簡単にしのびこめるわけです」

アール氏は必死になって、この装置の欠点を思いつくままに数えあげた。

「なるほど」

「それに、いまの若い者はテレビを見ながら飲み食いするのが普通ですから、それが眠りで中断したら、あたりがよごれて大変でしょう」

「どうも行儀のわるい連中だな。しかし、そのような点を改良するとなると、なかなかやっかいだ」

首をかしげるエル博士に、アール氏はここぞと身をのり出した。

「だから、わたしはこれはお父さん専用にしておいたほうがいいと思いますよ。これが世に出なければ、わたしもいまさら転業しないですみます。もうけが同じなら、なれた広告会社のほうが

安心です。お父さんも、いまさらこの改良の研究をやるより、コマーシャルを見ない特権を味わいながら、テレビを楽しんで余生を送ったほうが賢明でしょう」

息子の熱心な言葉に、エル博士はうなずいた。

「考えてみれば、そうかもしれんな」

「そうですとも……」

と、アール氏はほっとした。これで広告業界における無用の混乱が、未然に避けられたのだ。

そして、しばらく家庭的な雑談をつづけたあと、アール氏は、

「では、お父さん。お元気で」

と、あいさつをし、帰っていった。

その後、アール氏は広告業にせいを出し、エル博士はのんびりとテレビ見物に日をすごし、平穏な年月が流れていった。

だが、やがてエル博士に天寿を全うする日が訪れた。

「わしはもうだめじゃよ」

こうつぶやくエル博士の枕もとで、アール氏は言った。

「お父さん、元気を出して下さい。例の薬を常用なさっていれば、こんな病気ぐらいに負けることはありませんよ」

「例の薬とは、何の薬だね」

「ごぞんじないのですか。だいぶ前から、テレビで大きく宣伝しているあの老人薬ですよ」
「そんな薬があったのか。わしはコマーシャルを見ないからな」
「ああ、なんということだ。これというのも、あのコマーシャルを消す装置のせいだ。あの薬さえ毎日飲んで抵抗力をつけておけば、まだ死ななくてもよかったのに。残念です。しかも、わたしの考えたすばらしいキャッチフレーズをつけた薬だったのに」
「いや、いまさら残念がっても、もう手おくれじゃ。だが、おまえの作ったそのキャッチフレーズというのを、この世の思い出に聞いておこう。どんな文句だ」
「それは、あなたの老後を一割のばせる、という文句です」
「なんだ、それならなにも残念がることはない。同じことじゃないか。いままで見ないできたコマーシャルの時間だ。それを見なおすなら、そのぶんだけ長生きさせてやると言われても、わしは断わるよ」
　エル博士はにっこりと笑い、静かに目を閉じた。

乾燥時代

その老人の部屋はビルの八十階にあった。これは偶然だったが、その階数は彼の年齢に一致していた。彼は一日の大部分を、その部屋のなかで一人ですごしていた。
　部屋の片すみの薄暗い壁で、ネオンサインの小さな数字が、二一五五と静かに光っていた。自動カレンダーがその年を示しているのだ。カレンダーは月と日付と曜日をも教えていたが、隠居した老人にはそれは関係のないことだった。
　金属的な鐘の音がやさしく五つ鳴った。つづいて女の声がした。
「五時でございます。夕食をお並べいたしましょうか」
　自動式の調理機にしかけられた録音テープの声であった。老人が「ああ」とつぶやけば、温かく栄養のある、柔らかい料理がすぐにテーブルの上にあらわれてくる。だが彼は、
「いや、いい」
と、答えた。すると、こんどは天井からべつな声がした。
「部屋のなかが暗すぎます。自動照明装置の配線の故障と思われます。修理の連絡をおとりしましょうか」
「いや、いい。わしが自分でスイッチを切ったのだ。しばらくこの薄暗いなかにいたいのだ」

またべつな声がかわった。
「おぐあいでも悪いのでは。血圧をおはかりしましょう」
自動診断機の声であった。
「いや、いい。静かにしていてくれ」
声たちはみな、なっとくしたように、もうそれ以上は話しかけてこなかった。老人はすわっている電気安楽椅子のボタンを押した。椅子はひとりでに動き、彼を窓ぎわに運んだ。いつもこの時間ごろ、老人はぼんやりと街をながめるのだった。
同じような高いビルが果てしなく並んでいた。むかいのビルの屋上からは、背中に小型プロペラをつけた若い二人が、手を振りあいながら夜の近い空に飛びあがっていった。やがて、青い二つのランプが遠ざかり、大きなホタルたちは去っていった。夜の海のうえを、時のたつのも忘れて散歩しようというのだろうか。
それをながめているうちに、老人は子供のころを思い出した。なんという世の中の進歩だろう。また、自分の息子たちのことも思い出した。だが、その息子たちはみな独立し、妻にも死なれてしまった今では、彼はほんとうに一人だった。
「むかしの老人たちは、どんな余生をすごしていたのだろう」
彼はこうつぶやいた。ある時、彼はこれを調べようと思い、図書館に行ってみたことがあったが、それはむだだった。現在の社会にあわない風俗の記録は、すべて抹消されてあったのだ。
「そんなことはどうでもいい。現在の生活より劣っているにきまっている」

老人は椅子のべつなボタンを押すと、そばの壁からタバコ・セットが伸びてきた。それから一本を引きぬくと、すでに火のついているタバコは、彼の指先きで静かに煙をあげた。現在の生活はなにもかもそろっている。だが、なにもかも空虚な穴でできているようにも思えるのだった。
「うむ。酒が飲みたくなってきたぞ」
しかし、酒を出すためのボタンはどこにもなかった。この部屋ばかりでなく、どこの部屋にも見つけることはできない。
なにもかも手に入るこの時代で、酒だけは禁止されていた。機械があらゆる分野にひろがっている時、酒の酔いによるちょっとした狂いも、大きな事故と損害をひきおこす恐れがあったのだ。理性と機械とが支配する時代。
「働きざかりの者に禁止するのならわかる。しかし、隠居した老人にならかまわないと思うが」
老人は安楽椅子を揺らせながら、不満そうにつぶやいた。だが、老人に限って許すわけにはいかないのだ。そうすると、手のつけようがなく広がり、かつて大きな議論をひきおこしながらも、やっと軌道に乗ってきた禁酒法が、崩れてしまう。
老人はタバコを手から離した。灰皿はそれを受け、ふたたび壁のなかにもどっていった。彼は手の指で乾いたくちびるをそっとなでた。
そして、やがて誘惑を押え切れなくなったように立ちあがった。
「ちょっと出かけてくる」
出かけるという言葉を受け、声がおこった。

「かしこまりました。上着と靴を用意いたしましょう」
壁の一部が割れ、黒っぽいマントがふわりと着せかけられ、床からは靴がでてきた。
「お乗り物はなんになさいます」
「いや、いい。わしは歩きたいのだ」
らせん状のエスカレーターは彼を一階まで運んだ。老人は通りに出たが、そこには人影がなかった。
通りは死の谷だった。ビルの壁の出す銀色の光が鋭い光をみたしていたが、人は一人も歩いていなかった。地下の高速パイプ道路、空中の小型ヘリコプターなどのある時代に、歩く者などはいないのだ。道ばたに子供がひるま遊んだものか、ロケットのオモチャが一つころがっていた。
彼は杖の音を響かせ、二ブロックほど歩き、あたりを見まわしながら、そこのビルの入口をくぐった。この地下にある一室が、彼のいつも訪れる秘密のクラブだった。
杖の先でドアに合図のノックの音をたてると、内側からドアがあけられ、人声が迎えた。
「やあ、いらっしゃい。このところよくお見えになりますね」
と、ここの経営者の、もとは学者だったという中年の男が迎えた。
「ああ、昼間はぼんやりとそとをながめてすごせるが、夜になると、自分までがからっぽになってしまったような気がしてきて、さびしくなる。しばらく前はテレビでまぎらせたが、このごろはそう見たくもない。からっぽをみたせるのは、酒ぐらいしかないのだよ」
「そうでしょうな。それとも、酒の味を覚えてから、からっぽを意識するようになったのでしょ

うか」
と、経営者は答えていたが、いままで飲んでいた客が帰りかけるのを見て、会話を中断してそっちに声をかけた。
「あ、お帰りになるのでしたら、もう二三分待って、すっかり酔いをさましてからにして下さい。酒のにおいなどをそのへんで散らされては、あなたもつかまり、わたしもつかまってしまいます。そうなったら一大事ですよ。薬をお飲みになったのですから、すぐにアルコール分が抜けてゆきます」
この小さなクラブは、ひそかに酒を飲むことのできる店だった。もちろん非合法であり、つかまると厳罰にされるので、ここで飲み、酔うことはできても、酒も酔いも家までは持ち帰れないことになっている。
やがて酔いのさめた客は帰ってゆき、この地下室には老人と主人との二人きりになった。室内には飾りがなく、古風な机と椅子がいくつかあるだけだった。
老人は椅子に腰をおろし、主人が壁の蛇口からついできたグラスの酒を、少しずつ飲みながら言った。
「なあ、ご主人」
「なんでございますか」
「あなたも変った仕事をはじめたものだね。こんな危険な商売などやりそうな人に見えないが」
「はい。わたしは酒を売ってるとは思ってはおりません。乾燥した社会に水をまいているつもりで

す。もちろん秩序を乱してまでもうけるつもりはありません。そのため、若い人や、機械の操作に直接従事している人は店にお迎えいたしません。ですから、良心の苛責（かしゃく）も感じませんよ」

「ところで、前から聞きたかったことがあるのだが……」

「はい。あなたは昔からの会員で、口がかたいお人柄と知っております。きょうはほかにお客もおりません。お聞きになれば、お答えしましょう」

「ありがとう。ふしぎでたまらないのは、どこで酒を造っているのかだよ。取り締りはうるさいし、警察の捜査は水ももらさない」

「ええ、ほかにも酒を飲む所はあったようですが、いまは、まったくなくなったようです」

「だが、ここだけは一度もふみこまれない。それに、いつ来てもよそでは飲めないような上等な酒が、品切れになることなく用意されている」

「警察の捜査は、酒を造る所と運搬に重点が置かれているのです。だから、造る所が全滅し、運搬の調べがうるさくなると、よその店はやってゆけなくなってしまうのです」

「それが、なぜここだけは別なんだね。ふしぎでならないよ」

「そうでしょうね。ここでは蛇口をひねると、いつも酒が出てきます」

主人は壁の蛇口をひねり、流れ出る酒をコップに受けた。快い音がしずくとともにひびいた。主人はそれを老人の前にさし出した。

「なるほど。パイプで運んでいるわけか。それなら見つからないわけだな。だが、地下に配管工事をするのは、とても個人の力ではできないことだ。それに、まだ酒を造る所が残っているとも

思えない。むりにとは言わないが、わしはそのパイプのもう一方のはじが、どこにつながっているか気になってならないよ」

「あなたの口のかたいことは、よく存じています。お教えいたしましょう」

「そうか。ぜひ聞かせてほしい」

主人は少し声を低くして言った。

「過去へですよ」

「えっ、過去だって。まさか」

「はい。ゆうゆうと酒を造れる所など、この社会のどこにも、もはや残っておりません。だからこそ警察も安心しているのです。しかし、やつらもまさか過去とは気づきません」

「そんなことができるとは、わしは考えてもみなかったことだ」

老人は手のグラスをしげしげと見つめ、首をかしげた。

「わたしがかつて学者だったことは、知っておいででしょう。わたしは当時、時間についての研究をしていました。そして、一つの理論をくみ立てたのです。昔は空想にすぎなかった過去へ行くということが、じつは可能であるのです。しかし、変った理論というものは、いつの世でも排斥されるものです。それとも、こんな研究は現代のためにならないと判定されたのかもしれません。その地位をやめさせられてしまいました」

「なるほど」

「しかし、わたしはその理論が、かわいくてならない。また、現代に反逆してみたくもあって、

その理論にもとづいて一つの装置を完成しました。タイムマシンです」
「本当にできる物だったのかね」
「事実、完成したのです。わたしはそれに乗り、何度か遠い過去に行き、ひとり楽しみました」
「わしも行ってみたくなったよ」
「それだけは困ります。へたなことをして過去を変えてしまってはいけないのです。わたしなら、どんなことはしてもいい、どんなことはしてはいけない、の区別がつきますが、ほかの人にはそれができないのです。たとえば、不用意に落した電子メモが過去の人の手に渡ってごらんなさい。いまでこそ、だれもが記憶用に使っている電子メモですが、昔はそんな物などなかった。過去でそれが普及してしまったら、歴史が大きく変ってしまうでしょう。あなたもわたしも、そのとたんに消えてしまうかもしれません」
「わしにはよくわからんが、そういうことも起こるかもしれないな」
老人はうなずきながら、グラスを傾けた。
「わたしは遠い昔に行き、自動的に酒を造る装置を置きました。この場所も、そのころは山奥です。濃い緑と、新鮮な空気のなかで、静かに造られている酒なのです。そこから時間のなかを通じるパイプで送られてくるのです。この酒がよその合成の酒とちがうことはおわかりでしょう。ほんとうはそれをお話しして、みなさんに味わっていただきたいのですが、そうもいきません。残念です」
「いや、聞かせてくれてありがとう。わしの心のからっぽをみたしてくれるのも、そのせいかも

しれない」
老人はもう一杯をたのみ、グラスの液体のなかに、過去の幻でも見つけだそうとするかのように、じっとのぞきこんだ。そして、目をつぶってにおいをかぎ、口に入れた。舌のうえでなでているようなようすだった。
「お気に召しましたか」
「ああ。だが、いま思いついたことだがね、その装置を昔の人がみつけたらどうなんだね。やはり過去が変り、歴史が変ってしまうではないか。その心配はないのかね」
「もちろん、それは考えました。だからわたしはその場所で数年ぶんタイムマシンを動かし、そのあいだはだれも近よらないことを確かめて、装置を置いたのです」
「それなら大丈夫なわけか。ああ、もう一杯くれないか」
老人はいつになくグラスを重ねた。主人はグラスを蛇口の下に持ってゆく。時間を越えてパイプで運ばれてくる酒は音を立てて流れでていたが、そのうち主人が声をあげた。
「おや、これはどうしたというのだ」
液体の流れがふいに止まってしまったのだ。彼は手をかけて蛇口をゆすってみた。だが、しずくが二三滴たれただけだった。それを見つめているうちに、主人はまっさおになった。
「どうしたんだね。原料がつきたのとちがうかね」
と老人が聞いたが、主人はあわてた声で答えた。
「原料はまだ充分あるはずです。これは途中でパイプがこわれたにちがいない。ほってはおけま

せん。わたしはすぐ直しに行かなくてはなりません。待っていて下さい」

主人は入口のドアの内側に鍵をかけ、留守中に入ってくる者がないようにした。老人はすがりつくように頼んだ。

「なあ、わしも連れてってくれ。ちょっとでいいから過去をのぞきたいのだ。きみがいっしょなら大丈夫だろう。わしは現在の生活に満足感を持ちたいから、過去の哀れな生活を見たいのだよ」

その熱心さに、主人はついに負けた。

「まあ、いいでしょう。しかし、これ一回きりですよ。さあ、急ぎましょう」

主人は老人をうながし、となりの部屋に入った。そこには丸い銀色の装置があった。主人はその扉をあけ、二人はそれに乗った。

「これがタイムマシンなのか」

「ええ、説明はあとにしましょう。急がないと過去が大きく変りはじめるし、わたしも大損害です」

かすかな機械のうなり声が内部にみちた。主人はメーターのようなものの動きを注意ぶかく見つめていたが、ふいに装置を停止させた。機械の音も同時にやんだ。

「このへんのようです。この時代でパイプにひびが入り、もれているようです。さあ、出て修理しましょう」

主人は先にたっており、地面にかがみこんで、せわしげに複雑な道具を動かしはじめた。しか

し、老人は目の前に展開する過去の光景のほうに見とれた。

聞いたこともない音が耳をついた。だが、まもなく、それがセミの鳴声であることを知った。季節は夏。緑の葉をいっぱいにつけた林。そのあいだを白いチョウがひらひらと舞っていた。草いきれ。水の流れる音。

そばを小さな川が流れ、その遠くにはワラで屋根を作った家があった。よごれたような家。その時、老人は人影をみつけ、主人に注意した。

「人がいるようだよ」

「なにをしています」

「ふしぎそうな顔をして、川の水をくんでいる」

「えっ、それはいかん。へんに好奇心を持って、その原因を探究しはじめたら困ったことになる。パイプの修理は終ったが、とんだことになった。どうなるかあとをつけてみよう」

二人はあとをつけた。酒をくんだのは身なりのみすぼらしい若者だった。二人はそれを奪いかえすわけにもいかず、見えがくれについて行くほかになかった。若者はやがてワラぶきの家に入った。

どうなることかと物かげにひそんでいる二人に、話しあう声が聞こえてきた。

「お父さん。ほら、お酒だよ」

「しかし、そんな金はないはずだ。どこで手に入れたのだね」

「なんとかして、お父さんの好きなお酒を手に入れたい、と考えながら歩いていると、いいにお

いがしてきた。そこで滝のそばの水をくんでみると、お酒なんだ。さあ、とてもいい味だよ」
そっとのぞいてみると、くまれた酒はすべて飲まれてしまったようだった。二人はそれを見とどけ、タイムマシンにもどった。
「まあ、あれぐらいなら大丈夫だろう。問題の酒はすべて飲まれ、残っていない。それに、川を調べても、もはや酒は流れていない。たいしたこともなく済んで、なによりだった。さあ、戻りますよ」
主人は装置を動かし、時間のなかを未来にむかった。
ふたたび地下室に戻った二人は、ほっとした表情で、蛇口から流れはじめた酒を飲みはじめた。
「まったくあわててしまいましたよ。ああ、のどがかわいた」
と主人が言ったが、老人は考えこんだ顔つきになっていった。過去の美しい自然が眼に焼きついている。それに、あの親子たち。この酒はあの親子の飲んだのと同じなのだ。いまごろは二人でなにを話しあっているのだろう。
老人はぼんやりとグラスに目をやり、少しずつ飲んだ。そしてつぶやくように、
「楽しそうだったな」
「ええ。喜んでいたようです。わたしの造った酒ですから、あのころの連中にとっては神の酒のように思えたでしょうよ」
「しかし、あの事故は歴史に残ったのではないだろうか。わしはあす、図書館へ行って調べてみ

たくなったよ。珍しい現象ではないか」
「おやめなさい。へんに怪しまれてはつまりません。それに調べてもむだですよ。歴史の記録のなかから、むかしの風習や道徳、酒などに関するものは全部けずり去られているではありませんか」
「ああ、そうだったな。では、わしはそろそろ帰るとしよう」
老人は出された酔いをさます薬を飲んだ。酔いはさめていったが、頭に残った光景は消えなかった。これから、夜に目がさめた時には、いつも思い出してしまうことだろう。
酔いはすっかりさめた。老人はあけてもらったドアから外へ出た。そして、水の流れていないビルの谷間をひとりで歩き、機械と装置の林のなか、テープの鳴き声の待つ部屋に帰った。

囚人

青空が大地をやさしく抱きかかえているような朝。空のところどころには、白い雲がぬぐい残されたように浮いていたが、初夏の日光はすがすがしい空気のなかを、休むことなくふりそそいでいた。

ここは刑務所の屋上。高い塀(へい)のそとには山塊のようなビルの群がみえ、そのうえをモノレール・カーの軌条(きじょう)が網の目のようにおおっていた。それを伝って車両の走るのが、かすかな響きをともなって見えた。

機関銃をかかえた体格のいい看守は、この刑務所のただ一人の囚人にむかって声をかけた。

「おい。きのうから熱心に本を読んでいるじゃないか」

寝椅子のうえにパンツ一枚になって横たわり、本を読みつづけていた囚人は、ページから目をはなして答えた。

「ああ。本でも読まないことには、退屈で、どうしようもないじゃないか」

「なんの本なんだ」

「脱獄をあつかった犯罪小説だよ」

「面白いか」

「まあ、面白いと言えるだろうな。いまのわが身にひきくらべて見ると、なんとも言えない妙な気分になってくるぜ」

「どうだ。やってみたくならないか」

「ああ。できるものならやってみたい。だが、そのためには、小説に書かれているころの刑務所と、すべて同じ条件にしてもらわなければならないぜ。第一、独房の錠が内側にとりつけてあり、その鍵(かぎ)をおれが持っているなんて、むかしの人、いや、このあいだまでの人にとっては笑い話だったろうな」

「そうすれば脱獄する意欲がでてくるのか」

「それだけではない。おれが、なにか罪を犯してここにいるのでなくてはな。夜になると、いつも考える。以前にここに入れられていたやつらは、どんなに外に出たがっていたかと。そして、おれもそんな気になってみたくなる。だが、だめだな」

「それはそうだろう。建物や部屋の錠を全部そと側につけなおすことは、出来るものではない。また、おまえに犯罪者の名をつけることもできない。けっきょく脱獄は不可能ということになるな」

「まったく変なことになったものだ。犯罪者でもないおれが、刑務所のなかにいる。そして、きみたちは脱獄の邪魔をしないばかりか、内心ではしてくれるよう祈っている。しかし、おれは出ていかない。なれてはきたものの、時たま考えるとおかしくなってくる」

囚人はこう言ったが、看守は答えなかった。囚人はさっきの小説のつづきを読みはじめた。

時間が流れ、太陽は真上ちかくにその位置を移した。

どこからともなく、人の呼びあう声がこの刑務所に近づいてきた。

「おい。いつものように、またやってきたぜ」

と、看守は緊張をとりもどした声で言い、囚人はページを折って本を閉じた。

「あ、もうそんな時間か。また、いやな日課がはじまるのだな。だが、やつらの叫び声も、このごろは少し弱々しくなったような気がする」

塀のそとの声は弱々しかったが、それにはうらめしそうな思いがこもっていた。ばらばらの叫び声は、しだいに一つの言葉に統一され、合唱のようになって、高い塀を越えて流れこんできた。

「囚人を渡せ。囚人を渡せ」

そして、人数がふえてきたのか、その叫びは大きくなっていった。それを聞きながら、囚人は看守に話しかけた。

「このあいだ読んだ西部小説に、これとそっくりの場面があったぜ。人びとが、犯人を引き渡せ、と保安官に迫るのだ。そのころは本当にあったことらしい」

「おれも、映画で見たことがある。同じような光景だ。だが、ただ一つ、ちがう。リンチは悪への復讐だが、きみは少しも悪ではない。ただ一つといっても、これは大きなちがいだ」

塀のそとの群衆は、ついに全部をとりかこんだらしく「渡せ、渡せ」の声はどの方角からも押し寄せてきた。

サイレンが鳴りひびき、刑務所の看守たちは配置についた。ところどころにある塔のうえにのぼり、機関銃を手にして万一に備えた。やがて、高い塀を越えて、小石がばらばらと投げこまれてきた。そのうちの一つは建物の窓ガラスに当り、こなごなに砕いた。

「きょうは少し手ごわいようだな」

「ああ、やつらは、日ましに絶望的になってくる。考えればむりもないがね」

囚人と看守はこう話しあい、塀の上に目をやった。そこには、外側からよじのぼってきた、何人かの頭が見えた。塔の上の拡声器はそれにむかって、警告の言葉をいかめしい声で告げた。

「みなさん。もどって下さい。塀を越えてはいけません。警告します。もし、塀を越える者があ

ると、ただちに射殺されます」

看守たちの機関銃の照準は、塀にむけてつけられていたものの、まだ引金はひかれなかった。塀のうえの人影の動きには、一瞬ためらいの感じがあった。だが、外側からの応援の声も高まっていた。

「囚人を奪え。われわれの熱意を示してやるのだ」

それに応じ、塀の内側に飛び下りる者がではじめた。だが、侵入者たちは数歩とは歩けなかった。そのたびに機関銃はいっせいに轟音(ごうおん)を吐き、そのいずれもやせおとろえたからだを死体に変えた。

囚人は、そばの看守が二人ばかり倒したのを見て、銃声の絶えまに話しかけた。

「うまく命中したな。きみは引金をひく時に、どんな気持ちがする。やつらだって、べつに悪人ではない。その筒先をおれのほうに向けたくはならないかい」

「もちろん、いつも、そうは考えている。だが、心のなかに、それを許さないものがある。良心というやつだろうか。それとも、秩序をまもる義務感だろうか。おれにはわからん。だが、塀を乗りこえたやつらを射つことには、そうためらいは感じない。妙なものだ」

「塀を越えたとたんに悪人になるのか」

「そういうことになるだろうな。やつらは警告を無視した。たいした悪とも思えないが、きみにくらべれば悪だ。きみはなにひとつ、悪と呼べることをやっていないからな。時どき、きみがなんでもいいから悪をやってくれないかと思うよ。おれの機関銃を奪っておれを傷つけるとか、い

っそ殺すとかね。あの群衆のなかには、おれの友人や親類もまざっているだろう。そして、いまにも彼らが塀を越えてくるかも知れないんだぜ」

会話がしばらくとぎれ、しばらく銃声がそれにかわった。塀のそとの叫び。銃声。

囚人はしばらくそれに耳を傾けていたが、やがて、考え抜いたような調子で言った。

「おれだって何度もそう考えた。つまり、自殺をすべきではないのかとね。おれが自殺さえすれば、なにもかもうまくゆく。それはよくわかっている。だが、どうしてもそれができないんだ。いざとなると、命というものは惜しいものだぜ」

「当り前だ。きみだって、そとのやつらだってその点は同じことさ」

「とても自分では思い切れるものでない。きみがふいに気が変って、銃をこっちに向けないかと待っている。そうなれば、いやおうなしに死ねるからな。ちょっとやってみないか」

「できないね。きみがさきに反抗でもしてくれない限りは。法律と職務に従うのが、おれのつとめだ。いや、従うようにいつのまにか出来あがってしまった、と言ったほうがいいだろう」

「法律を改正する動きはないのかい。法律ができ、おれが死刑になるのなら、これも、いやおうなしだ」

「その動きはある。だが、成立は、むりだろうな。内心では望んでいても、それを主張する者がいないのだ。いかに公衆の利益のためとはいえ、罪のない人間を殺すことが許されないぐらい、だれでも知っている。塀のそとのような群衆としてなら言えても、責任ある立場の者には口が裂けても言えないことだ」

「そうかな。公衆のためなら、罪のない人間の一人や二人殺したって、べつにかまわないと思うがな」

「そうはいかん。罪がなくても、きみが、悪質の伝染病にかかっていて、存在自体が危険という状態なら、あるいは殺す法律も通るかもしれない。しかし、きみは健康そのものだ。健康すぎる人間だ」

「おれを人間と考えるから、そうなんだ。だが、おれを犬かモルモットのように、べつな動物と考えたらどうなんだ。それなら、死刑にしようが、どうしようが、かまわないだろう。おれは何度も自殺しようとした。だが、自分では死ねないんだ。殺してくれないことには」

「なるほど、いまは、モルモットとも呼べるかもしれない。だが、すぐにそう呼べなくなる」

「ああ、なんということになったのだろう。おれは、あの時、あの事故で死んでしまえばよかったのだ……」

囚人は言葉を止め、目をつぶり、その当時のことを回想しはじめた。真上を過ぎた太陽は、日ざしを強め、彼の少しみどり色がかった皮膚を照らしつづけた。

その突然の事故は、しばらく前に電波研究所でおこったのだった。

平和がつづき、人口の増加が予想を上まわる速度だったので、全世界は食料の不足を訴えていた。人びとは飢え、合成食料の研究が最大の課題となり、その成功が待たれていた。多くの研究所はその専門に応じて、あらゆる方面から手をつけていたのだ。

囚人となる前の彼は、電波研究所の技師の一人として努力していた。各種の溶液の化学反応を促進させるため、いろいろの波長の電波を照射するのが研究題目だった。成功すれば、溶液は連鎖反応をおこして化合し、短時間のうちに食料と呼べる物質に変る。

だが、なかなか成功の日は訪れず、反対にのろうべき事故の日が訪れてきた。

配電盤の故障によって、不意に流れた強力な電流は電波と変った。そして、その電波は溶液に対してでなく、彼のからだに照射されたのだ。

それ以来、彼のからだに変調がおこった。飛び散った装置の部品の下から助け出され、気がついてみると、皮膚がみどり色がかった色にかわり、また食欲がまったくなくなっていた。

しかし、食欲がなくなり、食事もとらなくなったにもかかわらず、彼の体力がおとろえることはなかった。鉱物質の溶けた水を飲むことと、日光に当るだけで、体力が維持される体質に変っていたのだ。

「成功だ」

「偶然とはいえ、この結果を得られたことは喜ばしい」

関係者はこう語りあい、この現象を再現させるべく研究をつづけた。しかし、偶然をもう一度再現させることはできなかった。どの波長を、どのくらいの強さで、どう照射したらいいのか、少しも見当がつかなかった。それは、偶然のおこる前と同じことだった。

多くの人が進んでその試験台にあがった。こんどこそ再現できるだろうと。しかし、その期待は、そのたびごとにゼロか死でむくいられた。効果がまったくないか、電波が強すぎて死んでし

まうのだ。

もちろん、彼のからだも厳重に検査された。だが、ふつうの診察方法では、その葉緑体類似の物質が、体内のどこで分泌されるようになったのかは分らなかった。

生理学、医学の関係者は、そろってこのような報告をした。

「わかりません。このうえは、徹底的に解剖し、すべてをばらばらにして調べない限り、どこに問題があるかの発見はできないでしょう。それが許されれば必ず……」

機関銃の轟音が高まり、コンクリートの塀に弾丸のはねかえる音がした。

彼はそのニュースが新聞社に伝わる寸前に、警官隊にまもられ、この刑務所に収容された。それ以来、ここにいたほかの囚人はよそに移され、彼はここのただ一人の囚人となったのだ。

そばの看守は、また勢いよく銃を鳴らした。囚人はそれに話しかけた。

「おい、やめろよ。やつらの侵入にまかせてみよう。おれは、自分では死ねないが、やつらに殺されるのなら死ねるだろう。人間でないおれのために、きみたちと外のやつら、人間どうしが戦っているのだ。さっきも言ったように、おれは人間ではなくなっているんだ」

看守は引金をひくのをしばらくやめ、それに答えた。

「きみはそう言うがね、だが、きみを殺し、解剖し、すべてが判明したらどうなる。みながみどり色がかった皮膚を持つ人間になった時を考えてみろ。やはり同じ人間になってしまう。自分たちのために、自分と同じ罪のない人間を殺したことになるじゃないか」

「それではいかんのかね」

「いかんだろうな。それからの社会をなんで維持してゆけばいいんだ。法律かい。だが、罪のない人間を殺すことによってできた新しい社会で、どんな法を作り、守らせようと言うんだね。目的さえあれば無実の人間を殺してもいいという道徳や法律に、従わせるわけにはゆくまい。そうなったら、すべてがめちゃくちゃだろう」

また銃声がおこり、塀の下にはやせた死体の数がふえていった。

「原罪とかいう言葉があったな」

と囚人が言ったが、看守はその言葉を知らないのか、轟音で聞きちがえたのか、ずれた返事をした。

「現在か。あるいは、未来の社会はそんなことで、けっこううまく行くものかもしれない。だが、おれには現在のことしかわからんのだ。過去を基準にして現在の行動をやる以外にない。この看守はみなそうだろう。わけのわからん未来のため、現在の行動を変える決心がつかないんだ」

空に爆音が聞こえ、ヘリコプターが高度を下げてきた。そして、小さなパラシュートをつけた包みを投げ、一段と高まった群衆の叫びから逃げるように、空高くもどっていった。

「なんだあれは」

「おそらく弾薬だろう。食料の補給なら、昼間はやらないからな」

その言葉で囚人は話題を移した。

「食料か。なつかしい言葉だが、おれにとっては忘れかけた言葉だ。空腹とか、味わいとか、満腹とかいう気分の話でもしてくれないか。それを知ってたころがなつかしくてならない」
「いや、その話だけはしないでくれ。おれのただ一つのやましさだ。そとの人びとは飢えに苦しんでいるのに、看守だけは充分な食料が与えられている」
「食料に縁のないのは、そとの連中とおれということになるな」
「そとの連中のことを考えると、食事をするのが罪悪に思えてくる。食料を送ってくれなければいいのにと思う。だが、看守たちに変な気をおこさせまいと、法と秩序と正義をまもるため、充分すぎる食料が送られてくるのだ。食わなければいいんだろうが、腹がへり、前に食料があると、どうにもならない。情ない話だが、それを押える力は人間にそなわっていないらしい」
「情ないのはおたがいのことだ。おれに自殺ができないのと同じだろう。生命への執着、食欲。つまらないものが人間にはとりついていやがるな」
囚人と看守は顔を見あわせ、自嘲めいた笑いを示しあった。
塀のそとのさわぎは、少しずつ静かになっていった。囚人はそれに気づき言った。
「ああ、さっきのヘリコプターを見て、弾薬が補給されたことを知り、きょうの侵入をあきらめたのだろう」
「やつらは帰ってゆくようだな」
「だが、これで終りではないからな」
「ああ、あしたになるとまた、集り、押しよせ、何人かは塀を乗り越えることを試みるだろう」

銃声は止み、そとの叫びは遠ざかっていった。西の空では傾きかけた太陽に、薄い雲がかかりはじめた。看守は放心したようにそれをながめていたが、やがて言った。
「日がかげりはじめた。きみもそろそろ部屋に戻ってもいいだろう」
「ああ」
と囚人はガウンを羽織り、読みかけの本を抱えて立ち上った。
「あ、忘れ物があるぜ。独房の鍵を忘れている」
「きみが持っててくれ。おれが持ってても、どうせかけはしないんだ。できたら、今夜おれが眠っているあいだに忍びこんで、おれの首でもしめてくれ」
「しようがないやつだな。できるくらいなら、とうのむかしにやっているよ」
看守は鍵を拾い、囚人のガウンのポケットに押しこんだ。
いつもと変らぬ一日が終り、夜のけはいが静かにひろがりはじめてきた。

白昼の襲撃

ジェット・カーが軽いうなりを残して、滑るように地平線に去っていった。それを見送りながら、エル氏はつぶやいた。

「さて、ひと休みするかな……」

いつも午後のこの時間になると、しばらくの間お客がとだえてしまう。店にもどった彼は、なにげなく窓ごしに外を見た。熱気をおびたアリゾナの太陽のもとに、乾ききった砂漠がひろがり、少しはなれてごつごつした岩山がつづいている。それはここ十年あまり、見なれ、見あきた風景だった。

エル氏は砂漠を横ぎるハイウェイのそばで、小さなガソリン・スタンドを経営していた。もっとも、そのほかに酒もいくらかそろえ簡単な食事もできるような店がまえに作ってあり、通りすぎる自動車、ジェット・カーの大部分はここで一休みしていってくれるので、確実な、のんきな商売だった。

しかし、エル氏はいつも見なれたその風景のなかに、さっきからいつもとちがった雰囲気があふれているような気がしてならなかった。風景ばかりでなく、この店のなかにも説明しにくい、つまり今まで感じたことのないなにかがみちている。エル氏は病気にでもなったのかと思った。

だが、そのなにかは彼の体内ではなく、体のそとにたちこめているようだった。エル氏はそれを追い払うため、店の片すみにあるステレオ・ジュークボックスでも鳴らしてみようかと考えた。だが、自分の金を投げこんでまで試みるほどのことではないと思いなおし、そばのテレビのスイッチを入れることでそれにかえた。

画面のニュースは、ロサンジェルスに発生した催眠ガス強盗団といった、あまり変りばえのしない事件を報道していた。チャンネルを切りかえるにつれ、化粧品会社のコマーシャル、けだるい女性歌手の歌など、いつものような映像がつぎつぎとあらわれた。だが、相変らず彼のまわりにただよう、異様な雰囲気はつづいていた。

「温度のせいだろう。きょうは暑さが特にひどい。だが、そのうち自動車が停り、お客が入ってきてくれる。そこで冗談でも言いあえば、気も晴れるだろう」

エル氏はこう期待して、窓からハイウェイを見渡したが、赤っぽい砂漠の上に白く伸びている道に、車の影は見あたらなかった。

そして、なにげなく岩山のほうに目を移した時、エル氏は見なれない物を見つけ、首を振った。煙。それは断続して立ちのぼる煙のようにも見えた。ちょうどわきあがる雲のようでもあったが、この地方にあんな雲がでるはずはなかった。

しかし、見なれないといっても、エル氏は前にこれと同じものを限りなく見ていた。ただし、映画やテレビのなかにであった。西部劇のインディアンがあげる、のろしなのだ。しかし、この現代にそんなことはありえない。彼はしばらく考えたあげく、気象学者の一行でもいて、気流を

調べているのにちがいないと結論した。そういえば、この地方に人工雨を降らせる実験についての、ニュースを聞いたことがあったような気がしてきた。まったく、たまには雨でも降ってくれないことにはたまったものでない。

その時、エル氏を呼ぶ声がした。

「おい、ビールを一杯飲ましてくれよ」

エル氏はふりむいて、その青年に答えた。

「やあ、いらっしゃい。話し相手が欲しかったところだ。ところで、先生は相変らずかい」

エル氏の店からほど遠くないところにエフ博士が研究所を持ち、この青年はそこで働く助手であった。もっとも、研究所といっても小さなもので、助手もこの青年ひとりだった。

「ああ、このところずっと研究室に閉じこもりきりだ。先生はそれが好きなんだからいいが、こっちはかなわないぜ。娯楽といえばこの店に来てビールを飲むことぐらいだ」

青年はコップを乾し、立ちあがってジュークボックスに貨幣を入れた。左右の壁と天井から、立体音響のにぎやかな音楽が降りそそいできた。エル氏は青年に聞いてみた。

「いったい、先生はなにを作っているんだね」

「宇宙ボートとか言っているがね。なにしろ、すべて秘密だ。こっちは命ぜられる通りにコイルを巻き、ネジをまわす。もっとも、こっちは機械にくわしいわけではないから、設計図を見せられてもわかりっこはない。博士も、ぼくのそこが気にいったらしい。へんな話だがね」

「だが、あんたもよくこんな退屈なところで辛抱できるね」

「まあ仕方ない。報酬がいいし、それにまもなく完成だそうだ。また、完成したら第一に乗せてもらおうと思っているわけだ。新発明のものに第一に同乗でき、科学の歴史に名が残るというのは、ちょっとした魅力じゃないか」

「それはそうだが、乗せてくれるのかい」

「大丈夫だろう。ちょっと細工をしておいたから、博士だけでは行けないよ」

エル氏は青年と話しつづけたが、さっきからのあの異様な感じは消えなかった。ひとつ、青年に聞いてみるかな。そう思った時、店のそとに目を疑うようなものを見いだし、それを先にたしかめることにした。

「おい。ちょっとあれを見てくれ。なんに見える」

ふりむいた青年は答えた。

「馬にまたがり、拳銃を腰にした、薄よごれた中年の男に見えるが、ちがうかい」

「その通りだ。だが、いまごろあんなかっこうをしているなんて変じゃないか」

「それは変だが、世の中には酔狂なやつがいるものさ。ジェット・カーが走りまわると、馬でゆっくり歩きたくなるあまのじゃくだって出るだろうよ。それとも、映画のロケかもしれない」

青年は事もなげに言って、ふたたびビールを飲んだ。エル氏はうなずいた。ロケならつじつまがあう。さっきは驚いた岩山ののろしも、映画にとり、テレビを通じればなんということなく見すごしてしまうものなのだ。

安心したエル氏は、馬から下り店に入ってきた男に声をかけた。汗くさいにおいが鼻に迫って

きた。

「いらっしゃいませ」

しかし、よごれた服のその男は、あたりを見まわしながらこう答えた。

「へんな建物をおったてたものだな。おれはこんなの、はじめて見るぜ」

「そうですかね。このハイウェイの道ばたには、同じような店がいくつかあるはずですがね」

「まあいいさ。ウイスキーさえあれば。さあ、早いとこ、ついでくれ」

エル氏はグラスにつぎ、男はそれをあけた。青年はさっき鳴りやんだジュークボックスに金を追加するより、この男に話しかけるほうにより多くの興味を抱いた。

「ぼくはこの近くにいるエフ博士の助手をしている者です。あなたはどこの映画会社なのですか。失礼ですがあまり拝見しないかたですね」

男はウイスキーをさらにあけ、首をふった。

「映画だと……」

「あ、それではテレビのほうですか」

「おい、若いの。さっきから、なにをわけのわからないことを言っているんだ。テレビだなんだと、変な言葉を使いやがって。おれがしばらく山を歩いていたからといって、ばかにするな」

「だけど、テレビの話をして、どうしていけないんです。どこにだってある物でしょう」

と青年が指さしたテレビにむけ、男はやにわに拳銃をひき抜き、ぶっぱなした。ブラウン管のガラスはこなごなにとび散った。あまりのことに、エル氏はきもをつぶした。

「お客さん。拳銃なんかぶっぱなされては困りますよ。それにあれはワイド画面テレビで、高いんです。弁償していただきますよ」

だが、男はあやまりもしなかった。拳銃をふりまわしながら、

「なんだ、あんなガラスの箱なんか、けちけちするな」

「いいかげんにして下さい。ハイウェイ・パトロールに連絡しますよ」

エル氏は電話機に手を伸ばしたが、それに届く先に電話機も弾丸で砕かれた。エル氏と青年は恐怖の目を見あわせた。この男は狂人ではないのだろうか。だが、男は拳銃をおさめ、笑い声をあげた。

「まあ、そんな顔をするな。ガラスや黒い箱ぐらい弁償してやるさ。なにしろ、おれはやっと金鉱を見つけたんだ。さんざん山を歩きまわったあげく、やっとすごい金鉱をみつけたのだ。どうだ」

こう言いながら、腰の袋をはずし、鉱石をカウンターの上にあけた。それは金色の粉を含んで、きらきらと輝いていた。

「お客さん。これをどこで見つけたんです」

「おっと、それを言うわけにはいかんな」

エル氏は岩山の上であがった煙が、この男と関係があるように思えてきた。鉱脈の調査のため、火でもたいたのだろう。ロケの人と感ちがいをしたため、どうも話があわなかったのだ。

「なるほど、鉱物の調査のかたでしたか。だが、そんな服装でとは、また凝った趣味ですね」

「なんだと。おれの服のどこがおかしい。よごれてはいるが、おかしくはないはずだ。おまえらのほうがよっぽど変だぜ」

男の口調は、冗談ではなかった。エル氏は話題を変えたほうがよさそうだと、ウイスキーをつぎ足しながら、こう言ってみた。

「まあ、気にさわったら、かんべんして下さい。ところで、あの煙はあなたがおあげなさったのですか」

「煙だと。そんなものは知らん。どこだ」

男の顔色は少し変った。エル氏は窓の外を指さした。

「ほら、あの岩の上ですよ。わたしはお客さんの仲間かと思いましたが」

「いかん。みつかったらしい。じつはあそこはアパッチの領分なんだ。おれはそっとしのびこみ、やっと金鉱をみつけたのだが、まさか、こう早くばれるとは思わなかった。こうしてはいられないぞ」

エル氏はキツネにつままれたような気持ちだった。

「まあ、落ちついて静かにして下さい。アパッチなどがくるはずはありませんよ。お客さんはこの暑いなかを通ってきたので、少し頭が疲れたのでしょう。少し休みなさい」

だが、男は耳をかさなかった。

「なにをのんきなことを言う。やつらに襲われたら、ひどい目にあうぞ。戦うか、逃げるかだ。だが、三人ではとてもみこみはない。おまえたちを巻きぞえにして悪いが、早く逃げたほうがい

いぜ」

「ばかばかしい。いま鎮静剤をあげますから、それを飲んでからにしたらどうです」

「頭のおかしいのは、おまえたちのほうだ。殺されたければ、勝手にするがいい。しかし、おれはごめんだ。せっかく金鉱をみつけたのに、殺されてはたまらない」

男は勢いよく店から飛び出していった。青年はやっとエル氏に口をきいた。

「やつはなんでしょうね。やはり、少しおかしい人でしょうか」

「ああ、そうとしか思えない」

すると、男は馬の鞍から銃を外し、かけもどってきた。

「とても逃げられぬ。もうあんなに近づいてきた。ここにたてこもって戦うほうがいい」

「お客さん、しっかりして下さいよ。そんな骨董品の銃を持ち出して遊ぶなんて、いい年をしておかしいじゃありませんか」

エル氏はこう言いながらも、窓の外に顔をむけないではいられなくなった。ふいに何頭かの馬の足音と、かん高い奇声が遠くから聞こえてきたのだ。そして、何回まばたきをしても、その弓をふりまわしながら近よってくるのは、インディアンにちがいなかった。エル氏はなにがなにやらわからなかったが、男が銃の先でガラスを割り、轟然と発砲し、インディアンの一人が馬からころげ落ちるのを見て、万一の用意にとカウンターの下にかくしておいた拳銃を手にした。

「ぼくは研究所へもどって、ハイウエイ・パトロールに電話しましょう」

青年はそう言ったものの、それが実行不可能なことを知り、床に伏せた。インディアンの何本

かの矢が窓ガラスを割り、あたりに音をたててつきささりはじめたのだ。
「おい、ぼやぼやしていないで、おまえもうったらどうなんだ」
男は銃でねらいながら、エル氏にどなり、エル氏は仕方なく、物かげから拳銃を発射した。だが、本気になれないせいか、拳銃のため届かないせいか、腕が下手なせいか、エル氏によっては一人のアパッチも倒れなかった。
一方、男は必死にうちつづけ、アパッチたちはいちおう引きさがっていった。
「帰っていきましたよ。しかし、これはいったい、どういうわけなのです……」
エル氏は言いかけたが、すぐにやめた。男が胸に矢を受け血を流し、床の上に倒れて苦しんでいたのだ。
「やられた。もうおれはだめだ」
「しっかりしなさい。だが、医者を呼ぼうにも、電話がこわれていては」
「まだ電話だなど、わけのわからんことを言う。まあいい、これもなにかの縁だ。せっかく長い間かかってさがしあてた金鉱だが、死んでしまうからには用がない。おまえさんに場所を教えてやるぜ。もっとも、アパッチのやつらはまもなく戻ってきて、この家に襲いかかるだろうから、おまえさんたちも助かるまいがね……」
男は苦しげに口を利き、エル氏の耳にとぎれとぎれに話し終ると、がっくり首をたれた。
「死んだ」
「とにかく、警察にだけは、報告しなくてはならないでしょうね」

だが、エル氏も青年もいつまでも顔を見合せてはいられなかった。またしても馬の足音と奇声。のぞいてみるとアパッチが数をまして近づいてきたのだ。しかし、アパッチもすぐには襲いかかってこなかった。店を遠まきにして、馬でかけまわり、火矢を射かけてきた。
「とんでもないことをはじめやがった」
エル氏は思いきって窓からのぞき、呼びかけてみた。
「おい、これはいったいなんのまねだ。殺人をした上、放火まですると、どんな重い罪になるか知ってるのか」
だが、その言葉は相手には通じなかったし、インディアンたちのかん高い叫びの意味をエル氏が理解することもできなかった。理解できたことは、火矢の落下点がしだいに正確になってきたことだった。そのうち窓を破って、その一本が店にとびこんできた。青年は床をはいながら、やっとそれをもみ消した。
エル氏は、このままでは恐るべきことになるのに気がついた。いずれ矢の火でガソリンに引火するだろう。そうなったら手のつけようがないのだ。
まもなくその不安な予感が的中した。一本の矢が店先につんであったオイルの缶につきささり、火は勢いよく燃えあがった。その炎は店のなかに流れ、あたりをくさい熱い空気でみたしはじめた。
「どうなるんです。焼け死にますよ」
と、青年はせき込みながら叫んだ。もちろん、エル氏にだってわからない。

「わけがわからん。おれもこの現代に、アパッチに襲撃されて死ぬことになるとは、考えたこともなかったぜ」

たちこめる煙のむこうでは、勢いこんだアパッチの叫び声が、ますます近づいてきた。飛び出せばやつらの矢に当るか、おので頭を割られるかだ。しかし、このままでは焼け死んでしまう。二人はためらっているうち、息苦しさはますますはげしくなり、ついに気を失った。

エル氏と青年は床の上に横になったまま目をぱちぱちさせて、顔をみつめあった。

「助かったようですね」

立ちあがってあたりを見まわしてみたが、さっきまでのさわぎの跡を示すものは、なにひとつ残っていなかった。煙もなく、オイルの缶もなんともなかった。テレビのブラウン管にはひび一つなく、電話機もいつもと同じく、カウンターのはじにあった。エル氏はそれを使った。

「ハイウエイ・パトロールを」

「こちらハイウエイ・パトロール。事件はなんです」

「じつはアパッチの大群におそわれ……」

「なにをねぼけているんです。当局をからかうと罰せられますから、注意して下さい」

電話は切られた。エル氏はつぶやく。

「ねぼけないでくれとさ。やはり夢だったのかな」

「夢なんかじゃありませんよ。ぼくだってたしかに見たのですから。さっきの男の汗のにおい。

アパッチの叫び。火矢。みなはっきりしています。夢だったら、熱まではともなわないでしょう」

二人はウイスキーを飲み、いまの現象をおたがいにたしかめあった。だが、それ以上、なんの結論も得られなかった。

その時。

「おい、わしの助手はここに来とるだろう。とんでもないことをしてくれた」

と、顔色を変えた老人が店に入ってきた。研究所のエフ博士であった。

「あ、先生。どうなさいました」

と、助手の青年はぼんやりと答えた。

「どうもこうもない。あんなことをしておいて、ここで酒など飲んでいるとは」

「なんのことです。ぼくはいまアパッチに襲われ、もう少しで殺されそうになったのですよ。信じてもらえないでしょうが、少し気を落ちつけようとしているのです」

「おまえのようなやつは、アパッチに殺されればよかったんだ。わしの作った装置を鎖で地面にしばりつけておいたろう」

「あ、あのことですか。宇宙ボートが完成したのなら、まっさきに同乗させてもらおうと思ってやったんです。悪く思わないで下さいよ」

「とんでもない。秘密にしておくため宇宙ボートと言っていたが、あれはタイムマシンだったのだぞ」

エル氏はそれに口をはさんだ。
「タイムマシンですって……」
「そうだ。やっと完成して百年あまり昔に行けるところだった。だが、いかに動力を強めても、少しも動かない。ついに部品が焼けきれ、めちゃめちゃになってしまった」
「すると、あのアパッチは」
「おそらく、あのタイムマシンが現在に固定されていたため、この付近の過去が逆に引きよせられたのだろう。そして、装置が焼け切れた時、一切はあとかたなく、引きはなされたのだ。わしがタイムマシンのなかで夢中になっている時、おまえらが過去を見物したとは、まったく面白くない話だ」
「まあ、もう一度作りなおせばいいでしょう」
エル氏のなぐさめに対してエフ博士は力なく首をふった。
「いや、動力の過熱のため設計図をこがしてしまった。それに、これ以上やりなおす気力もない。もう、研究所は閉鎖だ。そして、おまえはくびだ」
と、助手の青年に申しわたした。
エフ博士の研究所がひきはらわれたあと、エル氏はある日、かねて考えつづけていたことを実行に移した。すべてが過去の虚像のようなものだったとはいえ、アパッチに殺された男の言葉だけは、はっきりと耳に残っている。
エル氏は店に臨時休業の札を出し、用意をととのえて出発した。そして、熱気をおびた岩山を越え、ついに男に教えられた場所を見つけだすことができた。しかし、エル氏は苦笑いをして、こうつぶやかなければならなかった。
「物事はそううまくは行かないようだ。少しばかりおそすぎた」
そこには古びた廃坑が、砂に埋もれかけてさびしく穴を見せているだけだった。

転機

「やれやれ、この一年間はまったく忙しかった。いかにおれが仕事熱心とはいえ、われながらよく働いたものだ。きょうでいちおう、ことしの仕事はおしまいにして、年が明け、正月がすぎたら、また大いにせいを出すことにしよう」

おれはのびをしながら、こうつぶやいて夜の空を見あげた。このところ、ほとんど夜昼ぶっ通しで働いてきたので、ゆっくりと空をながめるのは久しぶりだった。冬空に輝く美しい星々をぼんやり見つめていると、一年の疲れが消えてゆくような思いがした。

その時、その星々のなかに、一つだけなにかようすのちがうのを見つけた。光り方も変だし、それに動いているようだ。さらにふしぎなことには、それがしだいに大きくなってきたではないか。

「あれはなんだろう」

と、おれは首をかしげた。あとで考えると、この油断と好奇心がいけなかったようだ。

あっというまもなく、おれのまわりには透明な壁のようなものができていた。そして、どうあばれても抜け出すことができなかった。おれはたいていのものなら、抜け出せる技術を身につけているが、なぜかこの場合はだめだった。

わけのわからない透明な箱に入れられてしまったらしい。これからどうなるのだろうと、おれは不安になったが、そのいやな予感はすぐに実現した。おれはその箱ごと空中に引っぱりあげられはじめたではないか。

「さては、妙な星と思った物は、話に聞く空飛ぶ円盤だったのだな。そして、この透明な箱は宇宙人が投げおろしたワナにちがいない。おれはさらわれるのだ。助けてくれ」

だが、いかにわめいてもむだだった。そのうち、ついに円盤のなかに連れこまれてしまった。

おそるおそる顔をあげ、まわりを見まわしてみると、みなれないやつらが、おれをとりかこんでいた。やつらのからだつき、顔つきといったら、さすがのおれも、すぐに目を伏せずにはいられなかった。どう説明したらいいかわからないが、早くいえば、強欲と残忍とを絵に描いたようなものなのだ。しかし、ぐずぐずしてはいられない。おれは思わず叫んでいた。

「助けてくれ。おれを地上にもどしてくれ」

これに答えたやつらの声も、外見に劣らずぞっとする調子をおびていた。

「じたばたするな。いくらあばれても、もうだめだ」

そこでおれは聞いてみた。

「いったい、なんでおれをつかまえたのだ」

「われわれの星では宇宙を征服する計画を立て、この円盤でほうぼうの星を調べてまわっている。そして、調べついでに、住民を一匹ずつつかまえて帰ることにしているのだ」

「おれをおまえたちの星へ連れていって、どうするつもりだ」

「まず、当分はどれいとしてこき使う。その働きぶりをよく研究し、占領するに値するかどうかの資料にするのだ」

「いやだ。とんでもない話だ。おれは今までのように、あの地球で働いていたい。たのむから帰してくれ。どうしても連れてゆくなら、べつなやつにしたらどうだ。あなたがたにとっても、そのほうがいいと思う」

おれは泣くようにたのんだが、やつらは冷たく首をふった。

「だめだ。われわれにつかまったからには、絶対に帰れないのだ。ぶつぶついわずにあきらめろ」

円盤は宇宙を動きはじめたようだ。おれはもはや二度と地球へ帰れそうもないことをさとった。偶然というものは、恐ろしいいたずらをする。広い地球の上から、よりによっておれをつまみあげるなんて。

だが、これも運命だ。やつらの星についたら、熱心に働いてやることにしよう。おれは仕事をするのが大好きだし、生まれつき人なつっこい。やつらにだって、いずれ親しくなれるだろう。しかし、やつらもおれの働きに気がついたら、さぞ驚くことだろう。なにしろ、おれは貧乏神なんだから。

窓からのぞくと、太陽がぐんぐん遠ざかってゆく。いまごろは、おれのいなくなった地球上の連中が、あの太陽をながめながら、こんなことを言っているだろうな。

「ほら、初日の出だ。おめでとう。おめでとう。ことしは景気のいいことがありそうだぜ」

宇宙のネロ

「なんとこのごろのテレビ番組のつまらないこと。出演者は変りばえがしないし、ストーリーもマンネリだ。少しは知恵をしぼったらどうなんだ」

「ああ。なにか目のさめるようなことを見物したいものだ」

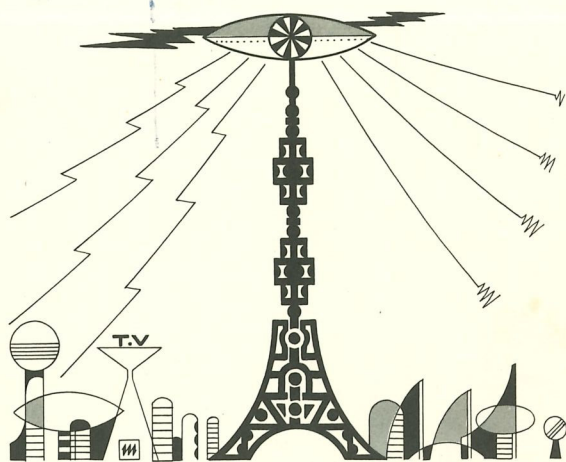
多くの人びとが、あくびをしながらこんなことをつぶやく平和な世の中であった。そこに、目のさめるどころか、目がさめっぱなしになるような事態が訪れてきた。

それは地球外から訪れてきた。黄金色に輝く奇妙な物体が、都会のまんなか、テレビ塔の上にとまったのである。

「あれが空飛ぶ円盤と言うものでしょう。だが、なにしにやってきたのですかね」

「さあ。しかし、金ぴかとは豪華なものですね。福の神でも乗っているのではないでしょうか」

人類には金色のものを見ると相好をくずす性癖があった。だが、そのみなの表情も、たちまち引きつったように変っていった。円盤から声がひびいてきたのである。

「おい、地球とかいう星の住民たち。よくこっちの要求を聞け。われわれにとって、ぜがひでも欲しいものがある。これはそのために送りこんだ自動操縦の無人宇宙船だ。だが、無人だと思っていいかげんにあしらうことは許さん。手むかってもむだだし、要求を聞かなければこの通り

だ」
　つづいて円盤の一部から、目のくらむような赤い光がほとばしり、それを受けた大きなビルは、一瞬のうちに焼失した。
　こうなっては、だれの目にも逆らうのが無益なことは明らかとなった。地球側の代表はおそるおそる申し出た。
「わ、わかりました。お望みのものはなんでもさしあげます。ウラニウムでございましょうか。食料、ダイヤモンド、それとも金……」
と、ここで口をつぐんだ。相手は金には不自由しない星の住民のようである。
「そんなものではない。われわれの星は文明が進んでいて、生活に不自由はない」
「さようでございましょうな。では、なにをお望みですか。まさか、ここを植民地にでもなさるおつもりでは」
「植民地など持つと、手数がかかるばかりだ。

われわれの欲しいものはべつにある」
「どうぞおっしゃって下さい」
「娯楽だ。これだけは機械で生産できない。さあ、早く、なにか面白いものを見せろ」
　ほっとした空気がただよった。
「わかりました。おやすいご用です。ちょうどいいことに、その塔の上から電波がでております。それにお合せ下さい」
と、電波の波長が告げられた。円盤はそれを受け、超電波に変えて故郷の星に中継をはじめたらしく、しばらくは沈黙をつづけていた。
　だが、その歌と踊りの番組がすむと、ふたたび声が呼びかけてきた。
「おい。つぎはどうした。一刻も休むことなくつづけるんだ」
　ただちに手配がされ、豪華な番組がとぎれることのないように編成された。人びとのなかには、これを大喜びでむかえる者が多かった。
「こいつはいいぞ。あの円盤のおかげで、当分のあいだ、昼夜ぶっ通しで面白い番組が見物できる」
「ありがたいことだ。いざとなればこのように出来るのに、いままでやってくれなかったのは、じつにけしからん」
　しかし、二、三日たつうちに、ありがたいどころか、事態は容易ならぬ方向にむかっていることがわかってきた。

連日連夜、目に見えぬ相手に対して、ごきげんを取りつづけていなければならないのである。

しかも、じつにしまつの悪いことに、この円盤を送りつけてきたやつらは、記憶力のよい住民らしく、同じ手のくりかえしがきかなかった。同じ出演者がふたたび出るのはかまわなかったが、前にやったのと同じか、または劣っていると、容赦なく、

「おい。ばかにするな」

と警告され、それを無視してつづけると、赤い光線によって、いくつかのビルが吹っとんだ。

もはや、全地球、全人類の問題になりはじめてきた。各国から、救援のために多くの芸能人が送られてきたが、それとても、先のことを考えると、心細くなるばかり。

たとえば、ある大がかりな手品ショーが出演すると、そのあいだはおとなしくしているが、ひとわたりすむと、

「よし。そのたねあかしをやってくれ」

と命ぜられ、この一座は二度と使いものにならなくなってしまうのだ。

スポーツ番組にしても、たちまち連日、世界選手権大会を中継しなければならない羽目に追いこまれ、とてもつづくものではなかった。少しでももたつくと、すぐ警告になる。

「どうした。つぎのを早くやれ。ぐずぐずしていると、飛び立って地上全部を焼きつくしてしまうぞ」

「待って下さい。これでもみな一生懸命にやっているのですから」

「つべこべ言うな。一生懸命など言いわけにならん。われわれは面白さだけを求めているのだ」

「いったい、いつまでつづければお気に召すのです」

「おまえらも知ってるだろうが、これで満足という限度は、娯楽にはない。永久にやるんだ」

「永久ですって」

「そうだ。われわれはこうして限りない星々を破滅させてきた。破滅の時期をのばしたいのなら、面白いことをやってみせろ」

完全な危機であった。しかも、この手におえない戦いをつづけるのは兵器ではなく、たえず新しいものを提供することである。

世界中から玄人、素人を問わず、あらゆるタレントが徴集され、プロデューサーのもとに激しい訓練が行われ、なんとか破滅を数時間ずつ切りぬけていった。

しかし、円盤の声は容赦なかった。

「おい、少し低調になったぞ」

「はい、どこがいけませんか」

「そんなことは、そっちで考えろ。われわれは面白がりたいのだ」

「なんだと、この底抜けやろうめ」

つきっきりで働いてきたプロデューサーの一人は、画面に飛び出し、思いきり悪態をつき、それを言い終ると、かたわらのコードを手にして自分の首をしめた。

だれもが息をのんだ瞬間、円盤から声がかかった。

「よし、なかなか気のきいたことをやるじゃないか。その調子だ」

その調子と言われても、犠牲になる自殺志願者を集めるのは容易ではなかった。また、なんとか集めてはみても、つぎつぎと趣向を変えた自殺をつづけることは絶望的な話だった。

「なんだ。また拳銃か。それはさっき見たぞ。マンネリだ」

「ああ、これもマンネリとは」

「もっと変った趣向でやれ。そうだ、大ぜいの気ちがいに武器を持たせ、街じゅうに放してみろ。それを中継で見せろ。刺激的なものをつぎつぎにやるんだ」

「とんでもないことです。そんなことをしたら……」

「そんなことをしなかったら、どうなるかは知っているだろうな」

さからうことのできるわけがなかった。全人類の安全にかかわることである。

しばらくのあいだ、相手はおとなしくなった。この残酷なショーがいくらかお気に召したらしかった。だが、ほっとするひまはなかった。この余裕を利用して、つぎの番組の準備をととのえておかなくてはならない。

ここに至っては、どこかで戦争でもはじめて中継する以外になかったし、そして、行きつくところは、原水爆戦を演じてごらんに入れる以外に、考えつくことはなかった。

その先は……。だが、ことの善悪を議論しているひまはなかった。道は二つ、破滅させられるか、破滅するかの問題である。

その時、だれもが青ざめている対策本部に一人の男があらわれた。

「ひとつ、わたしを出演させて下さい」

この申し出をうけても、あまり活気はわかなかった。

「その意気ごみはありがたいが、もうなにをやってもだめだろう」

「おそらくそうかも知れませんね。だが、ためしにちょっとでいいから出させて下さい」

「そんなに言うのなら、戦争ショーの準備ができるまで、つなぎに出演してもらうとするか」

まもなく、円盤から声がかかった。

「おい、あきたぞ。早くつぎにうつれ」

「はい、ただいま」

「急げ。われわれの星の住民の全部が見ているんだぞ。失望させるな」

「はい。……さあ、たのむぞ」

その男はスタジオに入った。

ついに苦難にみちた時期は終りをつげた。円盤からの、あの身の毛のよだつような請求の声は二度と響いてこなかった。

「やったぞ。よくやってくれた。ありがとう。だが、どんなことをやって見せたのです」

人びとは口々に感謝し、同時に質問をあびせた。

「わたしは催眠術師です。カメラにむかい、眠れ、眠るんだ、すべてを忘れ、二度と目ざめるな、と呼びかけてみたのです。こう効き目があるのなら、もっと早くやってみるのでした」

危機は去り、平和はよみがえってきた。

やがて、テレビ局は生き残りのくたびれた人員を集めて、一般放送を再開した。それはつまらない番組だったが、だれも文句を言わなかった。人びとはもはや、そのスイッチをいれようとしないばかりか、テレビセットから目をそむける生活に入ったのだから。

オアシス

「ああ、思いきり水が飲みたい」
「おれもだ」
ロケット内では、しばらく前から渇きだけが支配していた。だれもかれも水を欲しがっていた。ほかの物はなんでもそろっていたが、水だけはなかった。排泄した水分を回収する装置のぐあいが悪くなったので、二十四時間にコップ一杯ぐらいの割当てしかなかった。
「もう少しがまんしろ。このへんに水のある星があったはずだ」
艇長はこのようになだめた。ロケットはそれに望みを託して飛びつづけるほかにはなかった。そして、ついに空間のかなたに、小さな点を見いだすことができた。
「見ろ、星が見えた。きっと、あの星だ」
一人がかすれた声をあげた。
「待て。喜ぶのは早い。よく調べてみろ。のどが渇くと、幻を見やすくなる。そばまで行って、幻覚とわかったら、手のつけようのない絶望を味わわなくてはならなくなる」
艇長はあくまで慎重だったが、まもなく観測員から報告が伝えられた。
「大丈夫です。たしかに水は豊富のようです。これをごらん下さい。スペクトルが示していま

す。観測装置までが幻を見ているわけではないでしょう。水の存在は確実です」

もはや、喜びの声は押えられなかった。その歓声のうちに、青く輝く惑星が近づいてきた。

「水だ、水だ」

「水が飲める。かさかさに乾いたからだを、しめらせることができる」

「おい、早く着陸させてくれ。なにをぐずぐずしているんだ。もったいをつけなくてもいいじゃないか」

笑い声のなかで、操縦士の声だけが悲しそうな調子だった。

「着陸ですって。でも、水ばかりで島ひとつないところへ、どうやっておりるんです」

賢明な女性たち

どこからともなく地球に接近してきた宇宙船のむれは、上空で編隊を解き、各地に散り、それぞれゆっくりと旋回をはじめた。

「いったい、どこから、なにをしにきたのだろう」

「まったくわからん。なにか地球のようすを調査しているようにも見うけられるが」

「なんのための調査だろう」

「わかるものか」

だれにもわかるはずはなかった。たえがたい不安がみなぎった。いつなにがはじまるか、少しもわからないからだった。

映画ならば、こんな時にはピーピーいう音とともに、目もくらむ光線が発射され、あたり一面が焼きつくされることになっている。だが、実際には、もっと想像もできないようなことが起こらないとも限らないのだ。防ぎようのない毒の霧がまき散らされ、じわじわと降ってくるかもしれず、ふいに大音響がとどろいて、人びとの鼓膜がいっせいに破られるかもしれない。

あらゆる兵器が集められ、いちおうねらいはつけられたものの、攻撃をしかけるわけにもいかなかった。どんな対策を立てていいかわからず、ただじっと待つだけ、というのは、あまりいい

気持ちでない。人びとは、なんでもいいから早くはじまって欲しい、といった焦燥にかられた。
「もうがまんができない。やつらに呼びかけることをやってみよう」
「よし、あらゆる方法を試みよう」
地上には、いろいろな文字や記号が書かれ、飛行機やヘリコプターは文字を書いた長い布を引っぱって飛びあがった。電波は波長をいろいろに変えて発信された。
だが、宇宙船はなんの応答もせず、あいかわらず、意味ありげにゆうゆうと旋回をしつづけている。
「なんの反応もないな」
「地球の言葉が通じないのだろう。ああ、これからどんなことがおこるのだろうか」
この不安はいつ終るともわからず、人びとは頭をかきむしった。

その時、宇宙船は地上に接近し、人びとの見まもるなかで、スピーカーを使って重々しい声で呼びかけてきた。
「地球のみなさん。われわれは、われわれの星で起こった事態を解決しようと、はるばるやってきたのです……」
だれもが、これを聞いてほっとした。
「彼らは、いままで地球の言葉を研究していたのだな」
「そうらしい。それに敵意もなさそうだ。ひとつ応答してやろう」
地上からも、スピーカーを使って宇宙船に話しかけた。
「ようこそ地球へおいで下さいました。なにかお困りのごようす。地球にあるもので、お役に立つものがありましたら差しあげましょう。そして、これからは仲よく交際をはじめましょう」
これに対して、宇宙船からはこう答えてきた。
「ありがたい言葉です。では、それに甘えさせていただきましょう。われわれに若い女性を、すべてお渡し下さい」
気前のよくなりかけた人びとの顔は、たちまち引きしまった。
「とんでもないことだ。とてものめた話ではない」
「やつらの星で、なにかの原因で女が少なくなったのだろう。それで地球から女をつれて行こうとするのだな」
「地球人をなめるにもほどがある。やつらのほうが強いかもしれぬが、婦女子を渡してまで助か

ろうとするほど、われわれもいくじなしではない。かなわぬまでも戦おう」

たちまち、攻撃の命令が下された。ねらいをつけられてあったミサイルの発射ボタンは押され、待機していたジェット機はいっせいに飛びあがり、宇宙船にむけて突入をはじめた。だが、地球人の祈りをこめたこの攻撃は、どんな武器を使っても、なんの効果もあがらなかった。

攻めあぐんだ地球人にむけ、宇宙船はまたも呼びかけてきた。

「むだな抵抗はおやめなさい。そんなことをいくらやっても、宇宙船を傷つけることはできません。われわれは女性を渡してもらえさえすればいいのです。男性のかたがたまで殺すつもりは、少しもありません。さあ、すなおにお渡し下さい」

しかし、ではお渡ししましょう、とはだれも言い出せるものではなかった。そのようすを見てか、宇宙船はこうつづけた。

「いやがっても、むだです。こちら側からいただくこともできるのです。この通り……」

その声とともに、宇宙船からはピンク色の光が、地上に流れた。

「あれーっ、助けて」

女の悲鳴がおこり、一人の女性がその光の筒のなかを、みるみるうちに吸いあげられていった。それをきっかけに、宇宙船は女性の吸いあげ作業を開始した。電気掃除機に引きよせられる糸くずのような扱いだった。

だれも、これに対してはまったく手のつけようがなかった。しばらくするとその作業がやみ、宇宙船はどこともなく去って行くが、ほっとするのもつかのま、たちまち作業を再開する。

「すごい科学力だ。とても防ぎようがなさそうだ」

「どこかに待たしてある母船につみ込んでいるのだろう。女たちは、どんなひどい星につれて行かれて、どんなひどい目にあうのだろうか。ああ、なんと残酷な連中だろう」

男たちは呆然と立ちつくし、女たちは逃げまどった。しかし、あちらこちら逃げまどっているうち、必ずしも防ぎようがないわけでもないことがわかってきた。丈夫な建物のなか、地下道のなかにいれば、ピンク色の光線もその効果をあげ得ないことが判明したのだ。

「わかった。女たちは早く建物か地下道に避難しろ」

大さわぎのうちに、女性たちはみなかくれ終った。

「これでよし、しばらく女たちは外に出ないことだ。やつらも建物を破壊するようなことはしまい。そんなことをしたら、やつらのねらっている女たちまで殺してしまう。そのうち、やつらもあきらめて帰るだろう。がんばれ」

宇宙船は手を出しかねたようすだった。だが、人びとの期待に反し、いっこうにあきらめて引きあげるけはいを見せなかった。そして、そのうち、またもスピーカーで呼びかけをはじめた。

「地球のみなさん。われわれがあきらめるとお思いかもしれないが、それはまちがいです。われわれは重大な決意をして出発してきたのです。必ず目的をとげてみせます。科学も知能もあなたがたよりすぐれているのですから」

男たちは空を見あげ、女たちは建物や地下道のなかで、つぎにどんな方法が用いられるのかと、身ぶるいした。それにむかって、宇宙船からの声がつづいた。

「賢明なる女性のみなさん。あなたがたはなにか考えちがいをしているようです。われわれにまったく歯がたたないような地球の男にくっついているほうがいいのですか。いくじのない男にくっついているより、あらゆる点ですぐれたわれわれのほうに来たほうがいいではありませんか。そして、きらめく星々のあいだに、夢のような幸福を見いだしたほうが、ずっといいでしょう。われわれは美しい女性だけを求めているのです。みにくい女性は必要としません。あとになって、ああ行けばよかったでは、手おくれですよ」

すばらしい殺し文句だった。このまま地下道ぐらしをつづけるより、この目で見たようにすぐれた科学力を持った宇宙からの招きに応じたほうが賢明だ、と頭を働かせた女性で、しかも自分が美しいと信じている者は、ためらうことなく戸外にとび出した。あいにく、自分が賢明で美しいと思いこんでいたのが、女性の大部分だったので、男たちはあわてた。

「やめろ。連れて行かれたら、どうされるかわからないぞ」

「思いとどまってくれ。もう少しがんばれば、やつらはあきらめるにちがいないから」

だが、賢明で美しい、と思いこんでいる女たちの流れを止めることはできなかった。

「なに言ってるのよ。このチャンスを逃がしたら、後悔してもしきれない大損よ」

女たちは、川をさかのぼる鮭のむれのように、うっとりとした表情でピンクの光のなかを、つぎつぎと吸いあげられていった。

あとに残ったのは、賢明でなく、美しくないと自認している女だけ。つまり、女はほとんどいなくなった。そして、気のぬけたように立ちつづける男たち。

「ちくしょう。ああ、とうとう、みんな奪われてしまった」

男たちは空をあおいで、みんな泣きつづけた。もっとも、泣く種類にはいろいろあった。別れの悲しさで泣く者もあった。手のほどこしようもなく奪われてしまった自分たちの情なさを思っての、くやし泣きもあった。また、女に見限られたことに対する憤りで泣いている者もあった。だが、泣いている点ではだれもが同じだった。

宇宙船が飛び去り消えていった空を、いつまでもながめ泣きつづけた。あきらめて、立ち去る者は出なかった。

その時、空にふたたび宇宙船のむれが、しかもずっと大型のが、数を増してあらわれた。その飛び方には、心なしか浮き浮きした感じがあった。

「こんどは、あんな大きなのがあらわれた。なにしにきたのだろう」

「女たちにせがまれて戻ってきたのかもしれぬ。あのなかでいっしょになって、われわれをあざ笑っているにちがいない。面白くもない」

「いや、そんなまやさしいことではあるまい。女さえ手に入れれば、この地球には用がないから、あとで奮起して追いかけてくるのを恐れて、徹底的に破壊しておいたほうがいいと気がついたのだろう」

いずれにしろ、決して良いこととは思えなかった。ある者は泣き声を高め、ある者は恐怖におののき、宇宙船のむれをみつめた。

宇宙船のむれは高度を下げ、スピーカーは声を出した。

「男性のみなさん。なにも泣くことはありません。われわれの星で、男たちが原因不明のうちに減少してしまったので、この星への移住を計画したのです。そのじゃまになる地球の女は、やっと宇宙へ捨て終りました。これからは仲よく暮しましょう。いままでのようすだと地球の男性は、頭は少し悪いけれど、みな純真なかたばかりですね。きっと幸福になれそうです」
つぎつぎと着陸した宇宙船からは、地球の女性よりはいくらか賢明で、美しい宇宙の女性たちが……。

宇宙の指導員

「では、いってまいります」
空港に用意されたロケットの前に立って、若い隊員が私に言った。私は、
「よし。たのむぞ。地球の文明を、少しでも多くの星々にわかちあたえることこそ、われわれの念願なのだから」
と激励した。後進星指導計画がたてられ、私はその実行部門の部長である。養成された隊員は、ロケットを駆って宇宙をめぐり、文明のおくれている星をみつけだし、そこに、文化と産業と平和とを築く指導をしてやるのが目的なのだ。
多くの、熱意にもえた若者たちが、このように宇宙のはてを目ざし、つぎつぎと出発してゆく。こんどのロケットは、サソリ座の方角にむかうのだ。
「ご期待にそって、必ず成果をあげてきます。報告は無電でいたしますから、それに応じて、必要な物品を送って下さい」
「わかっておる。では、がんばってくれ」
彼はロケットに入り、とびらは閉じた。たちまち、火炎の噴射がはじまり、上昇したロケットは銀色の点となり、青空のなかに溶けこむように消えた。

隊員たちからの連絡は、無電により、定期的に私の事務室に送られてくる。サソリ座へむかった隊員からも、順調な報告がつづいた。

「ただいま、宇宙空間を、目的の星にむけて航行中。異状ありません」

私は、それに応じて指示を与える。

「了解。安全を祈る」

「めざす星は、だいぶ接近しました。着陸態勢に入ります」

「了解。報告をつづけろ」

「ぶじ着陸完了。観察したところ、水も植物もあり、なかなかよい星です」

「了解。だが、住民はいるか」

「ええと。あ、山かげからあらわれました。毛皮をまとい、だいぶ原始的なようです。あ、大ぜいです。こちらへやってきます」

「了解。どうだ、凶暴そうか」

「いや、ようすは原始的ですが、顔つきは利口そうです。これなら、指導すれば、すぐに文明も伸びましょう。あ、やつらは近づきました。はじめて見るロケットに、目をまるくして驚いています。これから、やつらとの接触をはじめます。ではまた、のちほど報告を……」

無電は中断されたが、しばらくすると、ふたたび報告が入ってきた。

「……やつらははじめて文明にふれ、驚きにみちています。ここでもう一押しすれば、大いに尊敬の念を受けることができ、これからの仕事の進行に、かなり便利と思われます。そこで、ひとつ、貨物ロケットに酒をつんで、至急お送り下さい」

「よし、了解。さっそく手配する」

私はその手配を命じた。貨物ロケットのタンクには酒がみたされた。このロケットは無人操縦によって、目的地まで飛びつづけるのだ。

受取りの無電が入った。

「酒を運んできたロケットを受け取りました。原住民たちは、はじめて飲む酒に大感激です。こんなすばらしい飲み物があったのかと、大喜びです。わたしは徐々にやつらの言葉をおぼえはじめました」

「了解。その調子でやってくれ」

そもそも、文化を高める指導をするには、まず、欲を出させなければならない。そしてつぎに、その欲をみたすために働くことを教え、その能率を高めるために技術の向上を考えさせる。こうして文化と産業が発展しはじめるのだ。

この、欲を出させるきっかけがむずかしい。その星の住民の好みに合った物を与えなければならないのだ。だが、彼は酒を試み、それで欲を出させることに成功したようだ。

この調子なら、指導もまもなく軌道にのるだろう。つぎはなにを要求してくるだろう。穀物の種子かな。それとも、農具かな。トラクターかな。私は期待しながら、無電を待った。

しかし、彼からの連絡は意外だった。

「すべて順調です。やつらもわたしの言葉をおぼえはじめました。やつらには文明を築く素質は

充分あります」
「了解。つぎにはなにが必要か。すぐ送るぞ」
「酒をつんだロケットをたのみます」
「おい、酒は前に送ったはずだ。ほかに必要な物はないのか」
「ありません。とにかく、酒をつんだロケットを送って下さい」
「了解。すぐ手配する」
　私は不審に思ったが、信頼する部下からの報告だ。酒をつんだ無人貨物ロケットが用意され、宇宙に送り出されていった。
　そして、しばらくたち、また彼からの連絡があった。
「部長。たのみます。酒をつんだロケットを至急お送り下さい」
「なんだと。また、酒か。酒ぐらいそっちで作ったらどうだ。酒を作る設備を送ろうか」
「いえ。酒をたのみます。お願いです」
　彼の報告を信用するほかない。酒は送りだされた。だが、どうしたことなのだ。居心地がよくて、酒ばかり飲んで、任務を怠けているのではないだろうか。充分な訓練をうけた部下ではあるが、酒ばかり送らせ、報告をはっきりしない彼に、少しばかり疑惑の念をもった。
「部長。酒のロケットをたのみます」
　またもだ。
「おい。いいかげんにしろ。どうしたんだ」

「大丈夫です」
「大丈夫ではわからん。はっきりしないと、調査隊を送るぞ」
「いや、それは困ります。とにかく酒を送って下さい」
「了解」
　了解といったものの、私はがまんができなくなった。こんな状態では困る。彼は原住民たちに神さまあつかいされ、酒を飲んで女の子と遊んでいるにちがいない。勤務状況を調べに行く必要がある。私は酒を送る貨物ロケットの奥にかくれ、出発した。

　宇宙の旅を終え、私は目的地の星についた。いったい、どんな実情なのだろう。
　ドアがあけられた。私が物かげから観察していると、原住民たちが入ってきて、酒をつぎつぎと運び出していった。それは物なれたようすだった。
「まったく、わけがわからん。彼はなにをやっているのだ」
　こうつぶやきながら、ロケットの外をのぞくと、原住民たちの酒もりが行われていた。だが、その陽気な歌と踊りのなかには、彼の姿は見えなかった。私は夜になるのを待ち、彼をさがしにでかけることにした。
　夜になるにつれ、住民のさわぎは、ますますさかんになった。なかには酔いつぶれるものもでた。
　ころはよしと、私はそっとロケットを出た。闇にまぎれ、木の間を縫いながら、歩きつづける

うち、遠くに妙なものがあるのに気がついた。私はそれに近づいてみた。それは木の枝でがんじょうに作られたオリであった。そして、なんということだ。そのなかには、彼が入っているではないか。

私はそっと呼びかけた。

「おい、これはどうしたんだ」

彼はびくっとして振りむいた。

「あ、部長ではありませんか。来ないでくれ、と申しあげたはずでしたが」

「しかし、これはなんというざまだ。ちっとも順調ではないではないか。さあ、おまえのロケットで、わしといっしょに帰るんだ。そして、地球に帰ったら、ただちにおまえはクビだ」

「ここから帰れて、クビにしていただけるなら、こんなうれしいことはありません」

「おまえもそう思うだろう。おまえをクビにして、すぐに後任の者をここに送るのだ」

「いえ、この星は、もう指導する必要などありません。なにしろ、この住民たちは素質があり、もう、立派に文明の星です」

「それは、どういうわけだ」

「あ、早くかくれて下さい。みつかると大変です」

私があわててかくれると、千鳥足の住民があらわれた。そして、べろべろの口調で、オリのなかの彼に呼びかけた。

「おい。そろそろ酒がなくなるぞ。さあ、いまのうちにつぎの注文をしておけ」

オリのなかの彼は、おどおどしながら答えていた。

「だけど、酒はいま送ってきたばかりじゃありませんか。早すぎます」

「うるさい、われわれは、だんだん酒に強くなってきたんだ。ぐずぐず言わずに、早く注文しろ」

「ねえ、もういいかげんに、帰して下さいよ」

「とんでもない。こんな便利なおまえさんに帰られては、たまらん。われわれはそんなことを許すほど、ばかではない。さあ、早くやれ」

オリのそばに無電機が運ばれてきた。

「さあ、早くやれ。よけいなことを言うと、殺すぞ。おれたちは、おまえさんの言葉を覚えたんだから」

太い棍棒でおどかされながら、オリのなかの彼は、しかたなく無電機にむかった。

「地球の本部ねがいます。酒をつんだロケットを至急お送り下さい。いえ、なにしろ絶対に必要なんです。ぜひ、送って下さい。たのみます……」

上流階級

1

「待ってたのよ。だけど、あなたあんまり強そうじゃないのね」
アール夫人は訪れてきた青年を玄関に出むかえ、美しい眉をひそめながら、失望したような声をもらした。だが、青年はその言葉にはなれているらしく、
「どなたさまも、そうおっしゃいます」
「まあいいわ。よく打ち合せをしましょう。どうぞ、おあがりになって」
夫人は青年を応接間に案内した。
ここは静かな郊外にたてられたわりあいに大きな家。応接間の窓からは、午後の陽のもとにひろがる広い庭、そのむこうには雑木林がながめられた。いくつかの油絵が壁にかけられてあるその部屋には、高価な皮張りの椅子が配置されてあった。彼女はそのひとつをすすめた。
「どうぞ。それから、なにかお飲みになりません……」
青年は椅子に腰をおろしたが、飲物については、手袋をはめたままの手を振って断わった。
「けっこうです。わたしはどんな場所にも指紋や唾液を残さないよう、いつも習慣づけているの

です」
「そうでしょうね」
夫人はこう言いながら、机の上の銀のシガレット・ケースから一本のタバコをつまみ、ライターの音を軽く響かせた。青年はその煙の流れを目で追っていたが、
「ところで、どのようなご用でございましょうか」
「あら、あなたはさっきのお電話のひとなんでしょう」
夫人は首をちょっとかしげ、不審そうな表情になった。
「さようでございますが、わたしとしてはご本人から、もう一回、直接にお話ししていただくことにいたしておりますので……」
青年のすべてに慎重なようすに、彼女は一段とたのもしさを感じ、うなずきながら用件を口にした。
「じつはね、さっきもお話ししたように、ある人を殺していただきたいのよ」
「かしこまりました。わたしとしても、それをお引き受けするために、おうかがいしたのでございます」
「だけど、あなたにできるの。あんまり強そうには思えないけど」
夫人には、まだいくらかの不安が残っているようだった。
「失礼ですが、奥さまはボクシングやレスリングと混同なさっていらっしゃるようです。殺人というものは、筋肉の強さとはちがいます。それとは別の、心の問題でございましょう。常識的な

良心を押えつけ、その場にのぞんで、少しも取り乱さないで行動できるかできないかの問題でございます」

「そういえばそうかもしれないわね。あなたにはそれがお出来になるの……」

「はい。わたしは世の中に対して、絶望しか抱いておりません。心のなかは夜の廃坑のように、ただ空虚だけが占めております。涸れた運河に波が立たないように、わたしの心はどんな行動に対しても、波の立つことがございません」

「あら、あなた案外まじめなのね。それに、ちょっとした詩人じゃないの。面白い殺し屋なのね」

と、夫人は笑い声をあげて、身をくねらせた。だが、育ちがいいせいか、それにはいやらしい雰囲気をともなっていなかった。青年はほんの少しだけ顔を赤らめた。

「わたしはいつもはギャングの縄張り争いなどの仕事をしていて、こんな上流のご家庭の仕事ははじめてなのでございます。ところで、どんな人を殺すのがご依頼でございましょうか。奥さまのお悩みを、必ず解決してごらんにいれましょう」

夫人は椅子から立ちあがり、青年の耳に口を寄せた。そして、品のよい香水のにおいのなかで、声をひそめてささやいた。

「あたしの夫よ。夫を殺していただきたいの」

内容が重大なのにもかかわらず、彼女の声の調子は落ち着いていた。そのため、驚きの表情は青年の顔のほうにあらわれた。いつもの依頼主たちとは、なんというちがいだろう。彼らは目じ

りをつりあげ、机をたたきながら命令をくだすのだ。

「え、ご主人をですって。なんでまた……」

「そういう相手では、引き受けていただけないの」

「いえ、そんなわけではございませんが、このような立派な暮しをなさっていて、ご主人にご不満をお持ちとは、想像もできないことですので」

「人間の欲望というものはね、限りがないものなのよ。この世に生まれてきたからには、心ゆくまで生活を楽しまなければつまらないじゃないの」

「それはおっしゃる通りですが……」

首をかしげる青年に対して、アール夫人は話しつづけた。

「もう少しくわしくお話しするとね、あたしは今の夫にあきちゃったのよ。それに、ほかに好きな人もできたし」

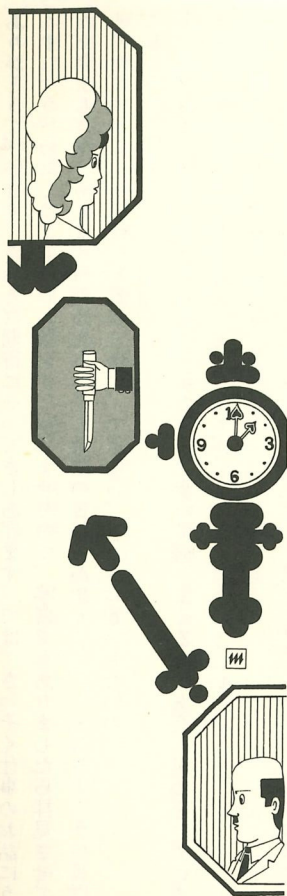
「それなのに、ご主人は離婚を承知して下さらないというわけですか」

「ばかね。離婚だけなら承知してくれるでしょうし、いざとなれば駆け落ちという方法があるぐらい知ってるわ。だけど、いまの生活を捨てたくないのよ。そんな損はしたくないわ。この生活を変えずに、夫だけを交代させたいのよ。それには、いまの夫に消えてもらう以外に方法はないじゃないの」

「なるほど……」

と、青年は深くため息をついた。

「どうなさったの」
「いいえ、いままでわたしの接してきた社会の連中と、あまりにも考え方がちがうので、ちょっととまどっただけでございます。ところで、殺す方法には特にご希望でも」
青年の言葉は、ビジネス・ライクな調子をとりもどした。
「方法を指定してもよろしくって……」
「はい。それによってはお高くいただくこともございますが」
「いいわ、高くっても。ぜひ、ナイフで刺してちょうだい。ぐさりと刺して、息の根を止めちゃうのよ」
夫人は形のいい指先をまっすぐに伸ばし、残酷を楽しんでいるように笑いを浮かべた。
「わかりました。ナイフはわたしの得意とするところでございます」
「だけど、大丈夫かしら。あたしはそれがいちばん心配なのよ。夫は少し手ごわいのよ。やりそこなって、あなたがやられた時のことを考えてごらんなさい。あたしの将来は、なにもかもめちゃめちゃよ。最も穏便な結末が、無一文で追い出されるといったところじゃないかしら。そんな場合を想像したらたまらないわ」
「その点は、ご心配なく。わたしだってはじめてではありませんし、それに、ご依頼主にだけは、絶対にご迷惑をおかけしません。それがわたしのような仕事をする者の、ただ一つの信用であり、また生きがいなのですから」
「ぜひやりとげてね。必ず息の根をとめてくれなくちゃ困るわ」

「よくわかっております」
夫人は棚の上の彫刻のある小さな木箱をおろし、そのなかから約束の額の札束を出し手渡した。
「では、代金をお払いするわ。成功したら、あとでもっとお払いしてもいいのよ。お望みなら、お金以外のものもさしあげるわ。あら、こんなお約束をしても、反対にやられちゃったら、どうしようもないわね」
意味ありげなまばたきとともに、夫人はまた笑い声をあげた。そのためか、札束を受け取る青年の手は少しふるえた。

「ありがとうございます。きっとご期待にそってさしあげます。では、さっそく仕事のお話にうつりましょう。わたしはご主人のお顔をまだ存じませんので、写真でもありましたら拝見させていただきましょう。あとは、お勤め先とか、ご希望の日時とかを」
「そんなにゆっくりしてはいられないのよ。できたら、きょうお願いしたいの」
「これからですって」
「ええ、夕方になると、夫はあの林のなかの小道を歩いて帰ってくるわ。あたしがのぞいていて合図をするから、そうしたら近よって、すれちがいざま刺してちょうだい」
「はい。そのようにやりましょう」
青年はポケットからナイフを出し、その刃の部分を指でなでてから、ふたたびもとにもどした。
「もうまもなくだわ。ほんとに、しっかりやってね」
アール夫人は宝石をちりばめた腕時計をのぞき、青年の肩を軽くたたいた。

2

「よくきてくれた。きみかね、殺し屋というのは」
広い社長室で、殺し屋というところで声を落しながら、アール氏は来客をむかえた。
「さようでございます」
その男も低い声で、ささやくように答えた。その筋骨たくましい男は、アール氏にすすめられ

るままに、広く厚いじゅうたんの上を歩き、やわらかいソファーに腰をかけた。
「しかし、じつに強そうだな。わしはきみのような男が来てくれて、うれしくてたまらぬ」
アール氏はたのもしそうな男をながめ、満足したような笑い声をあげた。
「ご信用いただいて、ありがとうございます。自慢するわけではありませんが、腕力ではたいていの者に負けることはございません。それに、人を殺すことに人いちばい興味を持っております」
男は病的とも見える目でにやりと笑った。それは爆発寸前のダイナマイトといった雰囲気を持っていた。
「いや、ますますたのもしい。きみは趣味と実益を一致させているわけだな。しかも、もとがかからない。わしもそんな仕事をやってみたいものだよ」
アール氏は喜びの声をあげながら、葉巻に火をつけた。男はポケットからパイプを出し、それにあわせて煙を吐いた。
「しかし、実益がともなうかどうかは、社長がお金をお払い下さるまでは、なんとも言えませんね」
「わかっておる。もちろん、金は払うぞ」
「お金さえお払いいただければ、どんな相手でもやりとげてみせましょう。ところで、その目的の人物は」
「じつは、わしの妻のことなんだが……」

声をひそめながら、アール氏は机の上にかざってある夫人の写真を指さした。男もそれに目をやり、

「きれいな奥さんではありませんか。しかし、まさかこのかたを殺すわけではないでしょうな」

「ああ、わしは妻をなにものにもかえられないくらい愛している。殺すことなど、考えたこともない。だが、困ったことがおこったのだ」

「それは、どんなことなのです」

「このごろ、わし以外に好きな男ができたらしい。憎むべきはその男なのだ。やつさえいなければ、妻の心はわしに帰ってくるだろう」

「それはそれは。社長のようななに不自由ない立場のかたに、そんなお悩みがおありとは。わたしだったら、ただではおきません」

「きみなら、すぐにそうするだろう。いや、わしだって自分で殺したいぐらいだ。しかし、やるからには失敗をしたくない。そこで、ぜひきみの力をかりたいのだよ」

「よくわかりました。社長とわたしとは生活はちがいますが、男としての悩みには変りはないでしょう。まったくご同情いたします。よろしゅうございます。腕によりをかけてやりとげましょう。こんな場合はお金などいらないと申しあげたいところなのですが……」

「それはありがたい。だが、わしは仕事に対しては、すべて正当な報酬を支払うのが方針だ。それに期待以上にやってくれれば、ボーナスを出してもいい」

「期待以上と申しますと……」

「やつに対するわしの憎しみはわかるだろう。その憎しみをこめて殺してもらいたいのだ。それから、いうまでもないことだが、決してやりそこなわないでもらいたい。完全にやりとげてくれたら、あとでボーナスを渡す約束をしよう」

「ご安心ください。おまかせいただいたうえは、わたしだって、かけ出しの殺し屋ではございません」

「たのむぞ」

こう言いながら、アール氏はポケットから札束を出し、男に渡した。

「ところで、その相手の住所や人相をうかがわないことには」

「いや、その必要はない。これからわしが案内する」

「これからですって」

「ああ、いつもなら、わしの帰宅時刻はもっとおそい。いまごろは、やつも安心して、わしの留守宅で妻と話しあっていることだろう。そこをねらうわけだ。これから帰り、遠くから自動車のクラクションをならす。やつはあわてて逃げだすだろう。そこを襲ってくれればいい」

「いいでしょう」

「だが、きみはなにか武器でも持っているのか」

「ナイフを持ってはいますが、わたしはしめ殺すほうが好きです。この腕でしめあげてやりますよ」

「だが、相手も手ごわいかもしれぬ。万一のために、すぐにナイフを出せるようにしておいたほ

うがいいかも知れない。さて、そろそろ出かけるか……」
アール氏は時計を見あげ、うながした。

3

薄暗い雑木林のなかで、恐るべき決闘が展開され、それはしばらくの間つづいた。
二人の殺し屋は相手が想像以上に強いことに驚きながらも、おたがいの依頼主のため、また報酬のために必死の力をふりしぼった。低いうめき声が夕やみに広がり、何枚かの枯葉が散り落ちた。
しかし、やがて、まざりあっていた二つのうめき声は、一つだけになった。
「うまくやってくれたかしら」
林のなかからあらわれたアール夫人は、かがみ込みながら、こう声をかけた。すると、青年の息もたえだえの言葉がかえってきた。
「や、やりましたよ。ご主人がこんなに強いとは思わなかった。早く医者を呼んで下さい。つかまるのはいやだが、いまここでは死にたくない。お願いします」
だが、アール夫人は青年に対してではなく、いつのまにかそばに来たアール氏にむかって、うれしそうに言った。
「あなた、どう。こんどはあたしが勝ったでしょ」
「ああ、どうもそうらしいな。わしのほうは見るからに強そうなやつだったが、やられるとは情

ない話だ」
「ぶつぶつ言うのは男らしくないわよ。約束どおりダイヤモンドを買ってちょうだい。ほんとだったら、あなたがこうなっているところよ」
夫人は白い指で、男の死体を指さした。
「わかった、わかった。買うことにしよう。ところで、この若い男のほうはどうする。とどめをさすか」
「その必要はなさそうよ。もうすぐ死にそうだわ」
その会話を聞き、くやしそうにもがいていた青年は、まもなく首をがっくり落した。
「ほら。さあ、いそいで二人のポケットから札束を取りもどし、警察に電話して死体を片づけてもらいましょう。早くしないと宝石店がしまってしまうわ。それに、毛皮のお店にも寄らなくては」
「おい、ダイヤはわかっているが、毛皮の約束なんかしないぜ」
「いいじゃないの、ついでに買ってくれても」
「だめだ」
「けちね。買ってくれないなら、殺してしまうから」
「おまえこそ殺してしまうぞ」
「じゃあ、その勝負はこのつぎにして、きょうはダイヤだけでがまんするわ」

夜の侵入者

「もしもし、電報です……」

夜。テレビのゴールデン・アワーを少し過ぎたころ、その女はこんな声とともに、アパートのドアの上にノックを聞いた。彼女はつぶやきながら立ちあがった。

「なんで今ごろ、電報なんかがくるのかしら。撮影所からの至急の仕事かしら。だけど、……ああ、さっき外出していたので、帰りしだいすぐに連絡するようにと電報にしたんでしょう。きっとそうよ」

彼女はこの部屋にひとりで住んでいた。映画の撮影所につとめているが、俳優としてではなかった。部屋の壁に大きなスチール写真がいくつも飾られているが、彼女自身のものは一枚もなかった。

「電報ですよ。おるすですか」

若い男の声はつづいた。

「はい。いまあけます」

彼女は鍵の音をたて、とってを内側に引いた。一人の男が流れこむように入ってきた。

「入ってこなくてもいいでしょう。あら、電報配達の人じゃないじゃないの」

こう言いながらよく見ると、その男は電報配達の服を着ていなかった。よごれた服を着た若い男だった。そして、息をはずませながら低い声で言った。

「なんでもいい。早くドアをしめろ」

低いけれど圧力を帯びた声にけおされ、彼女は言われた通りにした。

「いったい、なんなのよ。電報だなどとうそをついて、ドアをあけさせるなんて……」

こんな経験ははじめてなので、彼女は聞かずにはいられなかった。

「おまえさんは映画会社につとめているんだろう。このへんを通りがかり、ふと、それを思い出したので寄ったのだ」

「それはそうだけど」

「そこを見こんで、たのみがあるんだ」

「あら、それは感ちがいよ。映画スターになりたいのなら、おかどちがいだわ。それは映画会社につとめてはいるけど、あたしは女優でもなければ、監督でもないわ。それに、スカウトでも、企画係でもないんだから、そのほうの役には立たないわ。それだったら、べつな人をたずねなくては。さあ、お帰りくださらない」

彼女は軽く笑い声をたてた。たしかに、この青年はやさしく、スマートな顔だちをしていた。ちゃんとした順序をふめば、画面に出られるかもしれない。この青年よりもっと妙な容貌をした男が、近ごろはスクリーンの上で幅をきかせているのだから。それにしても、あたしの所ではおかどちがい。

彼女はこう思いながら、ドアをあけてあげようと手を伸ばした。しかし、青年はその手を押えた。おとなしそうな体つきなのに、妙に力がこもっていた。

「わかっている。おれは映画スターなんかになりたくて、ここにやって来たのではない」

「それじゃあ、なにが望みで……」

「もらいたいものがある」

青年はポケットから刃物のような物を出し、またもとに戻した。その不穏なけはいから、彼女はなるべくさからわないほうがいいと判断した。

「あまり手荒なことはしないでちょうだい。欲しいものならあげるから」

「おとなしくしていれば、どうこうしようとは思わない」

「だけど、それも感ちがいのようね。ここにはお金とか宝石といったものはないわよ。映画会社で働いているからといっても、みながみな一流スターのように豪勢なことはないのよ」

「わかっている。おれにだってそれくらいの常識はある。おれのもらいたいのは、品物ではなく、してもらいたいという意味だ」

「なにをしろと言うの」

「おまえさんの手先の技術を、ちょっと生かしてくれればいい。べつに使っても減るものでもないだろう。おとなしくやってくれればいい。へたにさわぐと、指先がほんとに減るかもしれない」

青年は手をまたポケットに入れた。

「わかったわ。なんでもするから、変なことはやめてよ。それで、だれをどうすればいいの」

女は青年の言う通りにすることにした。彼女は映画会社のメーキャップ係。この分野ではすぐれた才能の持ち主だった。壁にかかっているスターの写真は、すべて彼女の作った芸術品だった。あの初老の男は、彼女の指先によってまだ二十代の俳優が変貌（へんぼう）したものだし、そのとなりのういういしい娘は、四十をすぎた女優にメーキャップをほどこしたものだった。また、どう見ても女としか見えない男優の写真もあった。

彼女の指はさながら魔法使いの杖（つえ）。この大事な杖の長さをちぢめられでもしたら、これから生活してゆくことができなくなる。

「おれは逃げているところだ。逃げ出したからには、途中でやめるわけにはいかない」

「あなたの顔を変えてくれというわけなのね」

「ああ。おれは半年ばかり未決囚に入れられていた。あまり楽しい所ではない。そこで、きょう法廷へ連れて行かれる途中、すきを見て逃げ出してきた。もう二度とあんな所に帰る気はしない」

「まあ。そうだったの。だけど、断わるわけにもいかないわね。さあ、やってあげるから、そこにおかけなさい。でも、ここには道具がそろっているわけじゃないから、そう完全にはいかないかもしれないわ」

彼女は青年を三面鏡の前にすわらせ、ありあわせの道具を出し、少し照明を強くした。

「さあ、早いとこやってくれ」

「でも、考えなおしたらどうなの。メーキャップは整形手術とはちがうんだから、いつまでもつづくものじゃないわ。しばらくすると落ちちゃうじゃないの」

「わかっている。一晩ぐらいもてばいい。警戒の網を通り抜けさえすればいいのだ」

「それで、どんな顔にしたらいいの。そうね、いっそ女の顔にしたらどうかしら」

彼女は鏡のなかの青年の顔をみつめながら、目を輝かした。このような場合にも、やはり職業としての感興はわいてくるものだ。ここをこう変え、あそこを変えれば女としても通用する顔だった。だが、青年は、

「そうはいかん。そうするには服もなにも変えなければならない。そんな余裕はないし、女装が

ばれると、かえって怪しまれる。なるべくおれの顔とかけはなれたのに変えてくれればいい」

「じゃあ、年配の、ぶっそうな顔にしましょうか」

「いいだろう。ぶっそうな男が、ぶっそうな顔になったために、ゆうゆう逃げられたなんて、いい話題になる」

「わかったわ。さあ、クリームをぬるから、ちょっと目をつぶって」

青年は目をつぶりはしたものの、

「断わっておくが、妙なまねはするなよ。おれは強盗でつかまったんだから」

「あなたのような人が強盗とは、人はみかけによらないこともあるものね」

夜の静かさのなかで、彼女の作業は進行した。

「どうかしら、こんなぐあいで……」

青年は鏡のなかの自分に目をこらした。

「なるほど、こうも変るとはさすがだ。なんというやな顔だ。身ぶるいがする。しかし、大出来だ。自分でさえそう思うのだから、ひとにはとても見わけがつくまい」

鏡のなかには黒く陽にやけ、目つきの悪い中年の男がいた。

「じゃあ、早く出てってよ」

「よし。出かけるぜ。だが、出かける前にすることがある」

青年は彼女の腕をねじあげ、そばにあった電気スタンドのコードで手足をしばった。

「なにをするのよ。約束がちがうじゃないの」

「おまえさんだって、約束がちがう。どうも背中で変なことをやっていると思っていたら、こんなことをしたな」

青年は服の背中を三面鏡にうつした。そこには白い粉で「この男をつかまえて」と書かれていた。彼女が指先きで気づかれぬように書いたものだったが。

「それで、あたしをどうしようと言うの」

自分の作品ではあったが、凶悪な青年の顔に彼女は恐くなってきた。

「だからといって、殺したり、傷つけたりして罪を重くするほどばかではない。警察に連絡しないで、しばらくじっとしていてもらえばいいのだ。そのあいだに、おれは遠くに逃げている」

青年はそばにあったタオルで彼女の口を覆った。もはや声は出せなかった。

「ドアには鍵をかけずにおくから、あすの朝になれば、だれかが入ってきて助けてくれるさ。それから手配写真が作られたとしても、なにもかも手おくれだ。あばよ」

青年はこう言い、別人となった顔を持って、ドアから出ていった。

「おかげで、やつをつかまえることができました。苦しかったでしょう」

まもなく入ってきた警官は、床のうえにころがされていた彼女を助けおこし、コードをほどいてくれた。

「あたしも、うまくいくように祈ってましたわ。だけど、あの男もつかまった時にはふしぎがったでしょうね」

「われわれだって驚きましたよ。手配写真の殺人犯と思ってつかまえたら、やつだったのですから」

彼女は街角に張り出してある凶悪犯人の顔を青年のうえにのせたのだ。青年も殺人犯としてつかまるより、やはり単なる脱走犯人としてつかまるほうを好み、すべてを自白したのである。

「しかし、市民のみなさんが、あの手配写真をこれほど熱心に見て、捜査に協力してくれているとは知りませんでした。われわれも心強く思えてきました」

警官はうれしそうに言ったが、彼女は首をふった。

「熱心に見てるのはあたしぐらいでしょうよ。お仕事の参考資料ですもの」

鋭い目の男

そこは薄気味わるく、どことなく異質な雰囲気にみちたバーであった。場末の小さなビルの地下にあり、せまく、汚れていて、うす暗かった。

金を払って酒を飲み、ひと時を楽しもうとする客なら、こんな店に来るはずはない。それに、入口にはネオンひとつついていないのだから、店のほうでも積極的に客を呼ぼうとしていないことを示していた。

店のなかには、私を含めて三人の男がいた。一人はカウンターのなかのバーテン、もう一人は私から少しはなれた椅子にかけている客。いずれも目つきのよくない、油断のならない表情で、はらではなにを考えているのかわからないようなやつらだった。

もっとも、私だってどっちかと言うと、あまり人相のいいほうではない。だからこそ、この危険にあふれた仕事に乗り出すのに適任だったのだ。

「おい。いいほうの酒をくれ」

私はからになったウイスキー・グラスを指でちょっと押し、あごの先で洋酒のならんだ棚をさした。バーテンはそこから、高級なレッテルのはってあるウイスキーのビンを取り、黙ったままグラスについだ。

私はそれを口にした。液体が舌の上にひろがるにつれ、私の敏感な舌は、そのなかに含まれている異質なものを感じとった。

あきらかにニセの洋酒である。しばらく鳴りをひそめていたニセの洋酒が、このごろまた出まわりはじめた。私は国税関係のその方面の係官。ニセ洋酒の摘発をすべく、ひそかに捜索を進めてきたのである。

酒の値段の大部分が税金であることの、いいか悪いかは別問題。善良な人びとがまじめに税金を払っているのに、一方でヤミの洋酒を扱い、それをのがれて不当な利益をあげている者のあることは、社会正義の上からも許せない。

私は進んでオトリとなった。オトリとなることの善悪もまた別問題。いまはそんなことを言っている時期ではない。そして、やっとこの小さなバーがヤミ酒の取引きの連絡場所であることをつきとめ、乗りこんで待ちかまえることになったのだ。

私は腕時計をちらとのぞいた。

「おそいな。どうしたのだろうか」

こうつぶやくと、バーテンは目を光らせながら、ぶあいそに答えた。

「もうすぐ来るでしょうよ」

しばらく前、私は身分をかくし、密造の洋酒を大量に売りたい、といううわさをばらまいた。うまくその網にかかってくれる者があらわれれば、ヤミ酒がどの方面に流れ、どんな連中が不当な利益をあげているかをつきとめることができる。

長いあいだの忍耐がむくわれ、きょう、ここで取引きの相手と会う手はずにこぎつけた。どんな相手なのだろう。

その時、コンクリートの冷たい階段に足音がした。目をやると、彼の全身がやがてあらわれた。やはり、目つきのよくない男だった。約束の相手はこの男なのだろうか。どうも手ごわそうなやつである。

私は右の小指で自分の鼻を押えた。これが合図。相手はじろりとそれを見て、左手で自身の耳たぶをつまんだ。合図は一致した。

相手は警戒にみちた表情のまま、私のそばの椅子にかけた。緊張した空気があたりを支配した。

相手は決してくみしやすい男ではあるまい。それに、もう一人の客も、バーテンも一味である可能性は大きい。二人がこっちに全神経を集中しているらしいのも、私の気のせいだけではなさそうだった。

注意しながら、こっちのさぐりたいことをすべて聞き出し、そしてここを脱出しなければならないのだ。

「ところで……」

と、私はさりげなく切り出した。相手はそれに応じた。

「さっそく、話に移りましょう」

私は相手の服の一ヵ所に、妙なふくらみのあることに気がついた。その大きさから、拳銃にちがいない。私は心のふるえを声に出さないよう注意した。

「どれくらいご入用です。とりあえず動かせるのは、三十ダースですが」

「では、すぐ渡していただきましょう」

と、相手は身を乗り出してきた。

「よろしい。しかし、先に代金をお払い下さい」

「それはだめです。品物を見ないうちは払えません。わたしの得意先は一流の店ばかりです。変な味だったりしたら、いっぺんにしくじってしまいます」

「では、その店の名を教えて下さい。それをうかがえば、信用して品物をさきにお渡ししましょう」

「とんでもない。それはしゃべれませんよ。そんなことをしたら、あなたが自分で売りつけようとするでしょう。品物をいただくのが先です」

「いや、品物を渡した、金にならなかったでは、わたしが仲間に対して言い訳できません。あくまで金が先です」

相手の得意先は聞き出せそうにないので、金を出させることに目標をかえた。金を出せばそれを証拠として、警察に協力をたのみ、自白させるのだ。

われわれは疑い深い目をむけあい、水かけ論をしつっこく続けた。私は架空のヤミ酒をたねに、なんとか相手に金を出させなければならないのだ。

思わず声が高くなり、もう一人の客もバーテンも、こっちに不審の目をそれとなくむけてい

る。もはや、にっちもさっちもいかなくなり、すべては行きづまって、形勢は不穏になってきた。

私は覚悟をきめ、危険を承知で相手に飛びかかり、組み伏せようと思った。

だが、その時、相手は言った。

「きりがない。場所を変えて話そう」

「よし。だが、金をもらわないと、品物は渡せないぞ」

「酒のことではない。いままでの会話は全部、小型テープで録音した。じつは、おれはこういう者だ」

と、相手は黒い手帳を示した。

「警察官か」

「ああ、私服だ。話のつづきは警察でゆっくり聞かせてもらおう」

「まってくれ」

私はあわてて、ポケットの役所の身分証明書をひっぱり出した。われわれは苦笑いしたが、おたがいにこのままでは帰れない。すぐにつぎの行動を話しあった。

「しかたがない。だが、あの二人をしぼればなにか聞きだせるだろう。手伝ってくれ。わたしはあの客をつかまえる」

「いいですとも。わたしはバーテンのほうを」

しかし、二人はあまり抵抗もせずに、おとなしくつかまった。その理由はすぐにわかった。も

う一人の客は私立探偵であったのである。衛生関係の官庁から依頼され、不純物の混入しているヤミ酒の密造所をつきとめるべく、ここに網を張っていたのだ。

そして、たのみのつなのバーテンは、ある新聞社の社会部の記者。ヤミ酒の全容をあばくため、バーテンになりすましてここに潜入していたわけである。

われわれ四人は、おたがいの鋭い目を見かわし、しばらくのあいだ、むなしい笑い声を響かせた。

再認識

「おい、ちょっと来てくれ」
社長が出勤してきたらしく、社長室からどなり声が響いてきた。私は勤続三十年の老社員。そのためか、社長は私を呼ぶ時に、とくに大声をはりあげる。大声のときは、私が呼ばれた時なのだ。
「はあ、ただいま……」
私は答え、背を丸めた姿勢で、のそのそと社長室に入っていった。
「なにをぐずぐずしている。呼ばれたらすぐに来い。だいたい、おまえはやることがのろまだ。そして、ぼんやりだ。それを改めないと、くびだぞ」
また、この言葉だ。いままでに限りなく聞かされてきた。だが、これだけはいつになっても免疫にならない。
「はあ。わたしはのろまで、ぼんやりで、このままではくびですか」
と私はおどおどした声で聞きかえした。
「そうだ。しかし、いま呼んだのはそのためではない」
「なんでございますか」

「この部屋のようすを見てみろ」
社長は立ったまま、あごの先を横に振り、部屋のなかを示した。
「どうかしましたのですか」
「どうもこうもない。わしが社長室に入ってみると、なかがこのように荒らされていた」
社長は大またに、ゆっくりした足どりで、じゅうたんの上を歩きまわりながら、ほうぼうを指さした。
机の引出し、ロッカーの扉などが、半ば開いたままになっている。
「なるほど。ただごとではありませんな」
「机の引出しに入れておいた、まとまった札束。棚の上の高価な置時計。ロッカーのなかの舶来のゴルフ道具。こういった金目のものばかりがなくなっている。泥棒にやられたにちがいない。おまえはすぐに警察にとどけに行ってくれ」
社長は命じたが、私はあたりを見まわし、こう言った。
「はあ。しかし、そう急ぐことはないと思います。もしかしたら、これは内部の事情にくわしい者の犯行かもしれません。社内から犯人を出しては、会社の信用にもかかわりましょう。とどけ出る前に、いちおう、少し調べてからのほうがよろしいでしょう」
「それはそうだが……」
と、社長はうなずいていたが、やがて私に聞きかえした。
「……おまえにしては気のきいたことを言うではないか。なんで事情にくわしい者のしわざらし

いと考えたのだ」
「ほかの部屋は、どこも荒らされておりません。単なる泥棒なら、手当りしだいに荒らすでしょう。ですから、この部屋を社長室と知っている者のしわざにちがいありません」
「うむ。おまえの言うのにも一理あるな」
「いかがでしょう。すぐそのことに気がついたのですから、わたしに対して、のろまという言葉を、こんごお使いにならないようお願いしたいのですが」
「いいだろう。これからはおまえを、のろまとは呼ばぬ」
「ありがとうございます」
「しかし、だからといって、犯人は内部のものと断定はできまい。たまたま忍び込んでみたらこの部屋だった、という場合もあるではないか」
そこで、私は窓を指さした。
「社長は窓から侵入したとお考えのようです。しかし、よくごらん下さい。窓にはこのように錠がおりています」
社長は窓に近より、そのことを確かめた。
「たしかにその通りだ」
「外部から忍び込むのなら、この窓のほかにありません。犯人はここから出入りしたのではありません。ここに気がついたのですから、ぼんやりという形容詞も取り消していただけませんか」
「うむ。取り消してもいい」

「ありがとうございます」
私は喜びの声をあげた。社長はタバコに火をつけ、首をかしげながら、また歩きまわりはじめたが、とつぜん叫び声をあげた。
「いや、やはりなにも取り消さんぞ。おまえはやはり、のろまで、ぼんやりで、その上、くびだ」
「なぜでございますか。わたしの意見がまちがっているとでも……」
「わしはさっき、自分の鍵(かぎ)でドアをあけて部屋に入った。すると、このドアの鍵を持っている者が犯人ということになる」
「そういうことになりましょう」
「わしのほかにその鍵を持っている者といえば、おまえではないか」
「はあ。でも、それはわたしのほかにも……」
「なるほど、おまえはそう思っていたかも知れん。だが、わしはおまえならたいして悪いこともできまいと思って、予備のただ一つの鍵をおまえにあずけておいたのだ。まったく、なんというやつだ。盗みを働いたうえ、その罪をひとに押しつけようとするとは」
「はあ」
「はあではすまんぞ。おまえは自分の存在を再認識させようとして、こんなことをたくらんだのだろう。そして、さっきからしきりに推理らしきことをやって見せた。だが、それが完全な底抜けで、自分の犯行を白状してしまった」

「はあ……」
「世の中で、おまえのようにのろまで、ぼんやりはおるまい。こんどは本当にくびだ。さあ、持ち出した金と品物をかえせ。だが、気持ちはわからんでもないし、なが年つとめてきたのだから、盗んだ物をかえせば、警察ざただけはかんべんしてやる。それにしても、おそるべき悪事を考えついたものだな」
「はあ。しかし、わたしに、もうひと言……」
「なんだと、こんな大それたことをしておいて、そのうえ言いぶんがあるのか」
「社長はわたしに対して、のろま、ぼんやり、くびの三つの言葉をお使いにならないようにお願いします」
「どうした。わしの言ったことがわからんのか。それとも気でもちがったのか」
「とんでもありません。わたしの頭は珍しくはっきりしております」
「なにをぶつぶつ言っているのだ。いいかげんにしないと、気の毒だが警察に知らせなければならんことになる」
　机の上の電話機にのびた社長の手を、私は押しとどめて、
「わたしがここから持ち出してかくした品物のなかには、その引出しにあった物も含まれておりますよ……」
　と、机のいちばん下の引出しを指さした。それを見た社長は、電話機から手をはなし、まっ青な顔になった。

　これまでの長いあいだ私を苦しめていた、あのいまいましい三つの言葉。のろま、ぼんやり、くびの三つを、これからは大声で聞かされないですみそうだ。まことに幸運と言わなければなるまい。
　昨夜、私がこの計画をたてて社長室を物色ちゅう、その引出しのなかから、脱税に関する詳細な帳簿があらわれてきてくれたのだ。

目撃者

S氏は心に大きな悩みを抱きながら、夕ぐれの街をぼんやりと歩いていた。S氏は五十歳をちょっと過ぎた年配で、ある会社の部長をしていた。恵まれた地位にあった。

また、からだも健康で、見たところは困った問題など、どちらかと言うと、少しも持ちあわせていないように思える。しかし、気をつけて見ると、動作や表情にどことなくそれがあらわれていたのかもしれない。

「もしもし、だんな……」

二、三回、このような声を聞いたので、彼は足をとめ、ふりむいてみた。すると、道ばたに店を出している易者が手まねきをしながら呼んでいた。

「え……」

と、つぶやきながら、S氏はあたりを見まわしたが、近くには人影がなく、呼ばれたのは自分のことらしいと知った。易者は少し声を高めた。

「そうですよ。いかがです、だんなはなにか、大きな悩みをお持ちのようにお見うけしますが」

S氏は驚いたような顔つきになった。

「ああ、その通りだ。それにしても、よくわかるな」

「そこは商売ですからね。もっとも、現代では、悩みを持ってない人などいませんから、こう声をかけると、たいていの人は足をとめます」

「なるほど。うまくひっかかったわけだな。だが、なかなか面白いことを言う人だ」

S氏は苦笑いしながらも、歩みよってみた。

「しかし、だんなはふつう以上の悩みをお持ちのようですね。なにか重大なことへの決心をつけかねているようすです。ちがいますか」

「ああ、それはたしかだ」

S氏はため息をつきながら、うなずいた。

「ひとつ、ご相談にのりましょうか。わたしは商売がら、人生の裏側にもだいぶ接してきました。おそらく、お役に立つと思います」

「それはありがたいが、わたしの考えていることとは大それたことだから、とてもひとに手伝ってもらうわけにはいかないだろう」

「どんなことです。お話ししてみませんか。お名前まではお聞きしませんから、その点はご安心でしょう」

S氏はしばらく考えていたが、やがて話しはじめた。

「それもそうだ。では、打ちあけるかな。じつは、わたしは勤め先の会社で、わりといい地位にある」

「けっこうなことですな」

「家庭には妻と、大学生の息子とがある」

「それもけっこうではありませんか」

「しかし、いままで家族に甘すぎたのだ。二人とも金使いが荒くて困っている」

「それはいけませんな。ひとつ、厳しくなさらなければ」

「だが、わたしは妻子を心から愛しているし、いまさら引きしめるわけにもいかないのだ。もっとも、収入がそれにともなっていればいい。しかし、その釣り合いがとれず、借金が少しずつかさんで、身動きがとれなくなってきた」

「ははあ、結局は金銭問題ですね」

「そうだ。その穴埋めをしなければならない」

「それで、その目当ては……」

「ない。いや、ないことはないのだ。会社の金庫には金がある。だが、忍びこんでそれを持ち出すと、疑いは当然、わたしにかかってくる。うまい方法があればいいのだが」

「なるほど。むずかしいところですな。だが、方法もないことはありません」

「なにか、いい案でも……」

と、S氏は身を乗り出した。

「ええ。わたしがアリバイを作ってあげます。わたしがべつな場所にいて、そこで起こったことを全部メモにとってあげます。それを暗記なされば、その時刻にそこにいたと主張できましょう」

「ちょっと面白い方法だな」

「お安く引き受けてあげましょう。では、いつにしましょうか」

「よし、すぐにはじめよう。場所はどこでもいい。そうだ、ここにしよう。三十分ばかり、ここに立っていたことにしよう。そのあいだに起こったことを、全部メモにとっておいてくれ」

「よろしゅうございます」

S氏は金を払い、会社にとってかえし、かねての計画を実行に移した。

勝手のわかっている会社なので、どこから忍び込めばいいかを心得ていた。そして、金庫をあけにかかった。まえに小型の望遠鏡を使って、会計係がダイヤルを回すのをそっと観察しておいたため、その番号を知っていた。

S氏は札束をポケットに移すことができた。もちろん、疑いは内部の者にむけられるだろう。だが、易者の手伝いでアリバイを作っておけば、自分はまず疑いを免れることができる。

S氏は指紋を残さないように、注意して仕事を終え、ふたたび易者のところに戻った。

「おかげでうまくいった。お礼にもう少し金を払おう」
いまやS氏にとって、それぐらいは大した出費ではなかった。
「ありがとうございます。では、メモを。この三十分に起こったことが、すべて書いてあります。そうそう、少しはなれたところで、ちょっとした事件がありましたよ」
「なんだね、それは」
「ひき逃げです。その車はこの前をスピードをあげて逃げていきましたが、わたしはメモを取っていたので、すぐにナンバーを書きとめておきました」
「そうか、それはちょうどいいじゃないか。よし、わたしはすぐに警察に知らせに行こう。そうすれば、警察がアリバイを保証してくれる形になって、つごうがいい」
S氏は、さっそく近くの警察に立ち寄った。
「いま、ひき逃げを目撃したので、ていねいに報告にまいりました」
警官は予想していた通り、ていねいにS氏を迎えた。
「それはそれは、わざわざ報告においで下さって、ごくろうさまです。みなさんが、こう協力的だと、どんなに助かるかわかりません。で、場所と時刻は……」
「いまから二十分ほど前、この先の人通りの少ない道路です」
「それはありがたい。さっき事故の報告がありましたが、手がかりがなく、弱っていたところです。それで、その自動車の特長かなにか……」
S氏はメモを取り出し、それに目を走らせながら答えた。

「忘れないように、すぐにメモしておきました。黒ぬりの車です」
「ナンバーはどうですか。それがわかるといいのですが」
「もちろん、わかっていますとも。ええと……」
S氏はそれを読もうとして、ふいに言葉をつまらせた。その数字は、ねだられるままに買ってやった、息子の自動車のそれだったのだ。

報告

玄関にベルの音がした。
長椅子にもたれ、一人でぼんやりとテレビをながめていたエス夫人は、ものうげに立ちあがってそのスイッチを切り、来客を迎えに出た。
「どなたでしょう」
「さきほどお電話をいただき、興信所からまいったものでございます」
と、鞄を手にしたまじめそうな青年が、礼儀正しく答えた。
「さっそく来ていただけたわけね。さあ、おあがりになってちょうだい」
夫人に案内されて応接間に通された青年は、あたりを見まわしながら、感嘆の言葉を口にした。
「すばらしいおすまいでございますね」
広々としたその部屋にはあらゆるものがそろっていた。外国製の大型のヒーターは、すみずみまで適当な暖かさをいきわたらせていた。壁には美しい抽象画が飾られ、床には厚いじゅうたんがひろがり、そのすみのほうではシャム猫がおとなしくねそべっていた。
「ええ、主人がかせいでくれるので、なんとか……」

と、彼女はシャム猫のようなスマートな身ぶりで、青年に椅子をすすめた。彼はそれにかけながら、
「おたくのご主人がうらやましくなりました。奥さまのように若く、お美しいかたと結婚でき、このような生活ができるとは。わたしなど、いつになったらそんな身分になれるものやら、わかりません」
と、しばらく羨望の表情を示していた。だが、やがてわれにかえった。
「ところで、ご依頼なさる調査とは、どのような事件でございましょうか」
「じつはね、主人の素行を調べてほしいの」
それを聞いて、青年は意外そうな声をあげた。
「えっ。ご主人は奥さまのことを愛していらっしゃるのではないのですか」
「それは愛してくれているわ。欲しい物はなんでも買ってくれるし、使いたいお金は、使い道も聞かずに、なにも言わずに渡してくれるの。心から愛してくれていることはよくわかっているわ」
「それなら、なにもお調べにならなくても結構ではございませんか」
「だけど、女というものはね、愛されているのが自分一人でないと満足しないものなのよ」
「と、おっしゃいますと、なにか心当りでもおありで……」
「ええ。時どき帰りがおそくなるの」
「それはお仕事かなにかで、仕方のない場合もございましょう」

「でも、どんな仕事かはっきりしないのよ。聞いてみても、大切な仕事だとだけ答え、言葉を濁してしまうし、どうも心にやましいことがあるようなようすなの。気になってしようがないわ」

「なるほど」

「きっと、ほかに好きな女でもできたのじゃないかと思うわ。主人のように金まわりがいいと、そんなこともあるかもしれないでしょう」

「しかし、奥さまのようなかたがいらっしゃるのに、浮気などなさるとは、わたしには考えられないことでございます」

「だけど、あたしには気になるのよ。主人の心のなかに暗がりが残っていてはいやなの。それに光をあて、さっぱりしたいわ。ひとつ、調べていただけないかしら」

「それがわたしの仕事ですから、ご依頼とあればお引きうけいたします」

「ぜひお願いするわ」

二週間ばかりたったある日、興信所の青年は、エス夫人に報告をもたらした。

「お待たせ申しました、やっと調査がまとまりました」

「ずいぶんかかったのね。それで、主人の浮気の相手はどんな女だったの」

彼は鞄から書類を出した。

「この報告書をごらん下さればおわかりになりますが、浮気ではございませんでした」

「じゃあ、なんだったの。早く見せてちょうだい。あら、その前に費用をお払いしなくてはならないわね」

「いえ、ごらんになってからでけっこうです」

夫人はそれを受けとった。そして、目を走らせるにつれ、美しい顔は複雑な表情に変っていった。

「ご主人は、やはり大切な仕事をなさっておいででしたね」

と青年の言う通りだった。だが、それはあまり立派な仕事とは言えないものであった。人の弱みにつけこみ、毎月いくらかずつを恐喝しつづけるという仕事であった。

「こんなことなら、知らないでいたほうがよかったわ」

と低くつぶやく夫人に、青年は言った。

「奥さまの愛情をつなぎとめておくため、ご主人はこのお仕事をなさっていらっしゃるようです」

「そうだったのね。疑ったりして悪かったわ。あたしのために、こんな仕事までしてくれていたとは気がつかなくて」

「ところで、費用のことでございますが」

「それはお払いするわ」

「いかがでしょう。これから毎月、定期的にいただくわけにはいきませんでしょうか」

青年の提案に、彼女は驚いた声をあげた。

「なんですって」

「わたしは今まで、世の中にこんなうまい仕事が存在するとは知りませんでした。わたしもぜひやってみたくなりました。そこで、手はじめに、こちらさまからとりかかろうと考えたわけです」
「とんでもない話だわ」
「しかし、ご主人のお仕事のことが世間に知れたら、あまり体裁のいいことではございませんよ。警察ばかりでなく、税務署もほってはおかないでしょう。それを秘密になさっておくため、いくらかお払い下さってもよろしいでしょう」
「そんなことを言ったって……」
「いえ、わたしは無理な額は申しません。すべて調べてあるのですよ。奥さまはご主人にいくらでもお金をねだれるのですから、その一部をまわしていただけばいいのです。それで、なにごとも順調にいくと思いますが。それとも、いまの生活が崩れてもいいとお考えで……」
エス夫人は椅子にかけたまま、部屋のなかを見まわした。その答えは考えるまでもないことであった。めぐまれた今の生活とは別れられるものではない。それに、自分だけを愛してくれる主人とも。
「しかたがないわね。おっしゃる通りにするわ」
と、力なくうなずくエス夫人を見て、青年はうれしそうに声をあげた。
「おかげで、わたしもやっと結婚できそうです。奥さまに匹敵するすばらしい女性と」

循環気流

「お忙しいところをおじゃましますが……」
とつぜん、私の会社にあらわれた男は、こう言ってあたりを見まわした。私は小さな貿易会社を経営している。
「どなたさまでしょうか」
「警察のものだ。ちょっと調べたいことがある」
男は黒い手帳のようなものを出した。それは制服は着ていないが、彼がまさしく警察の関係者であることを証明した。
「な、なんのご用でしょう。け、警察のかたとは……」
身に覚えがあろうが、なかろうが、こんな場合にはだれだって、しどろもどろにならざるを得ない。
「じつは妙なうわさを耳にしたのだ。この会社で、なにか不正な物を輸入しているらしいという話だ。そこで、念のために調べておきたい。倉庫にある輸入した品物を、ひとわたり見せて欲しい」
「よろしゅうございます」

私は彼を倉庫に案内した。理屈をこねたり、令状を見せろ、などと断わったりすると、ろくな結果になるものではない。

電灯をつけ、倉庫のドアをあけた。なかには、まだ荷ほどきをしていない、着いたばかりの箱が大量につんであった。彼はその箱に目をとめ、指さした。

「あの箱は……」

「わたしどもの扱っている商品です。だけど、べつに怪しい物など、入っていやしませんよ。麻薬のようなものには、わたしのようにまじめな商社は耳さえかしません」

「まあ、そんな言い訳はいいから、あの箱をあけて、中身を見せてくれ」

「はい。しかし、全部をあけるのはたいへんです。どの箱も中身は同じですが、どれにいたしましょう」

「そうだな。では、この上から三番目の箱にでもしようか」

彼は私に、箱の一つを指で示した。

「わかりました。いま、おろしましょう」

「手伝おうか」

「いや、一人で大丈夫です」

私は踏台を持ってきて、その指定された箱の荷造りをほどき、ボール箱のふたをあけた。

「ほら、怪しい物などではありません。ただのカンヅメですよ」

箱のなかでは、カンヅメの上の丸い部分が、行儀よくきっちり並んでいる。だが、彼は、

「しかし、どうも不審だ」

「な、なにがご不審なのです」

「いまの動かし方を見ていると、実に軽々としていた。そんなに軽いカンヅメは、見たことがない。なかになにが入っているのだ」

「なんにも入っていません」

「なんだと、ばかにするな。そんな物を輸入して、さばけるはずがない。いよいよ怪しいではないか」

「いえ、ほんとにからです。しかし、売れますよ」

私は彼に手にとるようすすめた。彼はその一つを引き出し、手のひらに乗せ、お手玉のように、ちょっとはずませた。そして、変な顔をしながらうなずいた。
「なるほど、手ごたえがない。だが、こんな物をだれが買うのだ」
私はおもむろに説明した。
「これが外国でいま流行している、空気のカンヅメです。パリの空気のカンヅメ、アラスカの新鮮な、ほこりのない空気のカンヅメなど、お聞きになったことがおありでしょう。旅行者のおみやげ用が主ですが、わたしはそんな会社と提携し、大量に輸入をはじめたのです。いまは外国ばやりですからね」
「なるほど、聞いてはいたが、これがそうか」
相手が感心したのに乗じて、私は少しはったりをきかした。
「そうなのです。むこうでは、近く宇宙のカンヅメが作られるそうですよ。大気圏外の空気のカンヅメです。家庭にいながらにして、宇宙のにおいをかげるのです。しかも、カン切り一つあればね。これは売れましょう。わたしの会社で独占輸入するつもりです」
私は煙に巻いたつもりだったが、相手はさすがに慎重だった。
「だが、これはどこの空気なのだ。レッテルには女の顔が描いてある。見たことのある……」
「マリリン・モンローですよ。これは彼女の寝室の空気です。あこがれのスターと同じ空気を吸ってみたい人に売れるのです」
だが、相手は目じりを下げなかった。

「どうも信じられん。カンのなかに麻薬の包みでも、テープで止めてあるのでは」
「弱りましたな。では、あけてみましょう。モンローのにおいをおかぎ下さい。本当は電気を消し、暗くしたほうが感じがでるものです」
私はポケットからカン切りを出した。だが、彼は電灯を消させなかった。
「明るいままであけてみせろ。それから、まさか毒ガスなんかが出てくることはあるまいな」
「疑い深いんですね。では、わたしもいっしょににおいをかぎましょう」
二人の顔のあいだで、カンがあけられた。シャネルの五番という香水のにおいがかすかにした。私は彼に笑いかけた。
「いいでしょう、このにおい。彼女はいつも、このにおいだけを身につけて眠るのです。モンローのそばで眠っているような気になるでしょう。目をつぶってごらんなさい」
しかし、彼はつぶるどころか、さらに目を光らせて、なかをのぞきこんだ。
「なるほど、なかは確かにカラだ。そうすると、このカンそのものが怪しいことになる」
「ほんとに疑ぐり深いんですね」
「職務だからな。このカンに金でも含まれているのではないかとも思える。このごろは貴金属の密輸入もあるからな。これを分析にまわして、調べてみたい」
私はいささか憤然とした。そこで、レッテルをはぎとり、そのカンを相手につきつけた。
「じゃあ、お持ちになって、よく調べてみて下さい。ただの鋼鉄ですよ。金、銀、チタン、ウラニウムなど、含まれていないことがよくわかるでしょう。わたしもへんに疑われながら商売をつ

づけるのは、あまりいい気持ちではありませんからね」
　相手はそれをポケットにおさめた。
「まあ、そう怒らないで下さい。これが仕事なんですから。では、いちおう分析はしてみます。ただの鉄だったら、疑いはすべて晴れます。どうもご迷惑をかけました」
「なにぶんよろしく」
　と、私は彼を見送り、ほっとして冷汗をぬぐった。そして、いま丸めて捨てたレッテルを拾いあげ、ていねいにしわを伸ばした。これがいちばん大切なものだ。このレッテルをある溶液につけ、印刷をおとすと、下から百ドル札があらわれてくる。このヤミドル紙幣を海外旅行者に高く売りつけるのが、私の商売なのである。

専門家

　どなたでも、殺人をなさった時、あるいはこれから殺人をなさろうとする時、いちばん頭を悩ますのが死体の処理についてだろうと思う。そんな場合は病気と同じこと。素人の手でへたにいじくらないほうがよろしい。事態を悪化させるばかりである。
　素人のかたは、なれていないくせに、なんとか自分だけで始末なさろうとする。汗を流し、胸をどきどきさせ、物音も聞こえないのにきょろきょろ見まわし、ため息をつく。ぐずぐずしてはいられないので、捨てやすいように包丁で切ろうなどとなさる。そして、切りはじめてから流れ出る血があまりに多いのを知って、あわてふためく。切れば血が出るといった常識さえ、かっとなると忘れてしまうのだ。ますます収拾のつかないことにしてしまう。私のようなベテランから見ると、いじらしくてはらはらする。
　そう、私はこの道の専門家。そんな時には、ためらうことなく、すぐ私にご連絡下さい。決して悪いようにはいたしません。悪いようにしないどころか、この分野では匹敵するものがない。芸術的ともいえる熟練した技術、絶対に秘密裏に行うという長い信用を誇っている。それに、最新の科学設備を持ち、スピードの点でもどこにも負けない。ご利用いただいたかたがたには、あとあとまで感謝されている。失敗したことは一回もない。

しかし、私が堂々とそんな看板をかかげているのでないことは言うまでもない。あくまで副業。本業のほうはご覧のとおりR葬儀社。死体を扱っても落ち着きを失うことがないのが、これでおわかりのことと思う。それに霊柩車だって持っている。これに乗せれば、死体をゆうゆう運ぶことができる。
　そして、お寺に隣接して買って、墓地らしい恰好に作りあげてある私の土地に埋めてさしあげる。また、海に沈めて欲しい、ブタのえさにして欲しいなどと、特にご希望のある時には、それにもそうことができるのはもちろんである。
　だが、みなさんは、それより霊柩車がやってきてはおかしい場所の時にはどうするのか、といった疑問を持つと思う。その準備もすべて整っている。私の持っている道具箱には、各種の道具が入っているのだ。
　たとえば、ビルの屋上で女の子を殺してしまった時。かけつけた私はまず彼女の死体を裸にする。そして、道具箱のなかからこの噴霧器を取り出すのだ。これは白い塗料を含んだ液体プラスチック。まもなく死体は乾いて白くツルツルになる。私はその顔の上にあらためて目鼻を描きあげる。マネキン人形そっくりの表情に。
　これを肩にかつげば怪しまれることなく街を運べる。時には警官に、
「困りますね、せめて布ででも包んで下さいよ」
と注意されるから、そのための布も用意はしてある。
　もっとも、ふとった男ではそうもいかない。そんな場合はプラスチックにまぜる塗料を灰色に

して石像にしたり、黒っぽくして銅像にしたりする。こうしてトラックに積めば大丈夫だ。不審の目でながめられた時の用意もある。道具箱のなかのこのハンマーでたたけばいい。石像の時にはガチッと鳴り、銅像の時にはカーンと音をたてる。もちろん、ハンマーに連絡してある録音拡声機の出す音だから、音を出しちがえたら一大事だ。しかし、そこは専門家、そんな失敗はするはずがない。
　屋内の死体の場合はさらに仕事がやりやすい。部屋にはたいていコンセントがついているからだ。コードの一端をさしこみ、この無音電気ノコギリを使う。これは腕を切断するのに五秒、胴で十秒という高速ノコギリ。血が流れでることには変りないが、それを防ぐ装置もついている。完全な計算の上に設計されたハネ押えがこれだ。血しぶきのハネを防いでくれる。また、同時にノコギリの両側からは、液体プラスチックが流れでてくる。これは切りやすくするための潤滑油ではない。切るはしから瞬時にかたまり、血を止めるのである。早くいえば高性能の水バンソウコウで、切断面に付着するや、たちまち乾き、血はまったく出てこない。
　こうして死体を適当な大きさの部分品に分ければ、どこへでも輸送できるのだ。あとは一切の臭気を消す薬品を、噴霧器であたりにまき散らせば仕事は終りだ。
　特殊な場合のため、道具箱のなかにはバーナーもある。短時間のうちに死体を灰にしてしまう超高熱バーナーだ。だが、へたに使うと火事をおこしかねない。そのうちこの欠点を改良し、みなさんのご用命に役立たせたいと思う。
　どうです。専門家となるとちがうでしょう。あ、電話が鳴っている。またお客らしい。受話器

をとると、やはりそうだった。
「例の仕事をたのみたいのだが」
「はい。承知いたしました。物はどこにあります」
「いや、まだだ。今夜十二時、公園の林のなかで殺すから、あとをたのむ」
「はい。たちどころに片づけます。ところで、どう始末いたしましょうか」
「いいようにやってくれ。おれのしわざとわからなければいいのだ」
「はい。その点はご心配なくおまかせ下さい」
私は金を銀行に払い込むよう指示し、その場所をよく頭に入れた。そして、夜になるのを待った。
だが、夜の公園というのは意外にむずかしい。自動車が入れないから霊柩車はだめだ。銅像にするのも持ち込むならいいが、運び出すとなると泥棒と間違われる。コンセントがあるはずはないし、バーナーも光が輝きすぎて目につきやすい。しかし、私は専門家である。
私は小さな鞄を持って公園に行った。なるほど、その場所には首をしめられた一人の男が倒れていた。私は噴霧器でまっ黒な塗料をまんべんなく吹きつけた。次に携帯用の水素のボンベを使い、小型の黒い気球をふくらませた。黒い死体をそれに結びつけると、星のない夜空にふわりと浮いた。私はヒモの端をにぎり、歩いて公園を出た。
大通りに出たが、街は闇に包まれ見つかる心配はなかった。酔っぱらいらしいのと二、三人すれちがったが、まさか私が上に死体を持っているとは気がつかないらしかった。

軽く歌を口ずさみながら歩いていると、ふいに気球が動かなくなった。
「これは変だ」
上をむき、目をこらしてその原因をたしかめてみると、気球のヒモがホテルらしいビルの二階のバルコニーにひっかかっている。私はヒモをつたって、バルコニーにあがった。
ヒモを外しながら、なんの気なしに部屋をのぞいてみると、なかではだれかがぐっすりと眠っている。そこでちょっと、いたずら心がわいてきた。死体を外し、窓をそっとあけ、なかに押しこんでしまったのだ。こうしておけば、だれかは知らないが罪をひきうけてくれるだろう。ひどい話だが、私にとってはお得意さまが第一である。
それにしても、まさかあの部屋に依頼主がとまっていたとはねえ。彼は目がさめたとたん発狂し、いまは神経科の病院のなかにいる。
だが、私はあくまで専門家だ。素人のみなさん方よりは手ぎわのいいことにまちがいない。安心してご用命下さい。いままでの商売のうち、失敗したことはこの一回だけしかない。

年間最悪の日

〈拝啓。いつも当社の製品をご愛用いただき、ありがとうございます。さて、このたびの懸賞で、あなたが特等に当選なさいました。とりあえず、お知らせいたします……〉

速達でとどけられた手紙のうえの、このような文面を見て、彼は自分の表情が、とけかけたソフトアイスのように変ってゆくのを感じた。

だが、彼はふと気がつき、笑いはじめるのを中止した。そして、壁のカレンダーをながめ、つぎにそばの新聞を手にして、こうつぶやいた。

「うむ。きょうが四月一日でないことはたしかだな」

毎年、エープリル・フールの日になると、彼はきまって悪友たちによって、いっぱい引っかけられることになっていたのだ。

昨年は夜になってほっとしたところを、電話で起こされて「見ろ。人工衛星が火事になって、宇宙で燃えているぞ」と知らされた。あわてて夜の道に飛び出し、空を見あげ、通りがかりの人に笑われる目にあった。

おととしは「だまされやすい男、という題で、きみが小説のモデルにされている」といわれ、何軒かの本屋をかけ回ってしまった。

その前の年は「殺し屋らしいのがねらっている」とだまされて、一日をものかげにかくれてすごし、そのまた前の年は「かわいい女の子から、ことづけがあった」という単純な手で、ひっかけられた。

記憶に残っている限り、四月一日は彼にとって、年間最悪の日だった。ことしこそは、と用心していても、悪友たちはつぎつぎと新手を考え出す。もともと、自分でも少しぬけていると思っているくらいなので、それは防ぎようがなかった。そのため、春先になるとびくびくし、いくらかノイローゼ気味になる。

だから、カレンダーと新聞だけでは、安心して喜ぶわけにはいかなかった。彼は電話機に近より、気象台を呼び出した。応答があった。

「お天気のことをおたずねでしょうか」

「いえ、きょうは何月の何日かを知りたいのです。日づけを扱っている役所はそちらでしょうか。きょうは四月一日でないかと思いましてね」

「それでしたら、ここでもわかります」

女の声は笑いながらも、答えだけはしてくれ、きょうが四月一日でないことが知らされた。

しかし、彼はなぜか信用できない気分だった。どことなく、うそのにおいがただよっている。

そこで彼は、電話のダイヤルをいいかげんに回してみた。そして出た、だれともわからぬ声にむかって聞いてみた。

「もしもし、きょうは何月の何日でしょう」

「いいかげんにしろ。こっちは忙しいんだ。クイズなんかの相手になってはいられない。からかっているのか、それとも、そっちの頭がおかしいんじゃないのか」

彼はあわてて受話器をもどし、しばらく考えていたが、やがてうなずいて、もう一度ダイヤルを回した。こんどはメモを調べ、行きつけの医者の番号を。

「先生ですか。わたしです……」

彼はつづけて自分の名前をいった。

「どうなさいました。急病ですか」

「そんなようなものでしょう。どうもきょうが、四月一日のような気がしてならないんです。どうしたわけでしょう」

「うむ、そうですな。春先ですし、少し疲れてもいるのでしょう。きっと、毎年おなじようにかつがれるので、それを気にしすぎたせいでしょうね。診察してあげますから、おいでなさい。ほっておいては、よくありませんよ」

彼は勢いこんで、つぎの質問をした。

「すると、先生。おかしいのはわたしの頭のほうだ、とおっしゃりたいのですね」

「ええ、まあ、いいにくいことですが、早くいえばそうです。きょうは四月一日ではないんですから」

「そうですか。それをうかがって、ほっとしました」

彼は電話を切り、さっきからおあずけになっていた笑いの表情を安心してひろげ、大声をあげ

た。

「ばんざい。そうこなくちゃいかん」

だが、この喜びの叫びは大きすぎ、彼の眠りを終らせた。夢を消し去るように目をこすり、彼は壁のカレンダーを見て、そして知った。いまが四月一日の朝であることを。

模型と実物

いくつもの時計が、夜の十二時をさまざまな音色で告げはじめた。ここはアール貴金属店。私はその店員で、今夜は宿直として、ただひとり店に残っている。

ふつうの宿直の晩なら、いまごろは宿直室でラジオの音楽に聞きいっているころだが、今夜はちがう。

開かれた金庫の前の床のうえに、だらしなく横たわったかっこうで、私は押し殺した話し声と足音とが遠ざかって行くのを聞いていた。まわりには置時計だの、洋銀製の優勝カップなどが散乱している。やつらはこんな物には目もくれなかったのだ。やつらの目あては、金庫のなかにあった純金製の飛行機の模型だった。

これはある航空会社が、こんど新しく就航する機種の宣伝のために、うちの店にそれとそっくりの模型を作らせたのである。そして、しばらくのあいだ、航空会社の了解のもとに昼間はショーウインドウに飾られ、まばゆい光を放っていた。

それがいけなかった。うちの店にも、航空会社のためにも、大いに宣伝にはなったのだが、なかにはこのように、なんとしてでも手に入れようと企てる者もでてくる。

もちろん、夜になると支配人がそれを金庫に移し、自分で鍵をかけることになっていた。だ

が、悪の専門家の手にかかっては、そんなことでは防ぎきれない。

「そろそろ起きてもいいだろう」

足音がまったく消え去ったのをたしかめ、私はこうつぶやきながら立ち上った。本当ならもっと長く倒れている約束だった。そして、そとに通行人の足音が聞こえたら、大きなうめき声をあげ、発見してもらわなければならないのだ。

しかし、そんなばかばかしい事など、できるものではない。私は電話機に近づいてダイヤルを回した。

「こちらは警察です。なにか事件ですか」

と、たのもしい調子の声が聞こえてきた。それに対して、私はあわてた調子で答えた。

「た、大変です。強盗にやられました。すぐに来て下さい。こちらはアール貴金属店です」

電話を切ってしばらくすると、パトロールカ

ーのサイレンが聞こえてきた。そのすばやさに、私はさらに信頼感を抱いた。かけこんできた警官は、すぐに質問をぶつけてきた。

「どうしました」

「はい。金庫のなかにあった、飛行機の純金の模型を盗まれました」

私は開いたままの金庫を指さした。

「ああ、いま話題の模型だな」

と、警官もそれは知っていた。たしかに宣伝の役にはたっているようだ。私がうなずくと、

「さあ、落ち着いて、事件のようすを話して下さい」

「落ち着いているわけにはいきません。手おくれになったら一大事です。そうなると、わたしの責任です」

私の言葉に、警官は聞きかえした。

「あなたは……」

「わたしは店員。きょうは宿直なのです」

「ところで、強盗は何人で、どこから侵入してきましたか」

「二人組でした。その裏口から入ってきました」

「しかし、鍵はかかっていたのでしょう」

「ええ。見知らぬ相手には注意しなくてはいけないのですが、勢いよくたたかれ、火事だ、と叫ばれたので、ついあけてしまいました。このままではわたしの責任です。それどころか、やつら

の一味と思われてしまいます」

警官はうなずき、疑い深く私をみつめた。もっとも、疑われても仕方ない。じつは私の手引きがあったからこそ、やつらも侵入できたのだ。

「ふむ。だが、非常ベルの装置もあるのだろうに」

「もちろん、あたりの品物をぶつけ、すきを見てベルを押そうとしました。しかし、相手は二人で、刃物を持っています。わたしはついに負け、刃物をつきつけられ、模型を入れてある金庫がどれだかを、教えなければならなくなりました」

「うむ。それで……」

「一人がわたしを見張り、もう一人は金庫をあけにかかりました。そいつは金庫破りの名人のようでした。用意してきたドリルで穴をあけ、針金のようなものをさしこみ、簡単にあけてしまいました。金庫がああしてあけられるものとは知りませんでしたよ」

まったく、やつの手ぎわは、うらやましくなるほどだった。私ではとても、ああうまくはいかない。

「あなたは黙って見ていたわけですね」

「刃物をつきつけられていたんですよ。やつらはなかの模型を見つけるやいなや、もう用はないとばかり、わたしの腹に一発くらわせました。わたしは床にぶっ倒れたのです」

「なるほど」

と、私が痛そうになでている腹を、警官は露骨な疑惑の目で見つめた。あまりいい気分ではな

い。私はそれを消し去るために声を高めた。
「早くやつらをつかまえ、品物を取り戻して下さい。ぐずぐずしていると、つぶしにされ、そうなったら手のつけようがありません」
「しかし、どこへ逃げたか、手がかりはまだつかめていないじゃありませんか」
「逃げた先はわたしが知っています」
「知っているって……。どうしてそれを」
「わたしは気を失ったふりをして床に倒れたのです。それを見て安心したのか、やつらは気を許して話しあっていました。少しでも動いたら殺されると思うと、こわさと痛さで、冷汗がびっしょり出ました」
やつらのかくれ家は、私も何度か訪れているのでよく知っている。
「どこだ。それは……」
警官の質問に私は正確に答えてやった。仲間を裏切ることに、心の奥のほうで良心の呵責(かしゃく)のようなものが、少しばかりうずいた。
だが、いまはそんなことを気にしている場合ではない。
やつらはあれだけの物を持ち去ったのに、私にはほんの少ししか分け前をよこしていない。あんな連中に対して良心なんかを抱いたら、抱くほうがばかと言うものだ。
私はかくれ家を教え終った。警官は私にむけていた疑いを、少しばかり解いたようだった。
「急いで追いかけ、あれを取りかえして下さい」

「よし。すぐ行ってみる」
警官の乗ったパトロールカーは、夜の街を走り去った。
サイレンを鳴らさないのは、相手に気づかれないためだろう。

「うまくゆけばいいが……」
私はしばらくのあいだ、くりかえしてつぶやきながら、落ち着かない気持ちで待った。やりそこなったら、とんでもないことになる。運命のわかれ道にたたずんでいる状態なのだった。
だが、やはり警察の活動はすばらしかった。やがて、さっきの警官が包みを片手にもどってきたのだ。
「どうでした。犯人は。品物は……」
私のせきこんだ言葉に、彼は答えた。
「犯人は二人とも逮捕したし、品物はこの通りぶじに取りかえした。やつらはだいぶ抵抗したが、われわれのほうが強かった。二人ともまだ気を失ったままで、車のなかにぐったりしている」
やつらがまさかと思って戸をあけ、警官とわかってあわてふためいたようすが目に見えるようだった。きっと、この模型だけは渡すまいと、必死の抵抗をしたのだろう。ばかなやつらだ。
「ありがとうございます。おかげでわたしも助かりました。品物がもどらなかったら、わたしもどうしていいかわからないところでした」

と、私は心からのお礼をのべた。私の表情には喜びの笑いがあふれた。
　警官の目には、私に対する疑いの影など、まったく残っていなかった。そればかりでなく、
「これもあなたの協力のおかげです。危険な状態にあったにもかかわらず、やつらの会話を沈着に覚えてくれていたからです。いずれ、逮捕への協力ということで、金一封がでることになるでしょう」
　と、言った。そして、包みをあけ、純金製の模型を私にさし出した。
「さあ、盗まれた品物です。金庫がこわれているのだから、ドアには厳重に鍵をかけ、朝まではだれも絶対に入れないようにするのですね」
「もちろん、こんどこそだれも入れるものですか」
　私はそれを受け取り、去ってゆく警官を見送った。念を押されるまでもなく、朝まではだれも入れはしない。
　ここからは私が出て行くのだ。さあ、急がなくては。早いところこれをつぶし、売りとばし、朝までに空港に行かなければならない。
　模型もいいが、だれだって外国に行ける本物の飛行機のほうが好きだろう。

老後の仕事

　指定された待ち合せの場所は、大きなビルの一階にある喫茶店だった。私はステッキを片手に、その入口にたたずんでのぞきこみ、それらしい人物を目でさがしたが、見あたらなかった。腕時計をのぞくと、約束の時刻にはまだ少し間がある。私はなかに入り、すみのテーブルの椅子にかけて待つことにした。
「なんになさいます」
　と給仕の女の子が聞きにきたので、
「暖かいミルクを」
　と私は答えた。本当はコーヒーのほうが好きなのだが、血圧や心臓によくないと聞いて、このごろは飲むのをひかえている。しかし、運ばれてきた、白く、甘いミルクを、私はのびのびと味わった。いままでにミルクをこれほど味わいながら飲んだことがあっただろうか。
　私は二、三日まえに仕事から手をひいたのだ。ふつうの会社なら定年とでも呼ぶのだろう。だが、そばの壁面に張りつけてある大きな鏡にうつっているように、私はそう老いこんでいるわけではない。としは五十歳。まだ働き盛りで通る年齢だ。しかし、私に近よって見ればわかるだろうが、白髪はめっきり多く、顔のしわも深い。私のやってきた仕事は、人の何倍もの気力と体力

を必要とし、たえまない緊張の連続であった。そして、このあいだ、なにげなく医者に見てもらった時に、血圧も心臓もなみ以上に老化状態にあることを教えられた。私はそこで、思いきりよく引退することにきめたのだ。

「まだまだお元気ではありませんか。わたしたちはあなたの手腕に、みな心服しております。ぜひ、もうしばらく、つづけていただきたいと思います」

　私の部下たちは、声をそろえてこう言ってくれたが、私の決意は変らなかった。

「そう言ってもらうのはうれしい。だが、人間であるからには、いつかは退かなくてはならないし、退けどきというものもある。一日のばしにつづけていたら、きりがない。これからは若いおまえたちでやってみてくれ。わたしは疲れたし、これからは、ゆっくりと人間らしい生活を味わいたいのだよ」

たしかに、私は働きつづけてきた。私は二十年あまり、密輸の仕事を指揮してきたのだ。言うまでもなく利益は大きかったが、非合法な仕事のため、一刻も気をゆるめることができなかった。いま思いかえしてみても、発覚寸前までいったことが何度あったか、とても数えきれるものではない。よくこれまで無事に切り抜けられてきたものだと思う。私は運がよかったのだろう。

　しかし、私の家族、つまり妻と息子といっしょに楽しくすごした日々などは、ほとんどなかった。私は仕事の上ではよい指揮者だったろうが、よい夫、よい父とは言えなかったようだ。充分すぎるぐらいの生活費を妻に渡していたとはいえ、それだけではいけないのだ。息子も来年は大学に入る。いままではかくしつづけてきたとはいえ、なにかの拍子に私の仕事を知ってしまわないとも限らない。息子だけは、まともな勤めについてもらいたいのだ。

　いまが引退のよい時期だろう。これからはすべてを切りかえ、家庭生活を味わいつづけたいものだ。まず、妻子をつれて旅行でもしてみるとしよう。どこに出かけたものだろうか……。

　目を閉じて、こう考えていると、ふいにうしろから肩をたたかれた。ふりかえると、中年の男が立っていて、私のステッキを指さし、

「ステッキをお持ちですね」

と聞いた。私が待っていた人らしい。私は聞きかえしてみた。

「ええ、じつは権利を買いたいと思いましてね。あなたでしょうか」

「はい。さようでございます。では、くわしいお話は事務所のほうで……」

と、私をうながした。彼の事務所はこのビルのなかからしく、私は彼とともにエレベーターに乗

り、上にあがった。そして、小さな部屋に案内された。
「どうも、せまい所で。しかし、わたし一人でやっておりますから、この程度で充分なのです」
と、彼は私に窓ぎわの椅子をすすめた。窓からは、道路を行きかう自動車を小さく見下すことができた。部屋の壁には書類棚が並べられてあった。私はそれに目をやりながら、用件を切りだした。
「聞くところによると、こちらである種の権利を売買なさっているそうで。そのことでおうかがいしたわけですが」
だが、彼はいちおう用心深かった。
「それはそれは。だけど、なんでまたこんな権利をお買いになろうとなさるのです。たしかに、わたしどもでは権利の売買の仲介はいたしておりますが、それが特殊なものであることは、ご存知の上でしょうね」
「それを知っての上でです。じつはわたしは今までやっていた仕事から引退したのです。これからは、ゆっくり人生を楽しむつもりです。しかし、まったくなにもしないでいては老いこむのも早い。そこで、貯めた金で、あまりからだを使わなくてもいい仕事をしようと考えた。例の権利が買えれば、ちょうどいいというわけなのです」
「ははあ、引退後の生活で、趣味と実益とを兼ねようとなさるのですね」
「まあ、そんなところです」
「しかし、恐喝の権利ですから、せっかくお買いになっても、なれない方には充分に利用できな

いものでございますよ」
「よく知っています。それくらいなら、わたしにできると思います。いや、わたしにできるこれからの仕事といったら、これくらいだと言ったほうがいいかもしれません」
私は自嘲をおびた笑い声をたてた。
「それならよろしゅうございます。わたしは売買の手数料さえいただければいいのですから、お客さまの過去については、これ以上お聞きするのはやめましょう」
彼は安心したようになり、一枚の紙をとり出した。それには細かい数字がきれいに書きこんであった。彼はそれを指で示しながら説明した。
「ここにたてに並んでいる数字が、恐喝によって定期的に得られる金額です。こっちの列がただいまの相場の金額です。そして、それぞれに並んだはじの数字が利回りというわけです」
「利回りにずいぶんちがいがありますね。なぜ、こんなに差があるのです」
私はまず頭に浮かんだ疑問を聞いてみた。
「ええ、相場はいろいろな要素できまってきますからね。たとえば根拠の薄弱な対象では、なかなか取り立てるのに骨が折れます。また、相手の財政状態が悪くては、これも取りにくいものです。こんなのは利回りはよくても、相場は安いわけです」
「株式の相場と同じようなものですな」
「ええ。しかし、株よりはるかに面白いと思いますよ。人生のありとあらゆる条件が要約されて、この時価がきまってくるのですから。わたしなど、一人でこれをながめていると、じつに楽

しくて仕方ありません……」

　彼はさらにいろいろな例をあげた。確実な相手でも、年をとり寿命の残りが少なくなってくるにつれ、相場が下ってくること。インフレ、デフレの影響。私ははじめてのぞくこの世界のことを、興味を持って聞いた。だが、彼は決して対象の名を言わなかったが、それは当然のことだった。へたにもらして、金を出さないお客に対象を荒らされては困るわけである。

　私はどれに決めたものかと首をかしげた。

「どれにしたものでしょうな。わたしとしては、さっきも言ったように、老後の仕事としてやりたいわけです。相場は高くても確実なのが欲しいですね。それに、いざという時には売りやすいといったものが。いや、ぜいたくな注文ですかな」

「そうですね。では、これなんかがお買い得と思います。いままでの持ち主が急にまとまった金を必要とし、急いで売りに出している権利です。そのために相場は安くなっていますが、相手は確実で、取り立ても簡単です。いまのあなたのご希望にぴったりと存じますが」

「ほんとに大丈夫だろうな」

「それはもちろんです。いいかげんな権利をお売りしては、わたしの信用にかかわりますから」

　そこで、私は小切手を切った。

「では、それを買うとしましょう」

　彼はそれに応じて、書類棚から大きな封筒をとり出し、私に渡した。

「このなかに恐喝に必要な書類一切と、その取り立て方法を書いたものが入っております。お読

みになればすべてわかるようになっております。お買いあげ、ありがとうございました。お気に召しましたら、新しくいろいろ取りそろえておきますから、またどうぞ」

　彼がくどくど言うのをあとに、私は急いでその部屋を出た。これからの新しい仕事の対象を早く知りたいからであった。

　私は人かげのない廊下で立ちどまり、そっと封筒をあけ、なかの書類をのぞいてみた。もしそばにだれかいたら、私の顔色が急変し、心臓の発作を起すところを見ることができたろう。その恐喝の対象は私の妻に関することであった。その子供が浮気の結果であることを、夫にかくしつづけるための。

悪魔のささやき

〈おい、おまえはこの手紙をふしんそうに読みはじめることだろう。そして、読み進むにつれ、顔色が変ってくることと思う。だが、途中で投げ捨ててはいけないぜ。もっとも、こういった手紙を途中までやめるやつもいないだろうが……〉

その青年は悪魔的な表情を浮かべ、便箋にこう書きはじめた。

彼は地方から出てきて、都会の小さな会社につとめ、つとめが終ると一人でこの下宿にもどってくる。このような青年にとって、都会という悪魔は恐るべき影響を及ぼしてくる。

下宿の部屋の片すみには、月賦で買ったテレビが置いてあるが、そのブラウン管のなかでは、一時間に何人かの割で人が殺されている。いくつもあるチャンネルの裏番組まで合計したら、一時間に延べ何十人になることもあるだろう。

たとえ、テレビがなかったとしても同じことだ。新聞の社会面を開くと、またも殺人。週刊誌を買えば、どの週刊誌にも殺人実話。小説を読んでみれば、殺人につぐ殺人、犯罪につぐ犯罪。道を歩けば大きな映画館のポスターの色刷りの絵、それには殺人、拳銃、拷問、戦争。どこもかしこも犯罪の密度がいっぱいにひろがっている。

もちろん、子供のころから、このような環境で順調に成長してきた青年ならば、

「あんなものは、みな絵そらごとさ。むかしのおとぎ話と同じに、一種の娯楽さ。考えてみれば、むかしのおとぎ話のほうがもっとひどい。かちかち山のウサギの残酷さなんか恐るべきものだ。やけどをさせたうえ、とうがらしをぬりつけ、容赦をしない。それにくらべたら、現代のほうがまだしもましというところだろう」

といった、ごく健全な考え方を持っているわけだが、この青年のように、片いなかから都会にあこがれてやってきた者にとっては、そうならない場合もおこる。つまり、まじめに考えてしまうのだ。

都会とは犯罪のいっぱいつまった巣ではないのだろうか。こう考えはじめたら最後、この妄想は頭のなかでしだいに大きくなってゆく。道を歩いている人が、みななにかしらの犯罪者に見えてくる。そして、なにも犯罪をおかしてない自分ひとりが、のけ者にされているように思えてくるのだ。

身なりのいい紳士は、

「おれなんか詐欺を何回もやっているんだぜ」

と、鼻の先で笑っているようだし、ふとった男は、

「汚職をしない者などあるものか」

と、腹のなかでつぶやいているようだ。肩をいからした青年は、

「人を殺して気にしていられるかい」

と、とくいそうだし、子供の手を引いた上品な主婦さえ、

「あなた、万引のスリルを、味わったことがおありになって……」
と、高慢そうに笑いかけているようだ。
ちくしょう、みなでおれをばかにしていやがる。彼はたえられない劣等感におそわれる。
「なにを、おれだって……」
と、彼は反発してみるものの、さて、なにをやったかとなると、なにひとつ思いつかない自分に気がつき、いっそうみじめになってしまう。彼は立小便すらしたことがないのだった。
なにかやらなくては。都会人のなかまに入るには、なにかやらなくては。この強迫観念は、悪魔の手によって、彼の心のなかで徐々に大きく育てられ、ついに便箋にこのような文句を書かせるに至ったのだ。
〈……いいか。おれにはどうしても百万円が必要なのだ。だが、すぐといっても無理だろうから、二日間の猶予をやろう。そのあいだに用意しておけ。いうまでもないことだが、警察には知らせるな。もし、警察に知らせでもしたら、おまえの子供の命をねらうからな。このことを忘れるなよ。いずれ、受け渡しの方法については連絡する〉
彼はあまりうまくない字でこう書き終り、その便箋を折りたたみ、封筒に入れ、封をとじた。彼はいくらか満足したような表情になった。そして、ちょっと首をかしげた。彼はここまではやってみたものの、これに書くあて名の心当りがないのだった。
といっても、これはそう喜ぶべき事態ではない。都会に巣くう目に見えぬ悪魔は、このいいお得意先を放しはしない。彼の心にこういう声を吹きこんだ。

「それでやめてしまうのかい。そんな物を書いてみたって、書いただけでは犯罪者の仲間入りはできないんだぜ。それを出すんだ。切手代ぐらい、けちけちするな。それを出してこそ一人前だぞ。捨ててしまったら、逆もどり。また、目を伏せながら道を歩かなければならないんだぞ。それがいいのか。出せ。出せ。どこへでもいいから出すんだ。さあ、切手をはれ」
彼は切手をはった。もはや破り捨てる気がしなくなる。だが、あて先の思いつかないまま、あたりを見まわす。
どこかにあて先はないものか。こう考えて見まわす彼の目の先に、悪魔はさっきから、さりげなく電話帳を置いておいた。彼はそれを見て手をたたく。
これだ、これだ。これのなかには数えきれないあて先がつまっている。選ぶのに困るくらいだ。よし、これをさっと開き、一番さきに目にとまった名前を書くとしよう。これなら自分も満足し、しかも、だれにも迷惑はかからない。
彼はにっこりとし、超論理的な考え方をし、ますます悪魔的な表情になりながら、一人の男の名前を封筒の上に書きうつした。
悪魔はそれを応援した。
「そうだ。いいぞ、いいぞ。こんどはそれをポストに入れるんだ。簡単なことじゃないか。もう少しで一人前だぞ。しかも、犯罪のなかでも特に罪の重い、子供をたねに金をゆする犯人になれるんだ。なに、ばれることなんかあるものか。お前の筆跡なんか調べようがない。それに相手とおまえとはなんのつながりもないんだから、そこからばれてくる心配もない。絶対に安全だぞ。

安全保証つきの悪がやれないのか」

彼はついに悪魔の勧誘に同意した。そして、それをポストに投げ入れてみた。これまで、しつっこく勧誘をすすめてきた悪魔は、用事がすみ、べつな人間に移っていったのか、もう彼にはささやいてこなかった。

しかし、たしかに彼はさっぱりした気分になれた。やっと犯罪者の仲間に入ることができたのだ。あて名の名前は電話帳を閉じ、ポストに入れてしまってはもはや調べようもないが、それでも犯罪をしたことに変りはない。

道を歩いてもすがすがしく、いままであれほどのしかかっていた劣等感も消えていた。だれもかれも、親しい友人に見えてきた。

「おれだって、おまえさんと同じだぜ。おまえさんはなにをやらかしたんだい。国鉄のキセル乗りと大差ない、小さなごまかしとちがうのかい。おれなんか、そんな物とくらべものにならないぐらいの、大それたことを試みたんだぜ」

と、そばの人の背中をたたきたいぐらいの思いだった。なにか青空のもとを、思いきり飛ばしてみたいような気がした。

そして、何日かのちに、彼はそれを文字通りに実行することにした。彼はつとめ先の会社の、配達部門の同僚にこうたのんでみたのだ。

「おい、明日の休日に、会社のオートバイを使わしてくれよ」

「なんだい。どうするんだ」

「ちょっと乗りまわしてみたいだけさ」

「私用はいけないことになっているが、まあ、そううるさいこともない。ガソリンを自分で買い、あとで手入れをしておいてくれれば、かまわないだろう」

「それはありがたい」

「だが、いつもとちがって、なにか楽しそうだな。どういうわけだい」

「やっと都会の生活になれてきた、とでもいうのだろう」

「それはよかった。だが、事故だけはおこさないでくれよ」

「わかっているさ」

つぎの日。彼は休日の街にオートバイを走らせた。どうだい、おれを知ってるかい。こうつぶやきながら、都会じゅうを走りまわりたい気分だった。

しかし、スピード違反をするほどの羽目は外さなかった。おれはそんなけちな犯罪はやらないんだからな。

「おい、おっさん。気をつけてくれよ」

彼は危うくぶつかりそうになった中年の男に軽く声をかけ、走りつづけた。

まもなく、うしろでパトカーのサイレンが聞こえてきた。あれがおれを追いかけるサイレンで、おれが必死に逃げているとしたら、ちょっとした映画のシーンになるがな。

だが、彼はべつにスピードをあげなかった。ブレーキをかけ、道ばたでとまり、パトカーの追い抜くのにまかせようとした。

怪鳥のようなサイレンの叫びは、たちまち迫り、彼のそばでとまった。
「なんでしょう。ぼくはなにも落しませんが」
彼は落し物を拾って追いかけているのではないかと思い、おりてきた警官に聞いてみた。
「お手間はとらせません。ちょっと署までいっしょに来て下さい」
「なんですって。ぼくはなにもしませんよ」
「いや、さっき中年の男にぶつかりそうになった」
「しかし、なんともなかったじゃありませんか。そんなことで署まで行かなくてはならないなんて、聞いたこともありませんよ。それとも、あのおっさんがなにか特別な人なんですか。ちっともえらそうに見えませんが」
「そうとも、ある点で特別な人なんだ。じつはあの男の父親、もう八十歳の老人だがね、それに脅迫状が来た。金を出さぬと子供をねらうといったものだ。そこで特別に監視をつけていたんだ。おそらく冗談とは思うが、万一、危害でも加えられたら問題だからな。さっきのきみの場合も偶然だろうが、いちおう調べておかなくてはならない。すまないが、ほんの形式だけだ」
「なにを調べるんです」
「きみの部屋をちょっと見せてもらうだけだ。脅迫に使われた便箋、封筒があるかどうか、それときみの筆跡を鑑定用に少しだけもらうことになるだろうな。すまないが、これがわれわれの仕事だ。心配することはないよ。われわれにはすぐわかる。きみはそんな悪いことなんかできる人間じゃあない」

組織

静かに酒を飲むのだったら、このようにホテルのバーに来るに限る。胃のなかをハエがはいまわるようなむずむずした感じをおこさせる流行歌のメロディー、そばへ寄ってきて香水のにおいを発散させながら無限のおしゃべりをつづける女の子、突如としてギターを片手に出現し奇妙な声をはりあげる流しの歌手。このようなものにわずらわされず、心の悩みになんらかの解決法を見いだそうと、思いをめぐらしながら、ひとり酒を飲むとしたら、ホテルのバーぐらい適当な所はないようだ。
私はカウンターを前に高い椅子にかけ、すでに何杯目かのウイスキー・グラスをあけた。だが、心の悩みはいっこうに解決せず、胸のなかで大きくなり、ついに言葉となって口から出た。
「ねえ、きみ……」
私はバーテンに声をかけたのだ。いままで黙っていたその若く、清潔で、利口そうなバーテンは、私に声をかけられて、はじめて礼儀正しく答えた。
「はい、なんでございましょう」
「しばらく、話し相手になってくれないかね」
「よろしゅうございますとも」

「わたしは推理小説を書くのが仕事なのだが……」

私はいくら酒を飲んでいるとはいえ、自分の悩みをそのまま出しはしない。私は前からある一人の男を殺そうと思いつづけているのだ。その男は私の過去のちょっとした行為をもとに、限りない恐喝をつづけてくる。これを打ち切るには、やつに死んでもらう以外にない。だが、殺したあとつかまりたくないというのが悩みなのである。もちろん、一応の方法は考えてある。しかし、あくまで完全でないと困るのだ。その方法を確立するため、私の素性を知らぬバーテンを相手に、推理小説にかこつけて話題を進めてみる気になった。

「はい、推理小説とはけっこうなお仕事でございますね。わたしも何冊かは読んでおります。詐

欺や偽造などを扱ったのもよろしゅうございますが、やはり殺人がでてこないと面白くございません。殺人は罪が重く、それだけに万全の策を必要とします。なんとかごまかそうとする者、それを立証しようとする者。この間の関係に、罪が重ければそれだけ熱が入るわけですから」

「ところで、なにかいい材料はないだろうか。締切が迫って弱っているのだ」

私は一日も早くやつを殺したいと思っている。バーテンはちらりと目を動かした。私の右手を見たようだった。あとで考えると、私の中指にペンだこのないことを、彼はこの時に見ぬいたのだろう。だが、彼はそしらぬ顔で答えた。

「しかし、お話がばくぜんとしていて、どんなものがお気に召すのか、見当がつきませんが」

「やはり、殺人を扱ったものがいい。きみが今まで読んだなかで、ここをこう改めたらいい、といった意見などあったら聞かせて欲しいな。こうすれば完全犯罪になるはずだ、といったような」

「さようでございますか。推理小説について意見がないこともございませんが」

「それを話してくれ。お礼はするから」

「お礼なんかはけっこうです。しかし、読んでいるうちに、ばかばかしくなるのがありますね。なぜ、もっと利口な方法をとらないのかと」

「おい、それをくわしく聞かせてくれ」

と、私は身をのりだした。

「たとえばですね、犯人にとって、いちばん考えておかなければならないのはアリバイでしょう。犯行時にそこにいなかったことさえはっきりしておけば、あとはそう心配しないですむはず

です。そのアリバイに気をつけないで、よけいなことでうろうろする。これは本末転倒ではありませんか。こわれたブレーキをなおしもせず、力をこめて引っぱっているようなものです。破局に突入するにきまっています」

「きみはなにか方法を知っているらしいな。そのすばらしい方法を教えてくれよ」

「いえ、べつにすばらしい方法というわけではありません。ごく常識的なことです。しかし、小説よりいくらか現代的と言えましょうか」

私はさらに話にひきこまれた。

「その現代的というのはどういう意味だね」

「現代は組織の時代です。なにをするにも個人の力ではたかが知れていますし、いかにがんばってみても、組織の力には太刀打ちできません。そこでございます」

「それがアリバイとどんな関係になるんだ」

私はウイスキーをつがせ、それを飲んだ。

「組織の力をかりてアリバイを作る。完全な統制のもとにアリバイを作っておけば、よほどのへまをしない限り、無罪になるにきまっています」

「うむ。そう言われればその通りだ。アリバイを作る組織というわけだな。だが、はたして、そううまく行くものだろうか」

「まあ……」

バーテンはあいまいに言葉をにごした。私は興味を持ち、もっとつっこんで聞いてみたくなった。

「組織といっても人間の集りだ。人間には良心というものがあるから、そこから崩れないともいえない。組織でアリバイを作るのはいい考えだが、そう簡単にはいかないだろう」

「そうお考えですかね。むろん十九世紀ごろはそうだったでしょう。しかし、現在はどうでしょう。組織の一員となれば、良心なんかどこかに消えてしまいます。申しあげなくてもおわかりでしょうが、会社、官庁、軍隊、こういった組織に参加したからには、どんなに悩もうと、どうにもなりません。組織のなかに入って、組織の利益より自分の良心を優先させていると断言できる人があるでしょうか。あまり聞いたことがございません。せいぜい、時たま反省したような言葉をしゃべってみるだけです。しかし、これだって自分には良心が残っていることを示すジェスチャーにすぎません。良心なんてものは、持っていても使わないのなら、ないのと同じことでございましょう」

「わかった、わかった。だが、いまのわたしには、個人の良心対組織といった議論には、あまり興味はないんだよ」

私はまだ続きそうな彼の言葉を、手のひらで押しとどめた。すると彼はにやりと笑い、さりげなく、しかし重大なことを口にした。

「そのような便利な組織があるなら、ぜひ紹介してほしい、とおっしゃるわけでしょう」

「まあ……」

こんどは私が言葉をにごした。しかし、彼はたたみかけてきた。

「正直のところ、お客さまは小説家なんかではなく、殺人だかなんだか、これから一仕事なさろうというのでしょう」

「いや、そういうわけでは……」

「それでなければ、こう熱心にはなりません。さきほどから目の色がちがってきております」

「いや、じつは、その……」

「おかくしになっても、さっきからの表情でわかります。わたしは多くのお客さまに接しておりますので、その点はすぐにわかります。しかし、ご安心下さい。決して口外はいたしませんから。もっとも、口外しようにもお名前も存じませんし、また、犯意を抱いているらしいだけでは、どうにもなりません」

「それはそうだ。ところで、その組織の話だが、わたしも一回やっかいになってみたいが、どうだろうか。だが、さぞ費用がかかるものだろうな」

たとえ、いかに完全なアリバイを作ってくれる組織でも、金がかかりすぎては手がだせない。

「いえ、そのご心配はいりません。この事業は普通とちがって、計算された原価があるわけではありません。それにお客がつかないほどの高額では、事業が成りたちません。そのかたの支払い能力に応じて、お払いいただいておるわけでございます」

「なるほど。それはありがたい。ぜひ、一晩だけ、その組織の力とやらを借りたいものだ。だが、いったい、それはどこにあるのだ」

「ここでございます」

「ここだと……」

「はい。このホテルでございます。支配人の指示どおり、すべての従業員が完全に同じ証言をするように、統制がゆきとどいております。お客さまのご依頼の時間中、そのおとまりの部屋から一歩も外出なさらなかったと証言をするわけでございます」

「だが、従業員の一人でも良心を押えかねて……」

「また、良心と組織の議論でございますか」

「しかし、万一のこともある」

「そのご心配は、ごもっともです。それについては、お客さまのご要求どおり、お気に召すようにいたしております。多くのかたは、あらかじめ従業員の一同から、証言の内容を書いた書類をお取りになっておくようでございます。なかには念を入れて、署名のほかに拇印までおとりになるかたもございます。こうしておけば、万一の場合に証言をひるがえすという心配もございません。もっとも、そんなことをなさらなくても、絶対に大丈夫なのでございますがね」

私はついに意を決した。そして、バーテンに強いカクテルを作らせ、それを一気に飲みほしてからうなずいた。

「なるほど。聞いてみると、たしかにお客本位のようだな。では、さっそくだが、ためしに今晩とめてもらいたいと思うが、どうだろうか。申し込んですぐでは、早すぎるかね」

「そんなことはございません。けっこうでございます。しかし、一つだけご注意いただきたいことがございます」

「なんだね。それは」
「申しあげるまでもありませんが、現行犯でとっつかまることです。お客さまがその時間のあいだに浮気をなさろうと、詐欺をなさろうとご自由ですが、現行犯でつかまってはどうにも手のつけようがありません。何十人の殺人をなさろうと、くれぐれもお気をおつけになって下さい」
「わかりきったことだな」
「現行犯でない限りは、一人や二人の目撃者など気になさることはありません。人数の点ではこちらが圧倒的に多いのですから、目撃者のほうで考えなおしてしまいますよ。組織の力の偉大さです」
「うむ。たしかにその通りだな。では、支配人に会わせてくれないか」
「よろしゅうございます。では、どうぞこちらへ」
バーテンは私を案内し、ホテルの支配人に紹介してくれた。そこで、私はさっきから聞いていた通りの手つづきをした。まず、ホテルの印の押してある宿泊の証明書をもらい、つぎに従業員たちから証言の内容を書かせた書類を取った。それには一人一人わたしの目の前で署名をさせ、ついでに拇印を押させた。支配人はそれが終ると、
「これでご安心でございましょう。では、お部屋へ一応、ご案内いたしましょう」
「そうだな」
案内された室は四階だった。窓から見下すと、とても脱け出せるものではなかった。これなら従業員たちの証言さえあれば、アリバイは完全となるだろう。私は室内のあちこちに指紋をつけ

た。とまるからには指紋がついていないとおかしい。
「ところで、値段でございますが……」
という支配人に対して、私はあまり支払い能力がないことを力説した。彼はちょっと顔をしかめたが、すぐににこにこした表情にもどって、
「よろしゅうございます。では、ごゆっくりおとまり下さい」
かくして、私はその晩、その部屋にとまった。いや、対外的にはとまったことになっているが、夜のふけるのを待ち、かねてからの計画を実行に移したのだ。
その計画はうまくいった。もちろん、私だって、このアリバイだけにたよるほどばかではない。犯行の場所になにひとつ証拠は残してはこなかった。ホテルによる人工のアリバイは、万一の時の保険のようなものだろう。わずかな費用で、思わぬ目撃者を圧倒できるのだから。
「これこそ、あのバーテンのいう現代的というものだろうな」
私はつぶやきながらも、安心の笑いを押えられなかった。
そのため、二日後に警察に呼出されても落ち着いたものだった。刑事は私にこう聞いた。
「二日前の夜には、どこにおいででしたか」
やつの死体が発見されたにちがいない。やつとの交友関係から、私が容疑者として浮かびあがってきたのだろう。だが、現場にはなんにも証拠は残っていないはずだ。
「ホテルにとまっていました」

「それはたしかですね」
私はこの時ほど、アリバイ保険に入っていてよかったと思ったことはない。現場に証拠がないということは消極的だが、アリバイなら積極的だ。あのわずかな費用が、ここで価値を示してくれる。
「もちろんです。ホテルの従業員たちに聞いてみて下さい。あの夜、わたしが四階の一室から一歩も出なかったと証言してくれるでしょう」
「それはすでに確かめてある。あなたの言う通りだった」
「どうです」
私は大船に乗っているような気持ちだった。だが、じつはその船がとんでもない、いいかげんなものだったことを思い知らされた。たしかに、話がうますぎる割りに、費用が安すぎたようだ。
刑事は目を見開き、ふしぎそうな表情で私にこう言った。
「長いこと仕事をやっているが、あなたみたいな容疑者は珍しい。あなたはなんで調べられているのかわかっているのでしょうね。つぎの晩にあの室にとまった客が、ベッドの下から死後二十時間、つまり、あなたがとまっているあいだに絞殺されたと認められる死体を発見したのですよ」
私はいいカモにされたようだ。こうなったら、もはや、だれともしれぬやつから押しつけられた罪をのがれることはむずかしいだろう。

組織の力に対して、個人がいかに抵抗してもむだなのだから。

報酬

「よく来てくれた。もはや、きみ以外にたよる者はないのだ。なんとか助け出してくれ」

留置場のなかにほうりこまれていたエル氏は、やってきた弁護士を見て、待ちかねたように声をかけた。弁護士はうなずきながらそれに答えた。

「そんなにたよりに思っていただけるとは、わたしとしてもありがたいことです。もちろん、ご依頼をうけたからには、できるだけのことはいたしますが、裁判というものは、判決がおりるまで、絶対的なことは申しあげられません。しかも、あなたは殺人をなさったのですから」

こんどはエル氏が二、三度つづけてうなずいた。

「そこだ。だからこそ、きみを呼んだのだ。ほかの事件ならほかの弁護士でもいい。だが、こんどは問題が問題だ。きみはその名も高いすご腕の弁護士だ。きみが昔に存在していたら、切り裂きジャックも自首して出たし、どんな犯罪王も無罪になっていたろうとうわさされているくらいじゃないか」

「いや、それほどのことはありませんよ。どんな犯罪者もとはいえません。やはり依頼人によりけりです」

「わかっておる。報酬のことだろう。きみはどんな者でも無罪にするかわりに、想像を絶した額

の報酬を要求することも知っている。その点は心配するな。実業界において、わしの財産のことを知らぬ者はないはずだ。そのきみと、このわしが結びつけば、万事うまくゆくはずではないか。わしはこの留置場ぐらしは、もうたくさんだ」

エル氏はため息をつき、ほほをなでた。その表情にははっきりと、やつれを見ることができた。たしかに、いままで豪華な生活をつづけてきたエル氏にとって、この留置場ぐらしは、たえられぬものだった。だが、留置場ならまだがまんできても、有罪の判決と、それにつづく死刑、あるいは余生のすべてを埋めるような長い懲役のことを考えたら、いてもたってもいられない気分になるのは無理もなかった。

弁護士は落ち着いた言葉で言った。

「そうおっしゃいますが、事態はそう簡単なものではありませんよ。わたしの調べたところによると、あなたは商売がたきの男を殺したのでしょう」

「ああ、話しているうちに、ついかっとなって、そばのペーパーナイフを突き出した。それが運悪く心臓につきささり、死んでしまった。人間がああ簡単に死ぬものとは知らなかったんだ」

「なにをのんきなことを。あなたは来客の彼となにか言い争ったあげく、ペーパーナイフで殺してしまった。しかも、目撃者がそろっている。こうなっては、事実はどうにもできません。検事は商売がたきという点から殺意を追及しようとするでしょう。そこをわたしが、殺すつもりではなかった、と弁護する。まあ、死刑の心配だけはありませんから、ご安心下さって大丈夫ですよ」

「きみこそ、のんきなことを言うぞ。わしは長い懲役などまっぴらだ。ぜひ、無罪にしてほしい」

弁護士は顔の前で手を振った。

「とんでもない。これを無罪にすることは、ほとんど不可能に近いでしょう」

「だからこそ、きみにたのむのだ。金ならいくらでも出す。なんとか無罪になるようにしてくれ。きみはいま、不可能に近いとは言ったが、まったく不可能とは言わなかった。なあ、なにか方法があるんだろう。懲役なんかになったら、わしは今までなんのために金をためてきたのか、わけがわからんことになる。どうなんだね」

エル氏は身をのりだし、弁護士は一段と冷静になった。

「どうも、言葉じりを取られたようですな。では、わたしのほうでも言葉じりを取らせていただきますよ。金ならいくらでも出す、とおっしゃいましたね」

なにか確信のありそうな口ぶりに、エル氏は少しほっとした。

「な、なんとかなると言うのか。ぜひ、やってくれ。金なら、いくらでも……、もちろん、きみの要求するだけ。まさか、わしの全財産をくれというわけではないだろう」

「そこですよ、こちらの心配の点は。どうも金持ちというものは、はじめにうまいことを言っておきながら、いざとなると出し惜しみをするものです。だが、わたしにそれは通用しませんよ。そこをはっきりときめていただかないと、わたしは手を引きます。安くあげるおつもりなら、ほかの弁護士をたのんで有罪にでもなるんですな」

エル氏は両手を前にのばし、すがりつくようなかっこうになった。

「おい、待ってくれ。わしは出し惜しみなどせん。きみ以外に今のわしの状態を救える者はないのだ」

「そうですとも。では、はっきり約束して下さい」

弁護士は多額の報酬を要求し、さすがのエル氏もしばらくためらっていたが、やがて承知せざるをえなかった。

「さあ、これでいいだろう。だが、わしをどうやって無罪に持ちこむのだ」

「無罪といっても、殺人がはっきりしているんですからねえ。しかも、目撃者が多すぎます。一人ぐらいの目撃者なら、精神異常に仕立てられないこともありませんが、ああ何人もいてはね。目撃者全部を頭がおかしかったとすることは、いかに現代が狂気の時代とはいえ、いささか無理です。となると、あなたが精神異常者になるほうが簡単です。それを立証すれば無罪になるでしょう」

エル氏は顔をしかめた。

「わしに気ちがいになれと言うのか。わしは有罪になるのもいやだが、診断書つきの気ちがいにだってなりたくない。刑務所もいやだが、精神病院だっていやだ。まさか、きみともあろう者が、多額の報酬をとっておきながら、そんな方法を使うわけではないだろう」

「ええ、わたしだってこの道では名の通った者です。しかも、報酬がきまれば、ご期待を裏切るようなことはいたしません。とっておきの方法があるのです。そもそも、人を殺しておいて無罪

になるには、精神異常のほかに、もう一つの場合があります」

エル氏の表情がもとにもどって、目が輝きをました。

「どんな場合だ、それは……」

「正当防衛です。そこを力説しましょう」

「そういけば申し分ないのだが、そう簡単にゆくとは思えぬな。相手が凶器を用意してやってきたわけでないし、空手の有段者だったという証明もつくまい。それに体力だって、やつがわしより格段に強いというわけでもない。商売がたきだという点で、やつがわしに殺意を持っていたとしても、殺しにきたことを裁判官になっとくさせるのはむずかしいだろう」

「その通りですが、それ以外には方法がありません。調べたところによると、幸い、あなたと彼との会話をはっきり記憶している者がおりません。ここに細工の余地が残されているようです」

「どうもよくわからんが、なにかこじつけられるかね」

エル氏はたよりなさそうな表情になった。

「大丈夫でしょう。あなたを特異体質にしあげるのです。たとえばと……あなたは何年か前から、タバコの煙を吸うとゼンソクの発作をおこす体質の持ち主だ。そして、医者からは厳重に注意を要求されていた。それなのに、彼はタバコの煙を吹きつけてきて、あなたが泣くようにたのんだがやめてくれない。そこで、生命の危険を感じて仕方なく……、といったぐあいです。医者の診断書のほうは、わたしがなんとか手配しましょう。これなら最悪の場合でも、執行猶予ぐらいですむでしょう」

「うむ。そういけばいい。だが、わしはタバコを吸うから、その体質では通らんぞ」

「それでは、こうしましょう。あなたは、しばらく前から肩をたたかれると、ひきつけを起す病気にとりつかれていた。その発作はしだいにひどくなり、こんど発作がおきたら命にかかわると言われていた。彼にそのことを言っても信じてくれない。冗談と思ってむりに肩をたたこうとする。いくらたのんでもやめそうにない……」

「なるほど」

「診断書と、かつて発作をおこした時の証人は、わたしのほうで手配します。いっぽう、何月何日、どこそこであなたの肩をたたいたがなんともなかった、と証言できるほどの記憶のいい人は現れっこありません。そういえばあいつは肩をたたかせなかった、と思う人のほうが多くなるでしょう」

「なるほど。うまくゆけばいいが……」

「そうのんきなことではいけません。あらゆる手はずはわたしのほうで整えますが、これは、あなたもその気になってもらわなければなりません」

「だが、わしにどうしろと言うのだ」

「あなたは自分でも、そのような体質の持ち主だと思いこむのです。おそらく、公判では検事がそこを追及するでしょう。その時、あなたがふらついてはどうにもなりません。ここしばらくは留置場ぐらしですから、ほかにすることもないはずです。だから、毎日毎日、自分に言いきかせるのです。自分は肩をたたかれ、すでに発作をくりかえしてきた。こんどたたかれたら、助から

ない発作がおこるのだ。ちょうど、肩に爆弾を埋めてあるようなものだ……。こんなふうにですよ」

「よし、そう努力しよう。だが、法廷でためしに肩をたたいてみろ、と言われたら、すぐにばれてしまうではないか」

「まあ、お待ちなさい。あなた自身そんなことを言っては困ります。われわれの側の医者が口をそろえて、こんどたたかれたら死ぬと診断しているのですよ。それを押し切ってたたいたりしてみることは、裁判官が許しませんよ。へたをすれば、法廷で殺人が行われるわけではありませんか」

「なるほど……」

「そのような発言があった時には、あなたはすぐに顔をまっ青にして、ふるえなければなりません。ここが成否のわかれ目です。それに、このことは裁判がすんでからも、心がけていなければなりません。しばらくのあいだは警察が監視をつづけるでしょうから。要するに、あなたが自分自身、そう思いこめるかどうかが問題です。それができなければ懲役ゆきですよ」

「とんでもない。懲役はまっぴらだ。しかし、よくわかった。わしは当分そのことだけを考え、信じこむとしよう」

「そうですとも。毎日毎日、精神を統一して自己暗示をかけなくてはいけません。こんど肩をたたかれたら死ぬんだ、こんど肩をたたかれたら死ぬんだ……。一日に何千回となく、自分に言い聞かせるのです」

かくして、法廷への戦術は決定した。

そして、判決の日。

さすがに多額の報酬を要求しただけあって、弁護士の弁論はすばらしかった。用意された診断書、証人、すべてに一分のすきもなく、裁判官は有罪の判決を下すわけにはいかなかった。

特に、検事が「肩をたたいて、たしかめてみたい」と発言した時のエル氏のようすは、とても芝居とは思えなかった。とたんに顔は青ざめ、手を振り、「やめてくれ、殺す気なのか」と叫んだところは、弁護士さえ、人間が必死に自己暗示をつづけると、ああも変るものかと思ったほどだった。

これが裁判官の心証を動かし、ついに判決は無罪ときまった。

「ありがとう。おかげで助かった」

エル氏は弁護士にかけよった。

「わたしにまかせれば、ざっとこんなものです。うまいものでしょう。どうです」

弁護士はとくいげに答えながら、勢いよくエル氏の肩をたたいた。

すばらしい食事

血のにじみだしている肉片を目を細めて見おろしているうちに、彼女はこみあげてくる楽しさを押えきれなくなってきた。その衝動は胸からのぼってきて、形のいいくちびるのあいだから明るい声となって出た。

「あなた……」

彼女は三十を越してはいたが、見たところはずっと若々しく、その声は期待にあふれた調子をおびているせいか、あどけない雰囲気さえともなっていた。声はそばの窓からとび出し、庭のほうに伸びていったが、答えとなっては戻ってこなかった。

外には夕ぐれの静かさがひろがっていた。ここは郊外の住宅地。そう家がたてこんでいないので、騒がしさやあわただしさとは無縁の一帯だった。

「おかしいわね。さっき庭を横切ってガレージのほうにいったように思ったけど。それとも、もう戻ったのかしら」

彼女はこうつぶやいてから、こんどは家の奥にむかって叫びなおした。声は洋風のわりあい大きなこの家のいくつかの部屋に、はずみながらわかれて散っていった。その余韻が消えたと思うと、男の声がかえってきた。

「ああ……」

それにつづいて足音がおこり、彼女のほうに近づいてきた。彼女は視線を肉片の上にのせながらも、耳ではしだいに大きくなる足音を待った。足音は彼女のいる台所の入口でとまり、声となった。

「なんだい、大声で呼んだりして。おい、このにおいは……」

その四十ぐらいの男は鼻で小きざみに呼吸をした。彼女は目の前の肉片を指さし、にっこりと笑いかけた。

「夕食はビフテキを作ることにしたのよ。いいでしょう」

「いいどころか、おれの大好物じゃないか。きょうはなんとすばらしい日だろう」

食欲をそそるにおいが台所にみち、そのなかで二人は幸福そうな顔をむけあった。

「ねえ、あなた。あたしのことを愛していて下さるの」

「当り前じゃないか。愛しているとも」

「前の奥さんより……」

「そうとも。なんでそんなことを今さら言うんだい。おれはおまえのためなら、どんなことでもするさ。それより、おまえのほうはどうなんだい。前のご亭主とくらべて」

彼は彼女の肩に手をふれ、たしかめるような調子で軽くゆすった。

「あなたを愛してるわよ。でも、おたがいに前に結婚していた相手のことは忘れましょう。もう死んでしまった人たちのことなんか。あたしたちは、これからのことを考えればいいのよ」

彼はうなずいた。

「そうだ。これからのおれたちは、さらにすばらしくなるだろう。きょうはあのいまいましい運転手のやつをくびにしたんだからな。これがきっかけとなって、つぎつぎと幸運が訪れてくるだろうさ」

けさ、二人は住み込んでいた自家用車の運転手をくびにした。二人の目を盗んで机の引出しから金を持ち出そうとしたのを見つけたのだ。

「そういえば、なんとなく陰気な感じだったわね。あたしたちのようすをじっと観察しているようで。趣味といえば、ひとりでこっそりなにか機械いじりなんかしていて、いい感じじゃなかったわ」

「まあ、いいさ。くびにしたんだから。だが、世の中にはとんでもないやつがいるものだな。まともに働いて金をためようともせず、ひとの物に手を出すなんて」

「金の誘惑って恐ろしいものね。こんどは正直な人をやといましょう」

「ああ。おれたちも運転できないこともないが、最近の雑踏を巧みに泳ぎ切るほど、おたがいにうまくはない。事故なんか起こして、けがでもしたらつまらんからな」

「今夜はあたしたち二人だけ。気がのびのびするわね。大いに食べ、ゆっくり休養しましょうよ」

「そうだ。愉快に飲んでさわぐとしよう」

「ええ」

二人はまた笑いあった。彼は台所から去り、食堂のほうにむかっていった。

彼が行ってしまうのを見とどけ、妻は台所の棚の片すみにあった小さなびんを取り出し、そっと栓を外し、なかの白い粉をビフテキの上に軽くふりかけた。そして手を休め、首をかしげていたが、

「大サービスよ」

と低くつぶやいて、もう一振りその白い粉をふりかけた。これは毒薬。亭主を長い休養に送り出す作用を持った薬品だった。

彼女にしても、生まれつき残忍な性格を持っていたわけではない。それどころか、前の夫とは心から愛し合って、この上ない幸福な結婚生活をすごしてきた。だが、思いがけない事故でその夫に死なれてみると、あまりに深く愛しあっていただけに、埋めようもない空虚に襲われたのだった。もはや、愛情ではそれをみたしようがなかった。

しかし、あえて二度目の結婚をしたのには、それなりの理由があった。金。前の夫が残していったかなりの額の生命保険金。これをふやすことに人生の生きがいを見いだしたのだ。財産をふやす楽しみ。この味を覚えてしまうと、人は二度とそれから離れられなくなる。すべてがこの目的に集中し、ほかのなにもかもが、その手段となってしまう。そして、その能率をあげるために、彼女は二度目の結婚にふみきったのだ。

いまの亭主にも高額の保険に入らせてある。前のは偶然、こんどは計画的。このちがいはあったが、偶然でうまくいったのだから、計画的ならさらにうまくゆくように思われた。ゼロのたく

さんついた数字の列が彼女の頭のなかを飛びまわり、彼女を夢心地にさせた。手はしぜんと動き、白い粉はさらに散った。彼女はびんをしまいながら、思わず歌を口ずさんだ。モーツァルトの子守唄。

「眠れよい子よ……」

声はしだいに高くなりながら、食堂にいる彼の耳にもとどいていった。彼は洋酒を並べてある棚に歩みより、ブランデーのびんを手にとった。

「眠れよい子よ、か」

彼はつま先で拍子をとりながら、そっと栓を外し、ズボンのポケットのなかから紙包みをとり出し、そのなかの白い粉をブランデーのなかに入れた。粉はかすかにたちのぼるかおりに逆らって、びんの中にさらさらと落ちていった。これは毒薬。妻を長い休養に送り出す作用を持っている。

彼は、愛し合っていた前の妻に病気で死なれるまでは幸福な男だった。だが、その愛情にみちた生活が断ち切られると、その悲しみをまぎらすため、妻の残した財産で遊び歩いた。そして、悲しみをあるていど忘れ、金がつきるころ、彼は遊びの味を覚えてしまった。人間は遊びの味を覚えると、それを押えるのは容易ではない。彼は遊びをつづけたく思い、そのための金を手に入れようとして、二度目の結婚にふみ切ったのだ。

今度の妻にも相当な財産がある。前は偶然だったが、こんどは計画的。偶然よりは計画的のほうが、さらにうまくゆくように思われた。競馬、トランプ、バーの女の子の顔などが彼の頭のな

かでひしめき、彼を夢心地にさせた。手はしぜんと動き、びんに落ちる白い粉はさらに追加された。彼は栓をし、それを食卓の上におき終えてから言った。

「どうだい。まだかい。腹がへったぜ」

「もうすぐよ。いまそっちへ運んでゆくわ」

やがて、食卓の上の準備がととのった。

「今夜はたくさん召しあがってね」

「ああ。大いに飲もう。おまえはブランデーだったな。おれはいつものようにウイスキーにしよう」

「ええ」

それぞれにとって、期待にみちた時刻が迫ってきた。まもなく倒れる相手を自動車のトランクにつみこみ、少しはなれた所にある沼に運び、重しをつけて沈める。簡単ではないにしろ、自己の念願を実現するにはやらなければならないことだし、やる気になればできる話だ。それには邪魔者のいない今夜が絶好なのだった。

彼は彼女のグラスにブランデーをつぎ、自分のにはウイスキーをついだ。

「今夜の食事は楽しいぞ。さあ、乾杯といくか。前祝いだ」

「え、なんの前祝い……」

「な、なんてこともないけどさ、なにかすごくいいことが起こりそうじゃないか。そんな気がしないかい」

「そういえばするわね。まもなくすばらしいことが起こりそうな予感がするわ」
二人の意見は一致し、グラスを持った。
「じゃあ、おたがいの健康を祈って……」
こう言い終り、グラスがくちびるに近づけられた。
その時。玄関のほうでベルの音がした。二人は不意におもちゃを取りあげられた子供のように眉を寄せあった。まさか、こんな時に来客があるとは。計算にはなかったじゃまだった。
「だれかしら、いまごろ」
「さあ、わからんな。ちょっと見てこよう。乾杯は一時中止だ」
彼はグラスを置き、玄関に出ていったが、しばらくして戻ってきた。
「だれだったの」
「郵便配達さ。小包みだ。取引き先のやつからだが、どうせ商品見本かなんかだろう。あけるのはあとにして、早いとこ食事をしようじゃないか」
「ええ。そのへんにのせておきなさいよ」
二人はふたたび食卓でむかいあった。
「せっかくのところで、じゃまが入ったな。乾杯をやりなおすか」
「じゃあ、あらためて」
妻はグラスを持ちあげ、ブランデーのにおいをかいだ。そして、グラスを見つめながら言った。

「ちょっと待って……」
彼はあわてた口調で聞いた。
「ど、どうしたんだい。なにか気になるのかい」
「ええ……」
彼はからだじゅうの血液の循環する早さが、とつぜん倍になったように思った。それは彼女が杯を食卓の上にもどし、手をはなすにいたって、さらに高まった。
「いったい、どうしたんだい。さっきまで朗らかだったのに、急に考えこんだりして。心配ごとでも思い出したのかい。それなら食事がすんでからゆっくり相談しよう。それとも、気分でも悪いのかい。それなら、そのブランデーを飲めば気が晴れるよ」
彼がとめどなくしゃべりはじめたのを彼女は制した。
「静かにしてよ。足音のようなのが聞こえたみたいな気がしたのよ。だれかがそとにいるんじゃないかしら」
彼はほっとし、血液の循環速度はもとにもどった。
「そんなはずはないよ。さっき帰っていった郵便配達のことだろう」
「ちがうわ。いま聞いたのよ」
食事の途中でだれかに来られたり、のぞかれたりしたら一大事だ。彼女にとっても、彼にとっても。
「そうかい。こんどはおまえ、見てきてくれよ」

彼はじゃまが二度目となり、計画の遂行を慎重に進めることにした。彼がようすを見に行った間にブランデーを飲まれ、彼女の倒れるところをその足音の主に目撃されたら、ことなのだ。彼女に行かせればその心配はない。だが、妻も同じく彼にビフテキに手をつけられることを恐れた。凶行は目撃者のいない時に行うのが理想的である。

「あたし、こわいわ。いっしょについてきてよ」

「よし」

二人が立ちあがりかけた時、玄関のほうでベルが鳴った。やはり来客だったらしい。食事をはじめてなくてよかった。

「だけど、いまごろだれかしら」

「わからん。おまえが足音を聞いたとしたら、しばらく家のそばをうろついていたことになる。妙だな」

二人は変に思いながらもドアの鍵をはずした。早く安心して食事にかかりたかったのだ。

ドアをあけると、そこには見なれぬ男が立っていた。無精ひげがのび、身なりもよくなく、どうみても上品とは呼びようのない男だった。

「どなた」

と妻が聞いたが、その男は口もきかず、ずかずかと入りこんできた。

「きみはだれです。ひとの家に勝手にあがりこんだりして、失礼じゃないか。帰って下さい。それとも、なにか用があるのですか」

その男は二人にむきなおり、ポケットにつっこんでいた手をだした。二人はそれを見て、目を大きく見開いた。そこには拳銃（けんじゅう）があったのだ。男は低い声で言った。

「しばらくのあいだは帰るわけにいかない。それに、おれの名前なんか言っても意味はない。だが、おれの素性は教えてやろう。おれはさっき脱獄してきたところだ」

「脱獄だと」

「そうだ。看守をなぐりつけ、この拳銃を奪って逃げてきた。ちゃんと弾丸は入っているし、おれは使い方も知っている」

「そ、それで、どうしようというのです」

「おとなしくしていれば、なにもしない。しばらくかくれさせてもらうだけだ。脱獄はしたが、看守を殺したわけではない。おまえらを殺して、万一つかまった時に死刑になってはつまらんからな。安心しろ。しかし、へたにさわぎたてたら、そんなことにはかまっていられなくなる。わかったな。ところで、電話はどこだ」

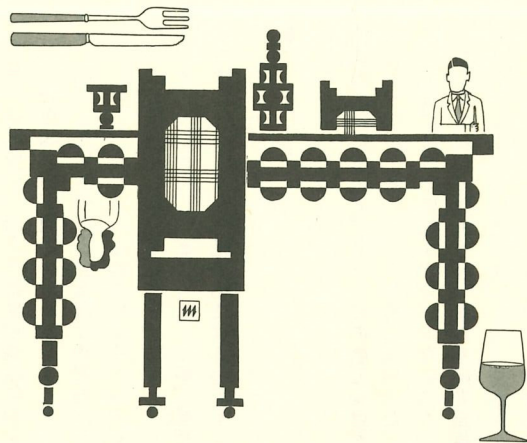
「あそこです」

脱獄囚は電話機のコードを引きちぎりかけたが、考えなおした。

「線を切ると修理屋がやってくるかもしれん。よし、おまえらは電話機に近よったりするな。そのすみの長椅子におとなしくかけていろ。おれはちょっと休ませてもらう」

二人は従わないわけにいかなかった。じゃまもじゃま、とんでもないじゃま者の侵入だった。だが、追いかえすことのできる相手ではなかった。二人は長椅子に並んで腰をおろしたが、脱獄

囚がつぎに叫んだ言葉で、ふたたび飛びあがるように驚いた。
「う。食事があるじゃないか。これは好都合だ。ちょうど腹がへっていたところだ。食うぜ。なんといううまそうなにおいだ。おれは刑務所で長いあいだ、こんな食事を夢に見つづけてきたんだ。恋いこがれていたんだぜ。それに酒もある。うう。のどの奥がぐうぐう鳴りだしてきやがった。危険をおかして脱獄してきたかいがあったというものだ。そして、すぐこんな食事にありつけるとは」
脱獄囚は食卓の上をながめ、口のなかが唾液であふれたような声を出した。そして、顔じゅうに無上の恍惚の表情をひろげた。
「あ」「あ」
二人の口から小さな叫びが、それぞれ複雑なひびきでもれた。脱獄囚が毒を飲んでぶっ倒れるのはありがたい。そして、この危険きわまる状態から助かることも喜ばしい。すぐに電話で医者を呼び手当てをすれば、生命はとりとめるかもしれない。脱獄囚を当局に引きわたせば、多くの人びとから感謝と賞賛を受けるだろう。
だが、それにはさらに高価な損失がともなうのだ。なぜ、そして、どうやってやつに毒を飲ませるのに成功したかの点だ。警察、新聞社。それだけならまだごまかして説明できないことはない。だが、いま並んで腰かけている者、なにを口に入れてぶっ倒れたかを正確に目撃した者に対しては、どう説明しようにも方法がつかないのだ。
二人はそれぞれ目をおおいたくなるような気持ちだった。この脱獄囚がこの家から退散するま

で、なんとか無事であることを心から祈った。しかし、それはとうてい不可能のように思われた。言葉の通じない、飢えた野性の猛獣に対して、前にあるえさを食わせまいと試みるのと同じだった。脱獄囚は催眠術にかけられたように、一歩一歩、食卓にひきよせられてきた。そして、えさを前にした猛獣のごときうなり声をあげた。
「ブランデー。うう。このにおい。手がふるえるぜ」
破局は寸前に迫った。このままではすべての計画は失敗し、人生の未来は暗黒に閉ざされてしまう。それは死と同じことだった。だが、瀕死の病人を前にして、医者は輸血とカンフルをつづけるではないか。たとえ絶望的ではあっても、最後のあがきを努めなければならない。亭主は声を出した。
「あの、もし……」
「なんだ」
脱獄囚はびくりとし、グラスにのばしかけた手をもどし、顔をあげた。亭主は話すたねも思いつかなかったが、考えている余裕もなかった。そこで、口の動くままに言葉をまかせた。
「け、警察のほうでは気がついていないのですか」
「それはもうわかったろう。いまごろは非常線が張られているころだ。だが、まさかこんな方角に逃げたとは気がついていまい」
「そ、それで、いつまでここにいらっしゃるおつもりなんですか」
「そうさな。だが、まず腹ごしらえがさきだ。このうまい物をみなたいらげれば、いい知恵も出

てくるだろう」

「ま、待って下さい。ここにいらっしゃるのはけっこうですが、ここは平和な家庭です。家のなかで騒ぎをおこされては困ります」

「なんだ、なにを言おうとしているんだ。言うことがあるのなら、はっきり言え」

亭主の言葉は、しだいに頭との連絡がとれはじめた。

「万一、だれかがやって来たらことです。見なれない変な人がいると不審に思い、報告されたらことでしょう。どうでしょう。まず、ひげでも剃り、服でもお着かえになったら。そうすれば、だれかが来ても、わたしたちの友人ということで大丈夫でしょう。それからゆっくり食事になさったほうが、落ち着いて気持ちよくお召しあがれになるでしょう」

そばの妻はこの言葉を聞いて、ほっとした。彼がどうしてこんな自分の気持ちを代弁したよ

うなことを言いだしたのか、そのわけはわからなかったが、そんなことを検討する余裕もなかった。いまは脱獄囚がビフテキに手をつける瞬間を、少しでも先へのばすのが先決だった。彼女も言葉をかけた。

「ぜひ、そうなさいませよ。うちにある服が、きっとおからだに合いますわ」

亭主と脱獄囚のからだつきには明らかに大きなちがいがあったし、服が合うはずもなかったが、彼女は熱心さのあふれた調子ですすめた。脱獄囚は予期しないこの言葉に疑いを抱いた。

「それもそうだ。だが、どうもおれにはふに落ちない。脱獄してきた者にとびこまれては、迷惑にきまっている。それなのに、おまえらはこのおれを、なぜそう親切にするのだ。さては、なにかたくらんでいるな。そうだ。それにきまっている」

脱獄囚は食卓からはなれた。二人は少しほっとした。だが、あまり怒らせて、拳銃が発射されるようになるのだけは止めないとならない。妻は言葉をたした。

「とんでもないことですわ。たくらむなんて。あたしたちはあなたが飛びこんでくるのを予想していたわけでないし、それに、さっきからいままでのあいだに、二人で相談するひまなんか、なかったじゃありませんか。ねえ、あなた」

亭主はそれにうなずいた。

「そうですとも。それにあなたは拳銃を持っている。へたにたくらんで殺されるほど、われわれはばかではありません」

「だが、なぜ親切そうなことを言いだしたのだ」

「あたしたちは、この平和な家庭がさわぎに巻きこまれ、荒らされないで欲しいからですわ。あなたの欲しいものは、なんでもあげますし、してもらいたいことがあれば、お手伝いします。そのかわり、手荒らなことはしないで下さいね」

彼女は雄弁になった。自分が死なず、脱獄囚に亭主のビフテキを食われすべてが終りになる以外のことなら、ほかのなにを与えても惜しくないと思った。

亭主もしきりとうなずいて見せた。なぜ妻がこの男に親切にする協力をはじめたのかはわからないが、事情はかすかだが好転している。これを押しすすめなくてはならないのだ。

脱獄囚はいくらかなっとくした。世の中にはいろいろな夫婦がある。あるいはこんな奇妙な家庭だってあるだろう。

「よし。おれだって、なにも手荒らなことをするつもりはない。だが、へたなまねをしたら、ただではすまさん。よくこのことを覚えていろ」

「わかってますとも。では、まず顔でもお剃りになりますか。ええと、カミソリはと……」

亭主は言いかけて口をつぐんだ。そうだ。すばらしい考え。この際、二階にあると言って、この場をはなれるのだ。妻を残してゆけば、やつも安心するだろう。そして、二階の窓から飛び出し、逃げればいい。あとは野となれだ。おそらく脱獄囚は宣言どおりに彼女を殺すだろう。そのあとでブランデーを飲むだろう。一石二鳥。そこで外出からもどって惨状を発見したと報告すればいい。拳銃でうたれた妻と、毒を飲んで死んだ脱獄囚。おれに不利な証拠はもちろん始末しておく。警察は首をひねるだろうが、真相がわかるはずはない。なんとうまい方法ではないか。

「カミソリはと……。どこへおいたかな」

彼は考えるふりをした。演出は入念にしないと怪しまれる。だが、この光明への脱出口も、妻の明るい言葉でたちまち堅く閉ざされた。

「そこにありますわ。ほら、そのすみの台の上に。どうぞご遠慮なくお使い下さいね。使い方はおわかりでしょう」

彼女はあらん限りの愛嬌をこめて言ってのけた。ビフテキを食べられること以外なら、どんなサービスでもするつもりなのだ。脱獄囚は彼女の指さす所に電気カミソリがおいてあるのを見てうなずいた。

「よし。知っている。服はどこだ」

服については細工のしようがなかった。すぐそばに亭主の服がかかっているのだ。

「そこです」

「よし。おまえらは動くなよ」

脱獄囚は拳銃をはなさず、左の手で電気カミソリを使いはじめた。モーターの小さなうなりがひびき、彼のひげを落していった。亭主は今なら少しぐらい会話をしても相手に聞かれまいとは思ったが、べつに妻に話しかけることもなかった。

亭主は、あと残された道はないかと考えてみた。問題はあのブランデーだ。あれさえ床に落して砕いてしまえばいい。びんが果して割れるかどうかはわからなかったが、やってみる価値はあった。ウイスキーは残しておくのだし、戸棚にはまだブランデーがある。やつもおこって拳銃を

ぶっぱなすこともあるまい。それより、妻になんでそんな行為にでたかを不審に思われないように行うほうが大切だった。彼はなにげないようすで立ち上った。
　だが、それもだめだった。
「おい、動くなと言ってあるはずだぜ」
　拳銃の銃口が動いた。
「あ、ちょっと便所へ」
「なんだと、便所だと。そんなことはあとにしろ。動くんじゃない」
　ふたたび腰を下ろさざるを得なかった。ちくしょう、おまえさんの命を救ってやるつもりなんだぜ。その親切心に気がつかないなんて。ばかなやつだ。勝手に死ぬがいいさ。
　脱獄囚はひげを剃り終え、服を着かえはじめた。拳銃を持ちかえながら、油断なくそでに手を通していった。逃げ出すすきはなかった。そして、服を着かえ終った。寸法はだいぶちがっていたが、妻はおせじを連発した。
「とてもすばらしく見えますわ。刑務所に入っていらっしゃったかたとは思えないくらい。あなたはきっと無実の罪でお入りになったのでしょうね。そうでしょうとも。そうとしか見えませんわ。上品で……」
　脱獄囚がちょっとうれしそうな表情をしたのに力を得て、彼女は無理に無理を重ねてほめ言葉をつづけた。できるなら無限にほめつづけ、彼の動きを止めておきたかったのだが、たちまちたね切れになってしまった。暴君に対して、話がたね切れになったら殺されるという条件で、千夜

一夜を物語りつづけたアラビアの王女のことをふと思い浮かべた。
「まあ、それほどのことはないがね。さて、ひげは剃ったし、服は着かえたし、では……」
「ま、お待ちなさい。ぬいだ服をそのままにしておいては意味ありませんわ。この長椅子のうしろへでもおかくしになったら」
「それもそうだ」
　脱獄囚は服を投げてよこした。彼女は顔もしかめず、そのよごれた服を受けとり、壁と長椅子とのすきまに押しこんだ。
「これなら大丈夫でしょう」
「よし。では、いよいよ食事だ」
「あ、その前に手でもお洗いになったら」
「おれは招待された客じゃないんだぜ。そんなひまはない。おれは腹がへっているんだ。さっきからにおいをかがされ通しで、のどばかりか、胃から腸までうなり通しだ。もうどうにもならない」
「でも料理が冷えてしまいましたでしょう。召し上っていらっしゃる間に、もう一皿のほうを温めなおしてまいりましょう。そのほうがおいしいでしょうし、おからだにも……」
　彼女はこう言いながら、なにげなく立ち上りかけた。亭主の皿を台所に運び、さっき入念にふりかけた毒薬を洗い落してしまおうと思ったのだ。だが、やはりその思いつきもだめだった。
「よけいなことはするな。おまえらはそこで、おとなしくしていればいいのだ。少しぐらい冷え

てたって、数年ぶりのビフテキだ。うまいにきまっている。そのため腹をこわすなんて、笑わせちゃいけない。おれがそんな情ない男に見えるかね。だが、どうもおまえたちのやり方は、ふに落ちない。温めてくるなどとだまして、その料理に毒薬でもふりかけようというのだろう。とんでもない話だ」

脱獄囚は警戒心をとりもどした。

彼女はやむをえず腰をおろした。ひとがせっかく毒を洗ってきてあげようと思ったのに。そんなに死にたいの。

「いいか。食事中はぺちゃくちゃしゃべるな。おまえさんたち、こんな家に住んでいるんだから、それぐらいの礼儀は知ってるだろう。このすばらしい料理がまずくなる。どうもおまえらは、しゃべりすぎる。こわいからだろう。こわい時には、とめどなくしゃべりたくなるものだ。それならどうだ。この酒を少し飲むか。気が落ち着くかもしれぬ」

脱獄囚はブランデーのグラスを取り、二人にむけてつきつけた。

「け、けっこう。われわれは落ち着いてますよ。それに、飲みたければいつでも飲めるんですから。な、そうだろう。ええ、そうですとも」

亭主はまっさおになり、手を振り、しどろもどろに答えた。自分では飲むわけにいかないし、さっきはあんなに飲ませたかった妻にも、いま飲まれては困るのだ。彼女にここで苦しまれると、やつは邪推してかっとなり、なにをしでかすかわかったものでない。おそらく、すぐに拳銃が音をたてるにちがいない。

幸い彼女は逆らわなかった。彼女はどのビフテキが先に手をつけられるかが気になり、それどころではなかったのだ。

脱獄囚はブランデー・グラスを手にしたまま、亭主の席に腰をおろした。その席のほうが二人を監視するのに適当だったのだ。彼女はそれを見てがっかりした。どっちから食べはじめようが、いずれは二人前を食べてしまうだろうが、できることなら毒入りのをあとにしてもらいたかった。

「いいか。静かにしているんだ」

脱獄囚は食卓の上に拳銃をおいた。いつでもすぐ手にすることのできるような位置だった。もはや、なんの細工をする余地も残されていなかった。動くことも、口をきくこともできなかった。脱獄囚ののどの筋肉が期待にふるえているのを見つめている以外になかった。できる動作はただ一つ、目を閉じることだけ。二人は目を閉じた。そして、男のうめき声と、倒れる音が完全な破局を告げるのを待ちかまえた。

しかし、その製に入ってきた音は、べつな物音だった。その音は二人のみならず、脱獄囚をも驚かせた。

玄関のベルの音。二人は進行が一時中断されたことで、すぐにほっとしたが、脱獄囚は緊張した。

「なんだ」

「玄関にだれか来たらしいのです」

「いまごろ来そうなやつがあるのか」

「ありません」

「まあいい。さあ、ていさいよく追いかえすんだ。なかに入れるんでないぞ」

脱獄囚は拳銃を手に立った。亭主も勢いよく立ちあがった。

「いいですとも。うまくやりますよ」

うまくやるとも。ドアをあけたとたん、全速力で飛びだせばいいのだ。あとのことは考えずに。いや、妻が殺されるのを祈りながら。

「いえ、あなた。あたしが出ますわ」

と、これは彼女にとっても同様だった。脱獄囚はしばらく考えていたが、

「よし、女のほうがいいだろう」

亭主の表情は落胆にみち、妻の表情は喜びにあふれた。

「うまくやりますわ。あなた、心配しないでね」

「よし。うまくやれ。だれも入れるな。だが、どうしても入れないと怪しまれる相手の時は、ちょっと入れて、おれのことを友人だと言うんだ。変なことをすると拳銃を使うぞ」

「わかってますわ」

彼女はドアから飛び出すこと以外、考えていなかった。脱獄囚は二人をうながし、玄関にむかった。彼は拳銃をにぎった手をポケットに入れ、もう一方の手で亭主の腕をつかみ、ドアのそばに立った。そして、妻にあごで合図をした。ベルの音は断続して響きわたっていた。

彼女は鍵をはずし、ドアをあけた。

いまだ。すべての力を足に集中して、彼女は勢いよく飛び出そうとした。だが、それはできなかった。外から飛びこんできた力のほうが強かったのだ。

外からなだれ込んできたものは、あまりに力強く、勢いよかったので、なかにいた三人はあっけにとられた。脱獄囚も拳銃をとり出すひまさえなかった。それは三人の男だった。だが、警官とは見えなかった。

彼女は連中に聞いた。

「どなたです。ふいに飛びこんでいらっしゃって。家をまちがえたのではありませんか。うちではお友だちを招待して、食事をしようとしていたところですわ。どうなさったのです」

だが、三人の男はそれぞれの手にある拳銃を示した。

「まちがえはしない。おれたちは前からこの家に目をつけていたのだ。ちょっとはなれた一軒家だし、金もありそうだとな。二人暮しと思っていたが、お客があって三人とはな。まあいい。おい、きみ。ポケットに手なんか入れてないで、その手を上にあげるんだ。そうそう。さあ、おまえたち、この三人をしばれ」

落ち着いた声で話している男が指揮者のように見えた。彼の命令によって、ほかの二人は用意のなわを出し、しばりにかかった。

夫婦はすなおに従ったが、脱獄囚だけはしばられることに反抗した。

「ま、待ってくれ。それだけはやめてくれ。しばられたら助からない」

「おとなしくしろ。おれたちはしばるだけだ。金さえもらえば、手荒なことはしやしない。おれたちが帰り、あしたになればだれかがやってきて、そのなわをほどいてくれるよ。そうなれば無事に助かる。あまり逆らわないでほしいね」

　脱獄囚もしばられてしまったが、嘆願はつづけた。

「そう言わないで、しばるのだけはやめてくれ。ほどいてくれ」

「そうしてはやりたいが、仕事のじゃまだ。おまえが逃げて知らせに走られたり、おれたちの帰ったあと、すぐ警察に電話されたりしたら困る。こっちの身にもなってくれ」

「いや、じつは、おれは脱獄してきたところなんだ。しばられたままほっとかれては、とっつかまって送りかえされてしまう。それだけはごめんだ」

「いいかげんにしろ。そんな傑作な作り話の相手をしているひまはないんだ。おまえはこの家に招待されたお客だろう。それに、ひげものびていないし、服もちゃんとしている。それでは脱獄囚として通用しないぜ。おれは刑務所へ入ったことがないから知らないが、そんな制服とは思えないね」

「本当だ。信じてくれ。ひげはその電気カミソリのなか。服はこの長椅子のうしろだ。うそだと思うなら、調べてくれ」

「わかった、わかった。静かにしていてくれ」

　指揮者らしい男は苦笑いをした。

「たのむ。おれは前科三犯なんだ。強盗だってできる。きもっ玉もふとい。おまえさんの一味に

加えてくれ。役に立つぜ。そうなればおれもまじめに働いてみせる」

「よし、よし。だがな、おれたちはこの家に金を盗みにやってきたんだ。おまえさんのような頭のおかしい男を引き取りにきたんじゃないんだよ。仲間にするなら、この夫婦のようにおとなしくしばられるやつのほうがずっといい。信用できる。おまえさんはどうも善人すぎるようだ」

「ああ、なんとか……」

「うるさい。おい、こいつにさるぐつわをしろ」

　それも用意されていた。仲間は脱獄囚の口をタオルでおおった。脱獄囚は意味のとれないうめき声をもらしたが、それがもはや通じないとわかって、悲しげな顔つきになった。

「さて、仕事にかかるか。おい、金はどこだ」

「はい。現金はとなりの部屋の引出しのなか。どうぞお持ちになって、早いとこお帰りになって下さい」

　亭主の答えに、妻も口をそえた。

「それから、あの箱には真珠のブローチがございますわ。もっとも、たいしたものではありませんけど。あと、そのへんにあるお気に召した品は、なんでもお持ちになってよろしいですわ。それを持って、早くひきあげて下さいませ」

「うむ。いやに協力的だな。それはいただいてゆくことにしよう。だが、どうもようすがおかしい。なにかいいものがあるにちがいない。ゆっくりさがしてみることにしよう。強盗にとって、金目のものをさがす時ぐらい、スリルと期待にみちた瞬間はない」

と、彼は首をかしげた時、仲間の二人が声をあげた。

「兄貴。これですよ。この料理と酒とを見て下さい。ひと仕事する前にたいらげましょう」

「うむ。ビフテキと酒か。しかもいい酒じゃないか」

そばの棚からブランデー・グラスがとり出され、それぞれにつがれた。子分の一人はナイフでビフテキを刻んだ。

「では、乾杯といこう。前祝いだ」

しばられている三人には、それぞれの意味で、絶望のけはいがのしかかっていた。亭主と妻は事態の進行が、もはやどうにもならなくなったことを充分に知った。脱獄囚との応対で気力を使いきってしまったのだ。そばにだらしなくしばられている、この脱獄囚との応対で。

三人組はフォークをビフテキにつきさし、グラスをあわせた。

「すべての順調を祈って……」

しかし、その瞬間。その動きが止まった。

部屋のなかにベルの音が響きわたったのだ。それはすみの電話機からだった。

指揮者の男ははっと緊張したが、あわてずに聞いた。

「電話だな。どこからかかかってくる予定はあるのか」

夫婦はそれぞれ首を横に振った。どこからだっていい。もうなにが起ころうとどうでもいいのだ。

「そうか。では、ほっておこう。しばらくほっておけば、留守だと思ってあきらめるだろう」

電話のベルは単調な音でしばらく鳴っていたが、やがてそれも鳴りやんだ。

「どうも留守のようです。いくら呼んでも出ません」

警察のなかで警官の一人は報告した。それを聞いて、上役は少しほっとした。

「それはよかった。では、すぐ現場に行ってくれ」

そして、そばの椅子にうなだれている男に言った。

「まったく、おまえはとんでもないやつだ。おかかえ運転手をくびになったからといって、雇い主夫妻を殺そうとたくらむなんて。しかも、その方法として、時限装置で青酸ガス発生器を作り、商品見本をよそおって、速達小包みで送るとは、たちが悪い。自首した点はみとめるが、電話以外にまにあわない時間になってからとはな。だが、留守でよかった。留守でなかったら、いまごろ、あの家にいる者は虫一匹まで死んでいる。おまえもそれだけ罪が重くなるところだった。おまえは悪人のうちでも運のいいほうだぜ」

解説

各務三郎

若者が鍵をひろった。異国的な彫刻がほどこされた銀いろの美しい鍵。若者の想像がふくらみはじめる――これに合う鍵穴のむこうにはすばらしい人生がひろがっているかもしれない。

だが、いくら歩きまわっても開く扉はなかった。錠前屋や博物館でたずねてみても、何に使う鍵だかわからない。美しい鍵に魅入られた若者はとぼしい金をはたいては旅に出た。ときには外国まで足をのばすこともあった。それでも合う鍵穴のとびらは発見できなかった。

希望と絶望にさいなまれながら若者はしだいに年をとってゆく。肉体と精神の疲れは、やがて静かなあきらめの気持を生んだ。人生の良き伴侶だったと思うようにもなった。

思いたって彼は錠前屋をたずねる。「この鍵に合う錠を作ってもらえないだろうか。自分の室のドアにとりつけたいのだ」

錠ができあがった。彼はひとり室にこもって鍵をまわす。長い人生に望みつづけてきたかすかな響き――その夜、彼はやすらかな眠りについた。

夜がふけたころ、彼は扉の開く音に目を覚ました。暗闇にやさしい声がきこえる。

「あたしは幸運の女神。あの鍵は、あたしがわざと落しておいたの。……やっとドアを作っていただけたのね。……」

なぜ、もっと早くこなかったのか、という彼にこたえて、幸運を与える儀式は秘密におこなわれなければなりません、という。「さあ、望みをかなえてさしあげるわ」

やがて闇に横たわる老人の声。

「なにもいらない。いまの私に必要なのは思い出だけだ。それは持っている」

*

星新一の代表作のショート・ショート『鍵』のストーリーである。当時、海外ミステリの専門誌「ミステリ・マガジン」の編集長だった常盤新平氏から『鍵』の原稿をわたされ、割付けしながら読みおわったとき、うなってしまった。

良い作品に出会ったときの読後感は短い。

「いいだろう?」とうながされても、「いいですねえ!」とばかみたいにオウム返しをするだけ。

その月はショート・ショート特集号で、ロアルド・ダールの『廃墟にて』、バッド・シュールバーグの『脚光』、アーサー・ポージスの『1ドル98セント』など英米作家の十三作品を〈小悪魔が一ダース〉とうたって掲載の予定でいた。しかも、星さんの原稿は依頼したものではなかった。たぶん、雑誌と常盤氏にたいする好意のあらわれだったのだろう。シックな作家だな、と思った。

もちろん『鍵』の評判はよかった。編集者にとって、掲載作品がほめられるのはなによりの報酬である。翻訳雑誌の編集者としては、海外の単行本や雑誌から選び抜いて掲載した作品をほめ

られるのは自分の鑑識眼をほめられた気がしてはげみになるものだが、『鍵』の場合、純粋な読者として、良い作品に出会ったよろこびの気持が強かった。ヴィンテージもののワインを飲んだ感じに似ていた。編集後記に「短く読み終え、長く心を潤す美しいショート・ショート」と書いたのは、だれのワイン讃歌だったか、〈ワインは魂にうるおいを与え、悲しみをなだめ、やさしい感情を喚び覚ます〉のもじりにすぎなかった。

*

「いつのころだれが言い出したのか知らないが、小説とは人間を描くものだそうである。奇をてらうのが好きな私も、この点は同感である。評判のいい小説を読むと、なるほどそのとおりである。しかし、ここにひとつの疑問がある。人間と人物とは必ずしも同義語でない。人物をリアルに描写し人間性を探究するのもひとつの方法だろうが、唯一ではないはずだ。ストーリーそのものによっても人間性のある面を浮き彫りにできるはずだ。こう考えたのが私の出発点である。

もっとも、これはべつに独創的なことではない。アメリカの短編ミステリーは大部分このタイプである。人物を不特定の個人とし、その描写よりも物語の構成に重点がおかれている。そして人間とはかくも妙な事件を起こしかねない存在なのか、と読者に感じさせる形である。……」

（『きまぐれ博物誌』の「人間の描写」から）

「書く題材について、私はわくを一切もうけていない。だが、みずから課した制約がいくつかある。その第一、性行為と殺人シーンの描写をしない。希少価値を狙っているだけで、べつに道徳的な主張からではない。もっとひどい人類絶滅など、何度となく書いた。

第二、なぜ気が進まないのか自分でもわからないが、時事風俗を扱わない。外国の短編の影響でもあろうか。第三、前衛的な手法を使わない。ピカソ流の画も悪くはないが、怪物の写生にはむかないのではないだろうか。……」（『きまぐれ星のメモ』の「創作の経路」から）

*

こうした覚悟のうえに星新一の世界は成立している。明るくペシミスティックな人生観察者が創りだすさまざまな人生、くわえて磨かれた化石のように美しいさりげない文章。

星はひたすら物語る。『友を失った夜』は、地球上から最後の象が死んでゆく夜のおばあさんと坊やの会話。『むだな時間』では、TVコマーシャル消し器の発明者が吐く臨終のきわの短いことば。『症状』は、退屈な日常生活をそっくり再現する夢からのがれようとあせるサラリーマンの嘆き。

やがて吟遊詩人は口をつぐみ、一礼して去る。だが、その物語は村人の心のなかに納まりきってはいない。ある日、彼らの心に、たとえば『友を失った夜』物語が目覚め、ややちがったニュアンスでふたたび語りだす。

*

星新一の世界はハードボイルド派のロス・マクドナルドの世界に似ている。ロス・マクドナルドは、負い目をいだいて生きつづける者たちを理解し、心を寄せる。ハメットやチャンドラーと決定的にちがっているのは、ストイシズムだとかユニークな生活信条の持主を主人公にしている点ではない。人生を許容する目を主人公リュウ・アーチャーに与えている点にある。

数年前「ハードボイルドな星新一」という短文を書いたことがある。ハードボイルドの精神とは、抒情するために叙事しなければならなかった悔しい男の優しさにあると考えていたわたしは、直観で星新一と結びつけた。

しかし考えれば考えるほど、星新一とハードボイルド作家たちとは遠ざかった。ハードボイルド派の作家たちは大戦争に参加していて、どこか作品に硝煙の臭いがするが、星にはそれがないとか、ハードボイルド派の物語の無骨さは星にはないとか、星の文体は色を帯びるのを拒否しているなどと挙げながら、ツー・テン・ジャックの全マイナスがプラスに変ることを期待したのだった。無惨に失敗したが、どこかでつながっているはずだという考えを捨てきれなかった。

といっても、だからどうなんだ？　ときかれても困る。ロス・マクドナルドが好きで、星新一が好きだから、どこかに共通するところがあってほしいという感情を充足させられればうれしい。ただ、それだけのことで、どちらがすぐれているかは、好きずきの問題にすぎない。発見はどんなにくだらないことでも、発見者の心を明るませるものだ。

*

『転機』を読んだときのおかしさはまたかくべつである。宇宙人に誘拐される主人公のぼやきと決意を吐露するくだりにくると万才三唱の気分になってくる。『賢明な女性たち』も男性的な笑いがうかんでくる。

星ファンタジアは、その世界がわたしたちの生活から遠ざかるごとに美しいエピグラムの光芒を冴えわたらせる。

これは、彼のミステリー・ショート・ショートが、ややもすればシシ食った報いふうのパターンに流れがちなのと好対照である。『老後の仕事』『目撃者』がその例だが、みごとにすり抜けた作品に『報酬』『すばらしい食事』がある。とくに『すばらしい食事』は、一粒のカラシ種のごとき信仰、いや犯罪を、しだいにヒステリカルにファンタスティカルに発展させてゆく手腕がみごと。星ワインの放つ貴重な芳香の源ともみなすことができる。

最近では、クライム・ストーリーの範疇に属する〝奇妙な味〟の作品に佳作がみられる。『ごたごた気流』では『門のある家』がそうだ。人と家との価値が逆転しているのを主人公はきちんと得心している。読む者は現在と過去のあいだのトポロジー的空間に投げこまれたような気がする不思議な作品である。『夜のかくれんぼ』中の『自信』は、見知らぬ他人にアパートの部屋を占領され「おれはおまえだ」と宣言されてしまう男が主人公。ついに納得づくで追いだされたのだが、誰でもなくなってしまった自分にふしぎな安堵をおぼえる。

これらの作品はストーリー自体に妙なすごみと迫力があり、星宇宙が形成されつつあるしるしを見る気持がする。

星新一の作品は、ヴィンテージもののワインだと書いた。だが、味わうのは選びだした読者である。〈植物の生長に水が必要なように、ワインは魂の成長に不可欠なもの〉そして主料理はもちろんわたしたちの哀歓に満ちた人生なのである。

（昭和四十九年九月）

ボンボンと悪夢(あくむ)

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草98 E

昭和四十九年十月三十日発行
昭和五十年十二月三十日七刷

著者 星(ほし)新(しん)一(いち)
発行者 佐藤亮一
発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部(〇三)二六六―五一一一
編集部(〇三)二六六―五四一一
振替 東京四―八〇八番

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・加藤製本株式会社

剣は知っていた(上下)　柴田錬三郎
江戸群盗伝　柴田錬三郎
続江戸群盗伝　柴田錬三郎
美男城　柴田錬三郎
眠狂四郎無頼控(全六冊)　柴田錬三郎
眠狂四郎独歩行(上下)　柴田錬三郎
眠狂四郎殺法帖(上下)　柴田錬三郎
孤剣は折れず　柴田錬三郎
赤い影法師　柴田錬三郎
運命峠(前後)　柴田錬三郎
梟の城　司馬遼太郎
風神の門　司馬遼太郎
人斬り以蔵　司馬遼太郎
国盗り物語(全四冊)　司馬遼太郎
燃えよ剣(上下)　司馬遼太郎
新史太閤記(上下)　司馬遼太郎

関ヶ原(上中下)　司馬遼太郎
峠(上下)　司馬遼太郎
出発は遂に訪れず　島尾敏雄
旧主人・芽生　島崎藤村
嵐・ある女の生涯　島崎藤村
春　島崎藤村
桜の実の熟する時　島崎藤村
家(上下)　島崎藤村
破戒　島崎藤村
夜明け前(一上下・二上下)　島崎藤村
藤村詩稿　島崎藤村
千曲川スケッチ　島崎藤村
新生(上下)　島崎藤村
父子鷹(上下)　子母沢寛
おとこ鷹(上下)　子母沢寛

勝海舟(全六冊)　子母沢寛
次郎物語(全五冊)　下村湖人
プールサイド小景・静物　庄野潤三
総会屋錦城　城山三郎
役員室午後三時　城山三郎
桑の実　鈴木三重吉
夜あけ朝あけ　住井すゑ
夏の終り　瀬戸内晴美
女徳　瀬戸内晴美
いずこより　瀬戸内晴美
妻と女の間(上下)　瀬戸内晴美
遠い声　瀬戸内晴美
愛と死の書　芹沢光治良
巴里に死す　芹沢光治良
結婚　芹沢光治良
愛と知と悲しみと　芹沢光治良

わが恋の墓標　曾野綾子
砂糖菓子が壊れるとき　曾野綾子
たまゆら　曾野綾子
生命ある限り　曾野綾子
二十一歳の父　曾野綾子
華やかな手　曾野綾子
悲の器　高橋和巳
我が心は石にあらず　高橋和巳
邪宗門(上下)　高橋和巳
黄昏の橋　高橋和巳
如何なる星の下に　高見順
滝口入道　高山樗牛
無限抱擁　滝井孝作
風媒花　武田泰淳
「愛」のかたち・才子佳人　武田泰淳
ひかりごけ・海肌の匂い　武田泰淳
森と湖のまつり　武田泰淳

貴族の階段　武田泰淳
ビルマの竪琴　竹山道雄
晩年　太宰治
斜陽　太宰治
ヴィヨンの妻　太宰治
津軽　太宰治
人間失格　太宰治
走れメロス　太宰治
お伽草紙　太宰治
グッド・バイ　太宰治
二十世紀旗手　太宰治
惜別　太宰治
パンドラの匣　太宰治
新ハムレット　太宰治
きりぎりす　太宰治
剣ヶ崎・白い罌粟　立原正秋
冬の旅　立原正秋

舞いの家　立原正秋
紬の里　立原正秋
オリンポスの果実　田中英光
ここだけの女の話　田辺聖子
痴人の愛　谷崎潤一郎
刺青・秘密　谷崎潤一郎
春琴抄　谷崎潤一郎
猫と庄造と二人のおんな　谷崎潤一郎
吉野葛・盲目物語　谷崎潤一郎
蓼喰う虫　谷崎潤一郎
卍(まんじ)　谷崎潤一郎
少将滋幹の母　谷崎潤一郎
細雪(上中下)　谷崎潤一郎
鍵・瘋癲老人日記　谷崎潤一郎
落城・足摺岬　田宮虎彦
霧の中　田宮虎彦

銀心中　田宮虎彦
肉体の門・肉体の悪魔　田村泰次郎
蒲団・重右衛門の最後　田山花袋
田舎教師　田山花袋
リツ子・その愛　檀一雄
リツ子・その死　檀一雄
安土往還記　辻邦生
廻廊にて　辻邦生
北の岬　辻邦生
夏の砦　辻邦生
サラマンカの手帖から　辻邦生
家族八景　筒井康隆
母のない子と子のない母と　壺井栄
壺井栄童話集　壺井栄
二十四の瞳　壺井栄
子供の四季　坪田譲治
風の中の子供　坪田譲治

坪田譲治童話集　坪田譲治
日本むかしばなし集　坪田譲治
赤い鳥傑作集　坪田譲治編
高安犬物語　戸川幸夫
戸川幸夫動物文学（一二三）　戸川幸夫
縮図　徳田秋声
あらくれ　徳田秋声
太陽のない街　徳永直
ふらんす物語　永井荷風
すみだ川・二人妻　永井荷風
つゆのあとさき・踊子　永井荷風
濹東綺譚　永井荷風
腕くらべ　永井荷風
青梅雨　永井龍男
天の夕顔　中河与一
李陵・山月記　中島敦
土　長塚節

歌のわかれ　中野重治
むらぎも　中野重治
梨の花　中野重治
夜半楽　中村真一郎
碑・テニヤンの末日　中山義秀
青銅の基督　長与善郎
吾輩は猫である　夏目漱石
倫敦塔・幻影の盾　夏目漱石
坊っちゃん　夏目漱石
三四郎　夏目漱石
それから　夏目漱石
門　夏目漱石
明暗（上下）　夏目漱石
草枕　夏目漱石
虞美人草　夏目漱石
彼岸過迄　夏目漱石
行人　夏目漱石

こころ　夏目漱石
道草　夏目漱石
硝子戸の中　夏目漱石
縦走路　新田次郎
強力伝・孤島　新田次郎
孤高の人（上下）　新田次郎
蒼氷・神々の岩壁　新田次郎
チンネの裁き・消えたシュプール　新田次郎
岩壁の掟・偽りの快晴　新田次郎
厭がらせの年齢　丹羽文雄
哭壁　丹羽文雄
美しき嘘　丹羽文雄
青麦　丹羽文雄
菩提樹　丹羽文雄
命なりけり　丹羽文雄
日日の背信　丹羽文雄
蛇と鳩　丹羽文雄

飢える魂　丹羽文雄
禁猟区　丹羽文雄
顔　丹羽文雄
運河　丹羽文雄
献身　丹羽文雄
真知子　野上弥生子
秀吉と利休　野上弥生子
エロ事師たち　野坂昭如
真夜中のマリア　野坂昭如
アメリカひじき・火垂るの墓　野坂昭如
受胎旅行　野坂昭如
水虫魂　野坂昭如
好色の魂　野坂昭如
心中弁天島　野坂昭如
てろてろ　野坂昭如
暗い絵・崩解感覚　野間宏
真空地帯　野間宏

浜田広介童話集　浜田広介
放浪記　林芙美子
うず潮　林芙美子
浮雲　林芙美子
めし　林芙美子
夏の花・心願の国　原民喜
挽歌　原田康子
北の林　原田康子
病める丘　原田康子
にごりえ・たけくらべ　樋口一葉
大つごもり・わかれ道　樋口一葉
土と兵隊・麦と兵隊　火野葦平
こういう女　平林たい子
うつむく女　平林たい子
楢山節考　深沢七郎
笛吹川　深沢七郎
東北の神武たち　深沢七郎

千秋楽 深沢七郎
人間滅亡の唄 深沢七郎
草の花 福永武彦
忘却の河 福永武彦
廃市・飛ぶ男 福永武彦
風土 福永武彦
夢みる少年の昼と夜 福永武彦
愛の試み 福永武彦
加田伶太郎全集 福永武彦
平凡 二葉亭四迷
浮雲 二葉亭四迷
木石・悉皆屋康吉 舟橋聖一
雪夫人絵図 舟橋聖一
白い魔魚 舟橋聖一
花の生涯 舟橋聖一
花の素顔 舟橋聖一
石狩平野(上下) 船山馨

ボッコちゃん 星新一
ようこそ地球さん 星新一
気まぐれ指数 星新一
ほら男爵 現代の冒険 星新一
ボンボンと悪夢 星新一
悪魔のいる天国 星新一
広場の孤独 堀田善衛
歴史 堀田善衛
時間 堀田善衛
海鳴りの底から 堀田善衛
燃ゆる頬・聖家族 堀辰雄
風立ちぬ・美しい村 堀辰雄
かげろふの日記・曠野 堀辰雄
幼年時代・晩夏 堀辰雄
菜穂子・楡の家 堀辰雄
大和路・信濃路 堀辰雄
堀辰雄 妻への手紙 堀多恵子編

小説日本芸譚 松本清張
或る「小倉日記」伝 松本清張
黒地の絵 松本清張
西郷札 松本清張
佐渡流人行 松本清張
張込み 松本清張
駅路 松本清張
わるいやつら(上下) 松本清張
歪んだ複写 松本清張
けものみち 松本清張
半生の記 松本清張
黒い福音 松本清張
かげろう絵図(上下) 松本清張
ゼロの焦点 松本清張
眼の壁 松本清張
点と線 松本清張
黒い画集 松本清張

霧の旗 松本清張
蒼い描点 松本清張
影の地帯 松本清張
時間の習俗 松本清張
砂の器(上下) 松本清張
蒼ざめた礼服 松本清張
黒の様式 松本清張
Dの複合 松本清張
鷗外の婢 松本清張
分離の時間 松本清張
死の枝 松本清張
地の骨(上下) 松本清張
小説東京帝国大学 松本清張
笹まくら 丸谷才一
塩狩峠 三浦綾子
忍ぶ川 三浦哲郎
結婚 三浦哲郎

笹舟日記 三浦哲郎
仮面の告白 三島由紀夫
花ざかりの森・憂国 三島由紀夫
愛の渇き 三島由紀夫
盗賊 三島由紀夫
禁色 三島由紀夫
鏡子の家 三島由紀夫
潮騒(しおさい) 三島由紀夫
金閣寺 三島由紀夫
美徳のよろめき 三島由紀夫
永すぎた春 三島由紀夫
沈める滝 三島由紀夫
獣の戯れ 三島由紀夫
美しい星 三島由紀夫
近代能楽集 三島由紀夫
午後の曳航 三島由紀夫
宴のあと 三島由紀夫

音楽 三島由紀夫
真夏の死 三島由紀夫
獅子・孔雀 三島由紀夫
青の時代 三島由紀夫
五番町夕霧楼 水上勉
霧と影 水上勉
雁の寺・越前竹人形 水上勉
飢餓海峡 水上勉
京の川 水上勉
西陣の女 水上勉
越後つついし親不知 水上勉
凍てる庭 水上勉
風の又三郎 宮沢賢治
銀河鉄道の夜 宮沢賢治
伸子 宮本百合子
播州平野・風知草 宮本百合子
二つの庭 宮本百合子